

椀とほぼ同時期と考えられる。このため、溝群は、南部で検出された区画溝で囲まれた屋敷に隣接し、ほぼ同時期に営まれていたことがわかる。また、区画溝と同じ方向で掘削されていることから、屋敷との関係は強いものと考えられる。特に、溝E-19や溝E-28、溝E-71、溝E-33、溝E-34などの東西方向の溝は、区画溝の一部である可能性の高いものである。

最終遺構面検出の遺構は、ピット群と溝群であり、重複関係による明確な差は認められないため、はっきりしない点も多いが、遺物によりおおむね2時期に分けることができる。隣接する泉佐野市教育委員会の調査成果と比較すると、おおむねE地区のピット群は、区画溝で囲まれた屋敷より古く、溝群はほぼ同時期といえる。このため、今回の調査区付近にもともと掘立柱建物があり、その後、区画溝を伴う屋敷がつくられた時点で、これらの建物が整理され、区画溝の外側には新たに耕作地がつくられたものと考えられることができる。

(2) 第3面

西半部（和歌山側）では、包含層が良好に残存していることから、第3面を検出することができた。ただし、検出箇所は全面ではなく、調査区中央部と西端部に限られる。中央部においては、旧耕作土層の下からさらに耕作にともなう鋤溝が検出された。地山面検出の溝群とほぼ同一方向でつくられており、継続して同じ区画の耕作地が存在していたことを示している。

地山面の成果においても、ピット群の後に溝群がつくられていることが判明しているため、継続して耕作地として利用されていたといえる。西端部では、溝が平行して数条走っており、鋤溝というよりは、用水溝や排水溝と考えられる。この部分で検出された溝群は、幅約0.4～0.5mを測り、鋤溝の幅約0.1～0.2mと比較すると、やや規模の大きな溝ということが出来る。上面は削平をうけているため当初の規模ははっきりしないが、現状で深さ約5cm以内を測り、鋤溝と同様であった。遺物の出土はなく、時期を確定することは困難であるが、中世後期から近世初頭頃を想定している。

第3面は、調査区全体にひろがっているわけではなく、西端部と中央部で部分的に検出されたのみである。西端部と中央部の中間位置には大規模な攪乱が存在するほか、その影響で上面の包含層などが削平をうけていることから、この部分での遺構検出はできなかった。また、東半部（難波側）は、前から述べているように、地山面に至る削平が著しいことから第3面は残存していない。

また、D-2地区と同様に高い位置にあることから、線路敷設の際の整地などの影響により、全面にわたって第2面は確認できなかった。

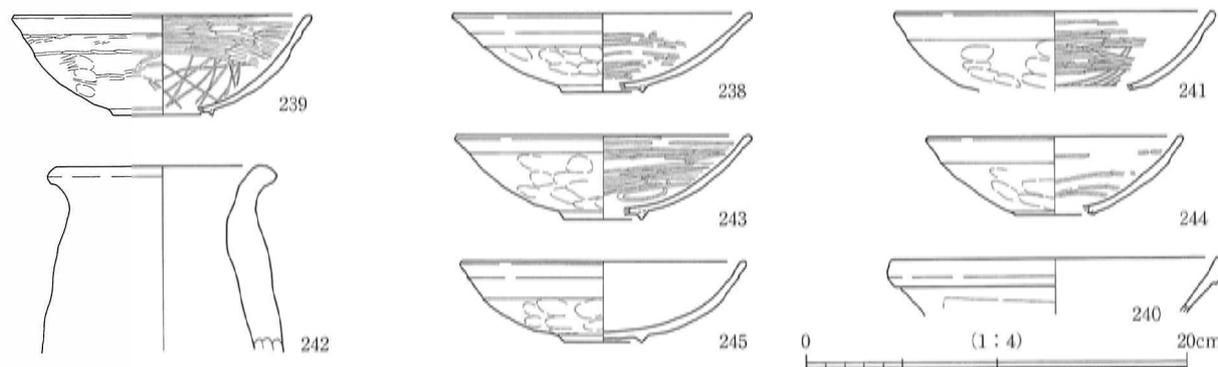


図74 E地区出土遺物

3. 遺物

全体に遺物量は少ないが、土坑やピットからの出土が比較的多い。包含層はほとんどが削平されていることから、遺物量は少ない。遺物は、土師器、須恵器、瓦器椀・小皿、陶磁器などである。遺構出土品はほぼ中世におさまっており、包含層からの遺物も混入品がみられるものの、中世のものがほとんどである。小破片が多く、形を復元できるものは少なく、図化できたものもわずかである。ここでは、遺構出土遺物で、図化できたもののみをあげておく。

ピット E-89 (図74)

図74の238は、瓦器椀である。ピットの底部付近からまともに出て出土したものであり、約1/4残存している。口縁部外面は、横ナデ調整が2段にわたって施されており、外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面には横方向のヘラミガキが数条施されている。

溝 E-34 (図74、図版52)

239・240は、溝 E-34からの出土遺物である。239は瓦器椀である。口縁部外面は、横ナデ調整が2段にわたって施されており、外面は指オサエの後、横方向のヘラミガキ調整がみられる。内面は、口縁部付近で横方向のヘラミガキ調整が密に施されているが、下半部は粗いヘラミガキが数条みられる程度である。240は、白磁鉢口縁部である。全体に灰白色を呈している。小破片のため全体形は復元できないが、口縁部には釉薬がかかっており、貫入などが認められる。体部外面は釉薬がかかっておらず、胎土が露出している。

溝 E-28 (図74)

241は、瓦器椀である。底部を欠損している。口縁部外面は、強い横ナデにより凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面には、横方向のヘラミガキが密に施されている。

溝 E-26 (図74)

242は、土師器蛸壺である。体部下半から底部を欠損している。体部の器厚約1.7cmの真蛸壺で、口縁部は厚く仕上げられている。内外面ともナデ調整が施されており、この調整の中で口縁部に縄をかけるへこみをつくっている。焼成がやや不良なため、表面に傷が多くついており、全体に外面調整ははっきりしない。

溝 E-77 (図74、図版52)

243～245は、溝 E-77からの出土遺物である。243は瓦器椀で、底部を欠損する。体部外面は指オサエ後、ナデ調整が施されている。口縁部外面は、強い横ナデにより、やや凹線状を呈している。内面には横方向のヘラミガキが比較的密に施されている。244は瓦器椀で、底部を欠損する。体部外面には、指頭圧痕が顕著に残っている。口縁部外面は、強い横ナデにより、やや凹線状を呈している。内面には横方向のヘラミガキが数条施されている。245は瓦器椀である。口縁部外面は、横ナデ調整が2段にわたって施されており、外面は指オサエの後、横方向のヘラミガキ調整がみられる。体部下半には指頭圧痕が残っている。内面は、ナデ調整の後、ヘラミガキ調整が施されているが、全体にヘラミガキの単位はわかりにくい。

第4節 F地区

F地区も、E地区と同様にD-2地区からひろがる台地上に位置している。ただ、地山面がE地区よりやや低い位置にあるため、線路建設の際やそれ以前の整地などによる削平部分がD-2地区やE地区よりも少なく、包含層や遺構面の保存状態は比較的良好であった。駅に近いことや住宅密集地にあたることから、ここでも線路の架線にともなう電柱や信号設置のための攪乱が目立つ。

全体に遺構面は平坦であるが、西端部（和歌山側）では西方向に下がるやや浅い谷状地形が検出されており、F地区と若宮遺跡の間で調査区を横切る円田川に至っている。ほぼ中央部にも調査区を横切る浅い谷状落ち込みが認められ、これより東半部（難波側）で、ピット群や溝が多く検出されている。F地区においても、D-2地区やE地区と同様に隣接部分での調査が泉佐野市教育委員会によりおこなわれていることから、この調査成果により大型の掘立柱建物を復原することができた。西半部（和歌山側）では、溝が検出されたのみで、ピットなどはみつかっていない。

なお、今回の調査区設定において、F地区と若宮遺跡（調査開始時にはG地区と呼称）の間に未調査部分が生じているが、これは調査開始時点でこの部分が遺跡範囲外であったことによるものである。

1. 層序

台地上に位置することから、D-2地区などと同様に線路盛土の堆積は薄いですが、E地区に比べて地山面が低くなっていることから、線路建設時の削平はほとんどみられず、包含層は比較的良好に残存していた。ただ、100年以上にわたる鉄道路線の地盤であるという特殊性のため、鉄分や油分などによる土壤汚染が進行しており、本来の土色を確認することが困難であった。このことは、他の地区でも認められたことであるが、線路盛土内でおさまっていることが多く、直接包含層に大きな影響が出ているのは、F地区のみである。

E地区などでみられた地山面までの削平もないことから、D-2地区の一部で残存していた旧耕作土除去面である第3面を確認することができた。第3面の下に堆積する灰オリーブ色（本来の色はもっと赤みがかったものと考えられる）シルト混細砂層やにぶい橙色シルト混細砂層は、さらに古い時期の耕作土層といえる。この層を除去した面でも遺構が確認されたため、第4面とした。この下には褐灰色シルト混細砂層やにぶい黄橙色シルト混細砂層などが比較的厚く堆積しているが、これらを除去した最終遺構面である地山面において、ピット群や耕作にともなう溝が検出された。前述したように西端部（和歌山側）から調査区外に向かっては、円田川の氾濫原にあたるものと考えられ、耕作土層や包含層が認められない。ただ、この部分は道路が横切っており、踏切や横断する水路（ヒューム管埋設）などもみられることから、工事にともなう掘削が地山面までおよんだ可能性もある。

2. 遺構

西端部（和歌山側）に、盛土除去面がそのまま地山面である部分がみられるが、それ以外は基本的に遺構面は3面を確認することができた。その中で上面である第3面・第4面はほぼ全面が耕作面であり、耕作にともなう溝や鋤溝の検出にとどまっており、ピットなどの建物跡などはみられなかった。最終遺構面は地山面であり、この面においてピット群や土坑などがまとまって検出された。遺物量も多く、大半の遺物はこの面からの出土である。F地区においても上町東遺跡部分の他の地区と同様に、中世のものが主体であり、それ以前のはほとんどみられない。

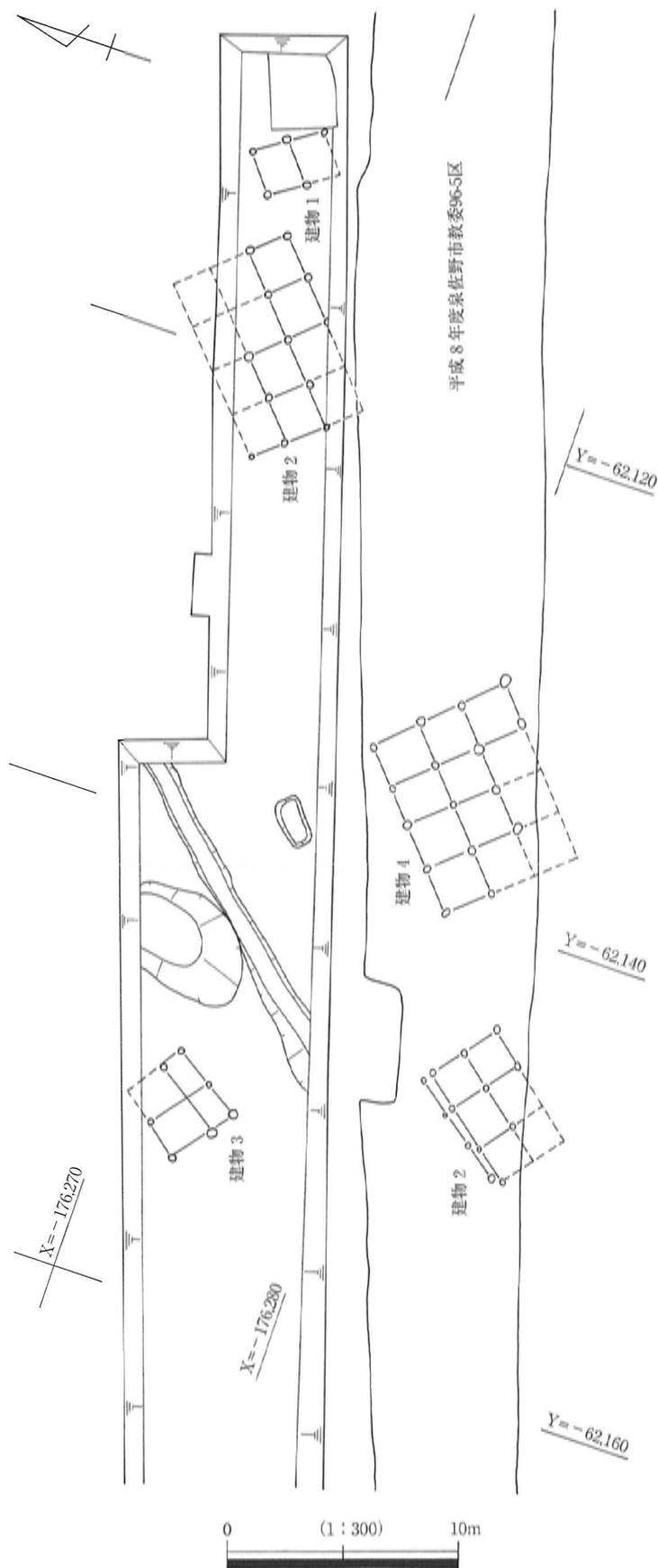


図75 F地区・泉佐野市教委96-5区掘立柱建物模式図

(1) 最終遺構面

E地区の西半部（和歌山側）からは、地山面が一段下がっていることからF地区においても、包含層や地山面における遺構は比較的良好に残存している。特に東半部（難波側）では、ピットが多く検出されたほか、ほぼ同一方向の溝などもみられる。比較的密集した状況で検出されているが、ピット群と溝群が同時に存在したことは考えられず、やや時期差があるものといえる。

ここでも他の地区と同様に、南側に隣接した仮線路部分の調査が、平成8年度に泉佐野市教育委員会によっておこなわれており（96-5区）、掘立柱建物や溝などが検出されている。この調査で掘立柱建物が復原されていたため、今回の調査区においても狭い範囲の調査ながら、検出されたピット群からほぼ同一方向の掘立柱建物を3棟復原することができた。前述したように、E地区とF地区を区切る現在の道路が、E地区の南側で検出された屋敷の区画溝とほぼ重なっている。F地区では屋敷の区画溝と考えられるような溝は検出されておらず、E地区側とは建物の様相が異なっている。このため、この区画を境に土地の利用条件が異なっていることがわかる。

1) 建物群・ピット群

東端部（難波側）で特にピットが密集した状況で検出された。この部分は調査区の幅が約4mときわめて狭く、今回の調査のみでは掘立柱建物の復原は困難であった。隣接する泉佐野市教育委員会調査区（96-5区）で復原された掘立柱建物や区画溝の方向などの成果をもとに、復原作業にとりかかっ

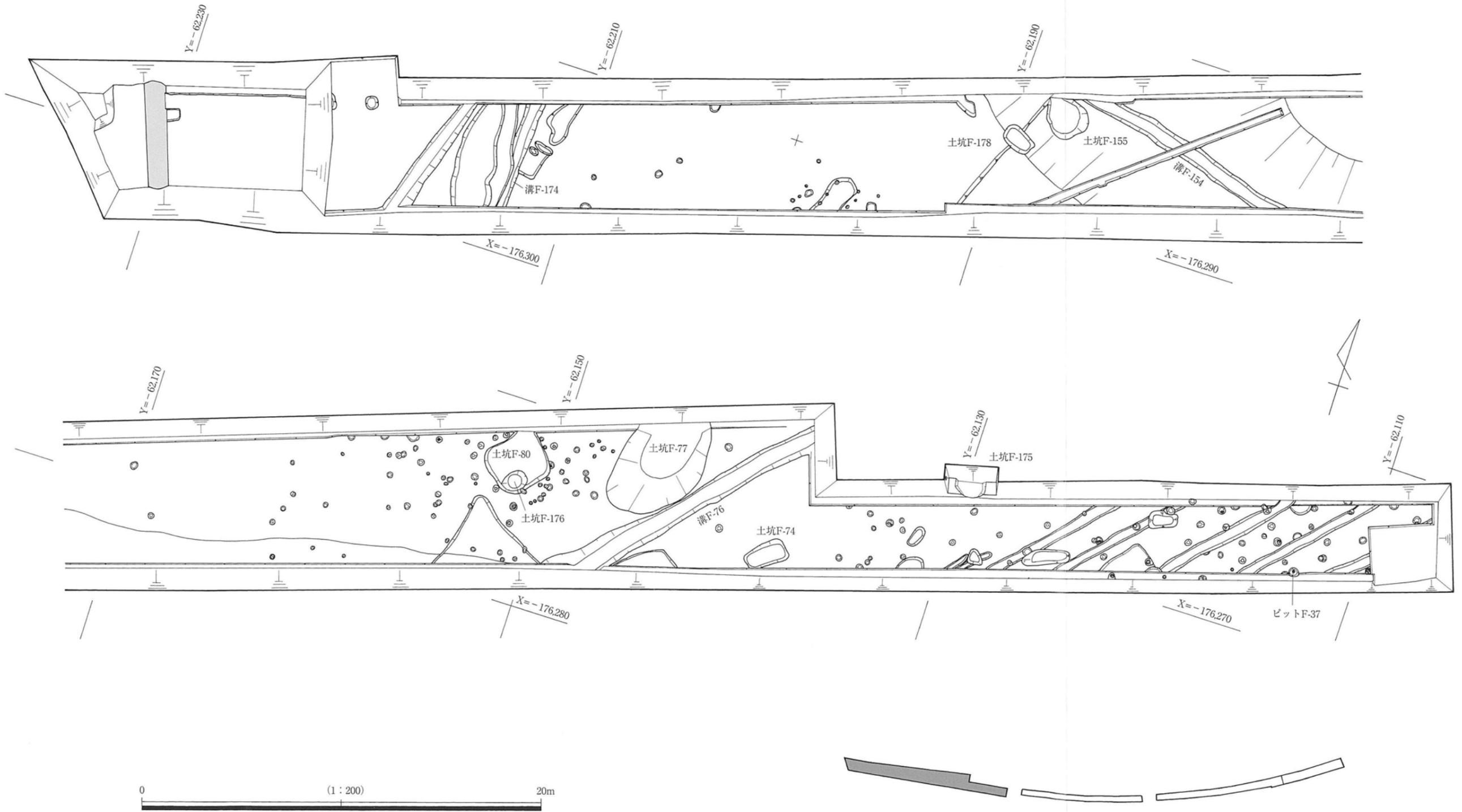


図76 F地区最終遺構面平面図

た結果、この部分でおおむね同じ方向に並ぶピット列がみつかったことから、建物を2棟復原することができた。

また、調査区のほぼ中央部においても、まとめてピット群が検出されており、この部分でも他の建物とほぼ同一方向の掘立柱建物を1棟復原することができた。東端部（難波側）と中央部の建物群の間では、ピットの検出が少なくなっており、やや間隔があいていることから、異なるグループの建物といえるかもしれない。

建物1（図77、図版33）

東端部（難波側）で検出され、さらに調査区外へひろがる可能性がある。ただ、調査区の南側に隣接する泉佐野市教育委員会調査区（96-5区）で、関連する柱穴が検出されていないことから、南にひろがることは考えられない。このため、あまり規模は大きくならず、小型の建物といえる。

現状で、1間（2.1m）×

2間（3.2m）を確認しているが、南側と東側は調査区外であるため、全体の規模ははっきりしない。そのため、桁行と梁行は不明であるが、長軸方向をもとにした方位は、N-33°-Wである。柱間寸法は、長軸方向（南北方向）で約1.5m、短軸方向（東西方向）で2.1mを測る。柱穴掘方は、ほぼ円形を呈しており、径約30cm、深さ10~30cmである。埋土は、オリーブ灰色細砂混シルトや灰黄褐色細砂混シルトなどが断面観察で確認できるが、前述したように土壤汚染が進行していることから、オリーブ灰色はほぼ灰黄褐色ということができ、埋土に差はほとんどない。柱穴からは根石などは検出されていない。遺物は、土師器や瓦器などの細片が出土している。

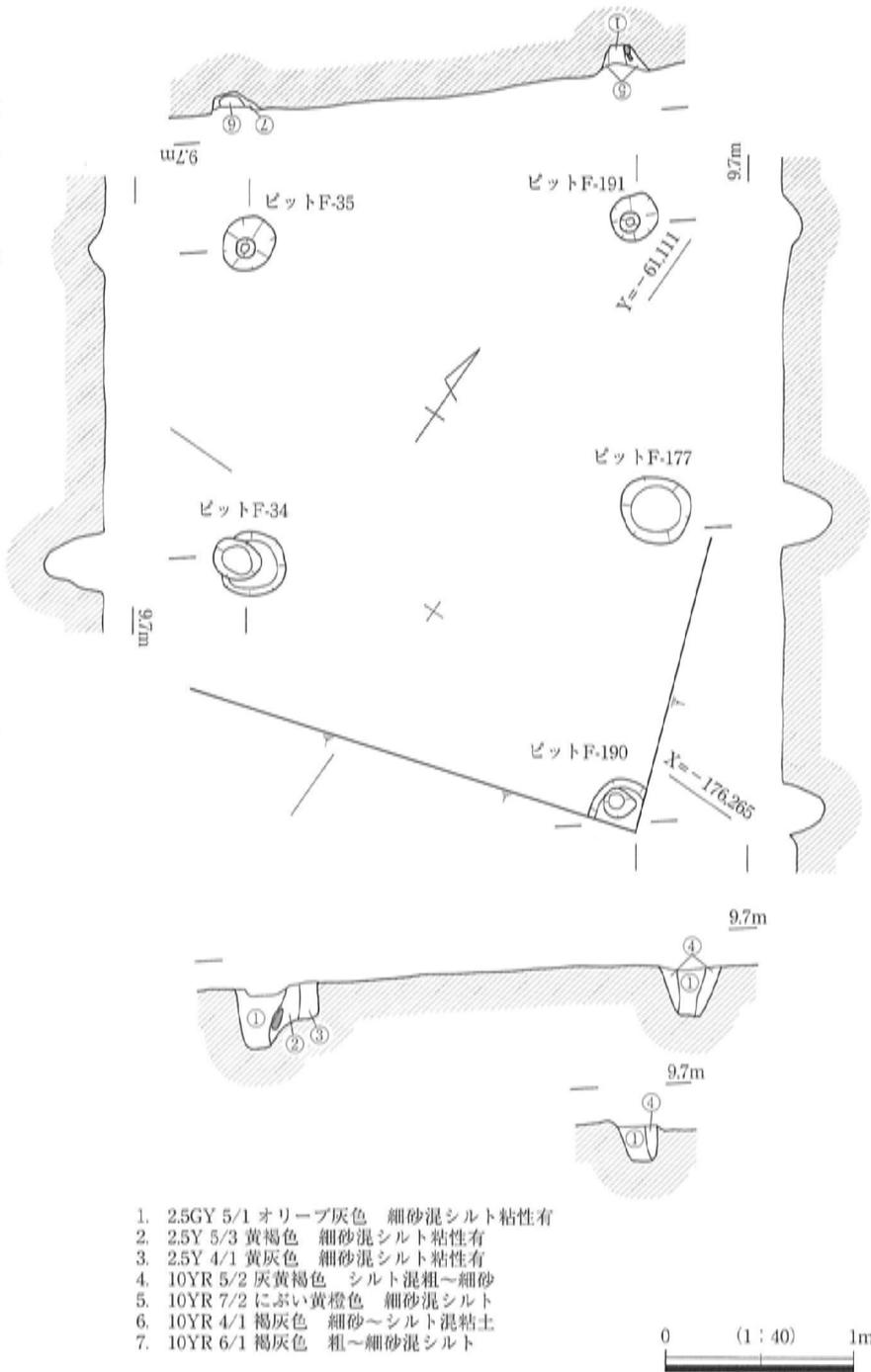


図77 F地区建物1平・断面図

建物 2 (図78、図版34)

建物 1 の西側で、おおむね同じ方向で検出された大型の建物である。北側と南側が調査区外へひろがることから、全体の規模ははっきりしない。建物 1 と同様に桁行と梁行は不明であるが、調査区の南側に隣接する泉佐野市教育委員会調査区 (96 - 5区) で関連する柱穴が検出されていないことや、同調査区内で復原された大型建物の桁行が確定していることから、この建物と同様の方向をもつ建物と考えることができる。

現状で、3 間 (5.5m) × 4 間 (8.5m) を確認しているが、北側がさらに調査区外にひろがる可能性があることから、梁行は伸びることも考えられる。総柱の建物で、主軸方向は N-48° -E である。柱間寸法は、桁行で西から 2.0m、2.2m、2.1m、2.2m の平均 2.1m、梁行で北から 1.7m、1.8m、1.9m の平均 1.8m を測る。調査区端部で検出された柱穴があるため、柱間は必ずしも一定ではないが、調査区内で検出されている柱穴の柱間はほぼ一定であり、かなり計画性をもって建てられた建物であることがわかる。柱穴掘方は、ほぼ円形を呈しており、径 20~40cm、深さ 10~30cm である。埋土は、暗オリーブ灰色シルト混細砂や黄褐色シルト混細砂、褐灰色細砂混シルトなどが断面観察で確認できるが、土壤汚染のため、暗オリーブ灰色はほぼ褐灰色といえる。おおむね、建物 1 の埋土と同じ状況であるといえる。建物を構成する柱穴のうち、もっとも東端に位置するピット F-40 からは、根石と考えられる約 10cm 四方の平石などが出土している。他の柱穴からは、同様の根石などは検出されていない。遺物は、土師器や瓦器などの細片が出土している。

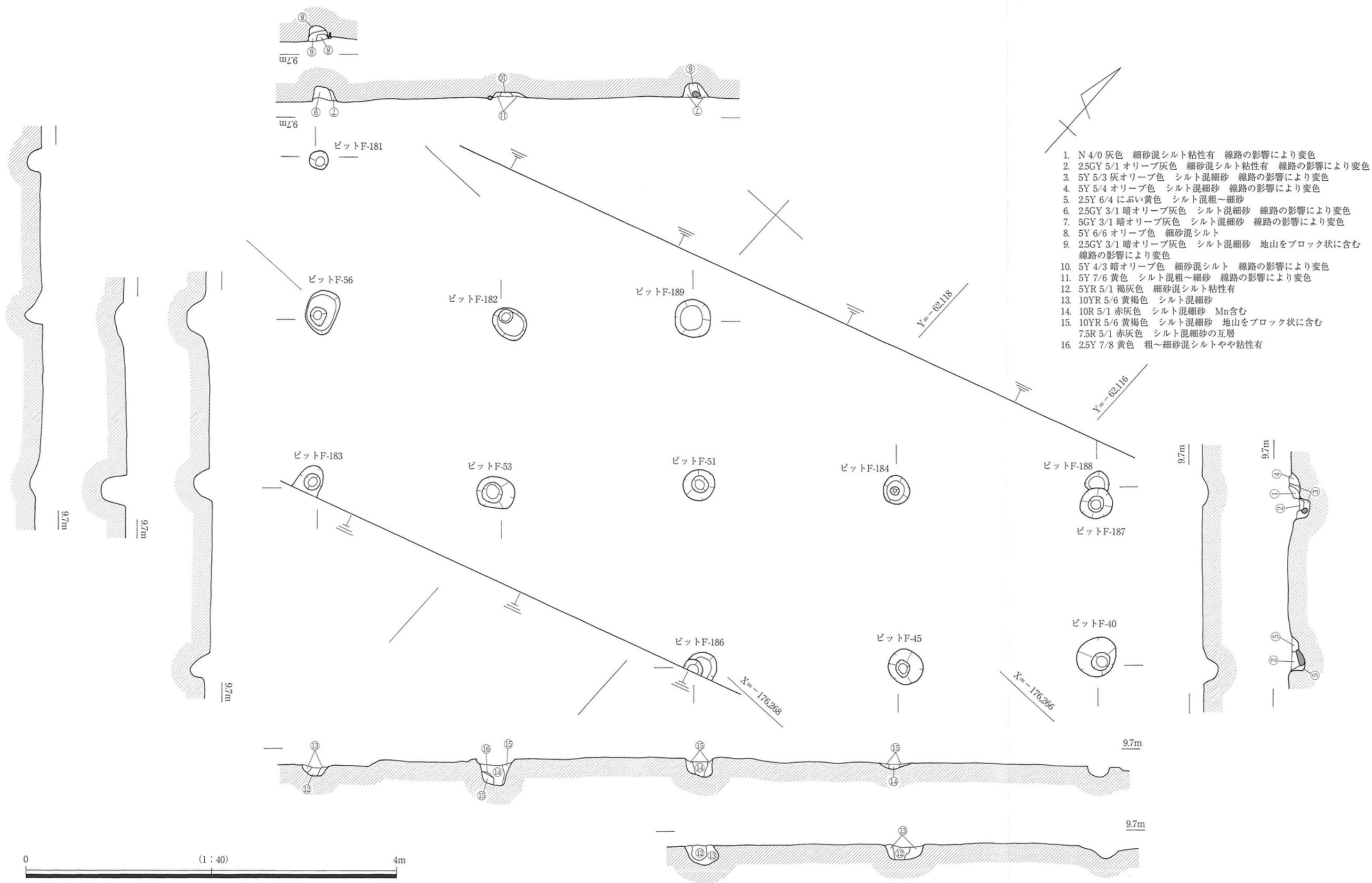
建物 3 (図79、図版35)

調査区のほぼ中央部で検出され、さらに調査区外へひろがる可能性がある。周辺には掘立柱建物の柱穴と考えられるピット群がまとまってみつかり、この部分に複数の建物が存在していたことが推測されるが、復原することができなかった。土坑 F-80・176 と重複しており、ちょうど土坑が建物の範囲内におさまったかたちになっているが、直接の関係はないものといえる。なお、検出状況から新旧関係は、ピット群や建物に比べて土坑のほうが新しいことがわかる。

現状で、2 間 (3.7m) × 2 間 (3.2m) を確認しているが、北側がさらに調査区外にひろがる可能性がある。桁行と梁行は不明であるが、短軸方向の柱間寸法が偏っていることから、現在のところ、短軸方向を桁行と考えて大過ないものといえる。短軸方向の方位は、N-50° -W である。柱間寸法は、桁行で北から 2.0m、1.2m、梁行で 1.8m、1.9m を測る。南側の柱穴は比較的規模が小さいことから、この部分は底の可能性も考えられる。中央部分ではピットがみつからないが、土坑と重複していることから、総柱の建物だったかどうかは不明である。柱穴掘方は、ほぼ円形や楕円形を呈しており、径 25~40cm、深さ 10~20cm である。埋土は細かく分かれるが、ほぼ灰褐色シルトと明黄褐色シルト混粗砂が混在しており、粘性が強い状況である。ここでは、土壤汚染の影響は受けていない。東端部 (難波側) で検出された建物の柱穴の埋土とは、やや様相が異なっている。建物を構成する柱穴のうち、もっとも南端に位置するピット F-180 からは、根石と考えられる約 10cm 四方の平石が出土している。他の柱穴からは、同様の根石などは検出されていない。遺物は、土師器や瓦器などの細片が出土している。

ピット群

前述したように、東端部 (難波側) と中央部にまとまってピット群が検出されている。今回は、隣接した調査区の成果により建物を復原することができたが、狭い調査区での建物復原の困難さを実感した。東端部 (難波側) におけるピットの中には、柵列状に並ぶピット群もみられるが、建物と方向が異なっ



1. N 4/0 灰色 細砂混シルト粘性有 線路の影響により変色
2. 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂混シルト粘性有 線路の影響により変色
3. 5Y 5/3 灰オリーブ色 シルト混細砂 線路の影響により変色
4. 5Y 5/4 オリーブ色 シルト混細砂 線路の影響により変色
5. 2.5Y 6/4 にぶい黄色 シルト混粗～細砂
6. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色 シルト混細砂 線路の影響により変色
7. 5GY 3/1 暗オリーブ灰色 シルト混細砂 線路の影響により変色
8. 5Y 6/6 オリーブ色 細砂混シルト
9. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色 シルト混細砂 地山をブロック状に含む 線路の影響により変色
10. 5Y 4/3 暗オリーブ色 細砂混シルト 線路の影響により変色
11. 5Y 7/6 黄色 シルト混粗～細砂 線路の影響により変色
12. 5YR 5/1 褐灰色 細砂混シルト粘性有
13. 10YR 5/6 黄褐色 シルト混細砂
14. 10R 5/1 赤灰色 シルト混細砂 Mn含む
15. 10YR 5/6 黄褐色 シルト混細砂 地山をブロック状に含む 7.5R 5/1 赤灰色 シルト混細砂の互層
16. 2.5Y 7/8 黄色 粗～細砂混シルトやや粘性有

図78 F地区建物2平・断面図

ていることから、同時に存在したものとはいえない。構築された時期差によるものとも考えることもできるが、出土遺物が少なく、時期が確定できないことや明確な時期差を示す遺物もみられないことから、可能性を指摘するのみにとどめておく。

また、中央部で検出されたピット群の中にも、建物を構築できるようなピット列の並びをみることができるが、ここでも建物と方向が異なっており、隣接する調査区においても見られない方向を示していることから、東端部（難波側）と同様に可能性を指摘するのみにしておく。ただ、密集したピット群であることから、いずれも複数の時期にまたがって、同じ場所に建物が建てられていたことは間違いないといえよう。

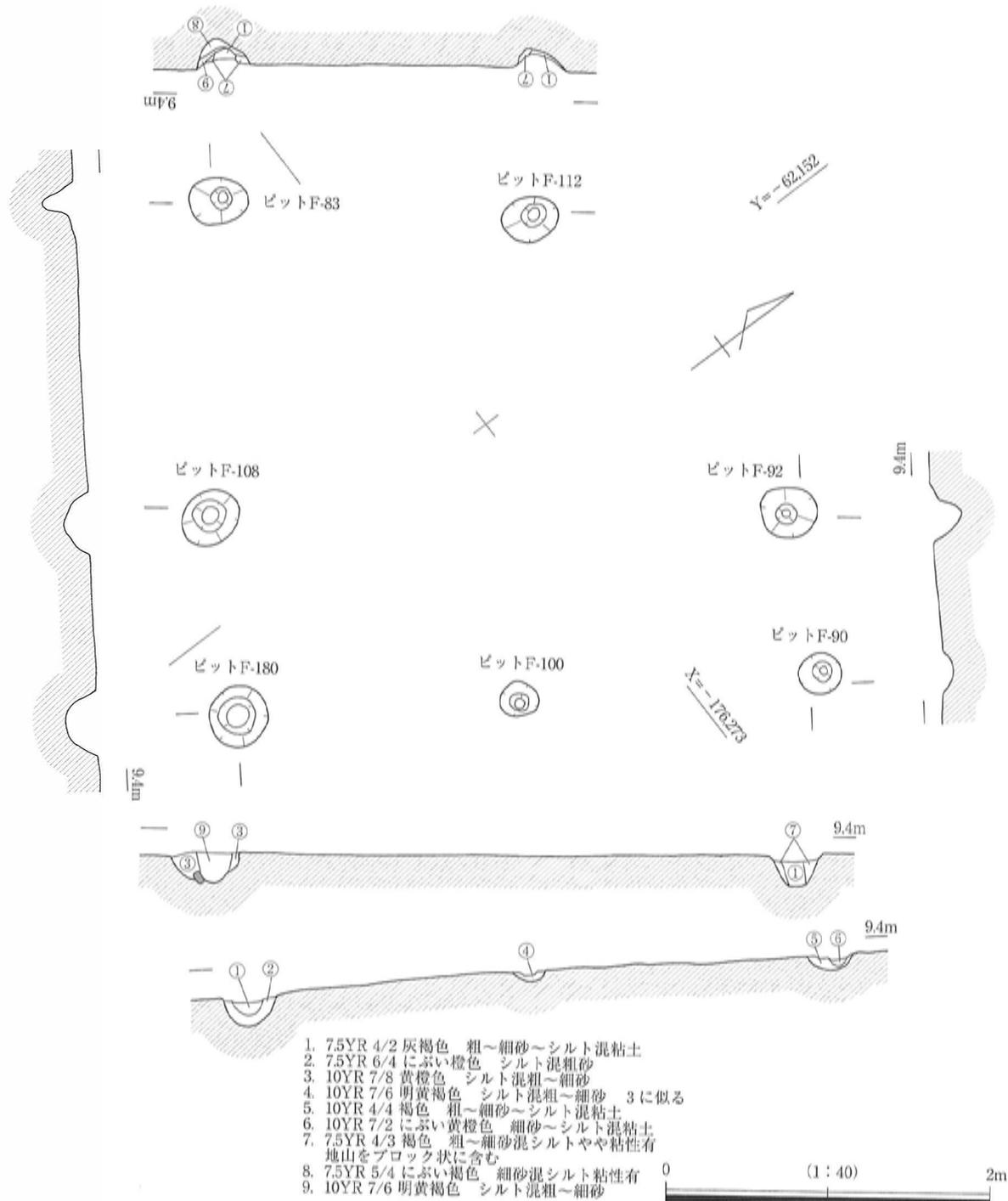


図79 F地区建物3平・断面図

2) 溝群

ほぼ中央部で、東西方向にのびる幅約10m以上、深さ約0.5mの浅い谷状地形が調査区を横断している。この谷状地形を利用して、底部付近で人為的に溝が掘削されている。このほか、西半部（和歌山側）では調査区をほぼ南北方向に横断する溝、東半部（難波側）でも方向は異なるが、調査区を横断する溝が検出された。いずれも谷状地形に向かって掘削されている状況である。

東端部（難波側）のピット群が検出された部分でも、同じ方向で平行に走る溝が5条確認された。ほぼまっすぐに掘削されており、E地区で検出された溝群と同様に耕作にともなうものと考えられ、畑作で利用されていた溝といえる。重複関係から、ピット群より古いものと考えられ、建物が建てられる以前に耕作地であったことがわかる。これらの溝は、幅50～60cm、深さ約10cmを測り、1.7～2.5m間隔で平行に並んでいる。方向はN-45°-Eで、E地区の溝群とはややずれているが、おおむね同じ方向を意識して掘削されているものといえる。埋土は、いずれも明褐色シルト混細砂である。遺物は、土師器や瓦器などの細片が出土しているのみであるため、建物との明確な時期差は確定できない。

溝F-174（図80）

西半部（和歌山側）で検出され、調査区をほぼ南北方向に横切る溝である。後世の水路や溝F-228と重複しており、南側は切られている状況である。溝F-228は遺物が出土していないため、時期は確定できないが、耕作土層から掘り込んでいることから、近世以降と考えられる。

検出状態での規模は、幅約0.9m、深さ約20cmを測り、N-3°-Eの方向に流れている。埋土は、にぶい黄褐色シルト混細砂が基本で、黄橙色シルト混細砂が部分的に混じる。遺物は、土師器甕・羽釜、瓦器碗の小片が出土している。

溝F-174周辺では、前述した重複する溝F-228のほか、隣接して溝F-229が検出されている。N-20°-Eの方向に流れており、やや方向はずれている。ただ、詳細は後述するが、中央部で検出された浅い谷状地形とはほぼ直交しており、意識して掘削されている可能性が強い。直接の重複関係はないが、おおむね同じ方向に掘削されているものといえる。ここからは土師器小皿や瓦器碗、青磁などが出土しており、近世以降の溝と考えられる。溝F-174が掘削された位置にほぼ同じ方向の溝が、後世になっても連続して掘削されている状況がみられる。これらはあまり大きな規模ではなく、屋敷や耕作地などを明確に区画する溝ほどではないが、なんらかの区画を示す溝と考えることができる。

溝F-154（図81、図版36-4）

調査区のほぼ中央部で、調査区を横断する谷状地形が検出されているが、これを利用して底部付近で

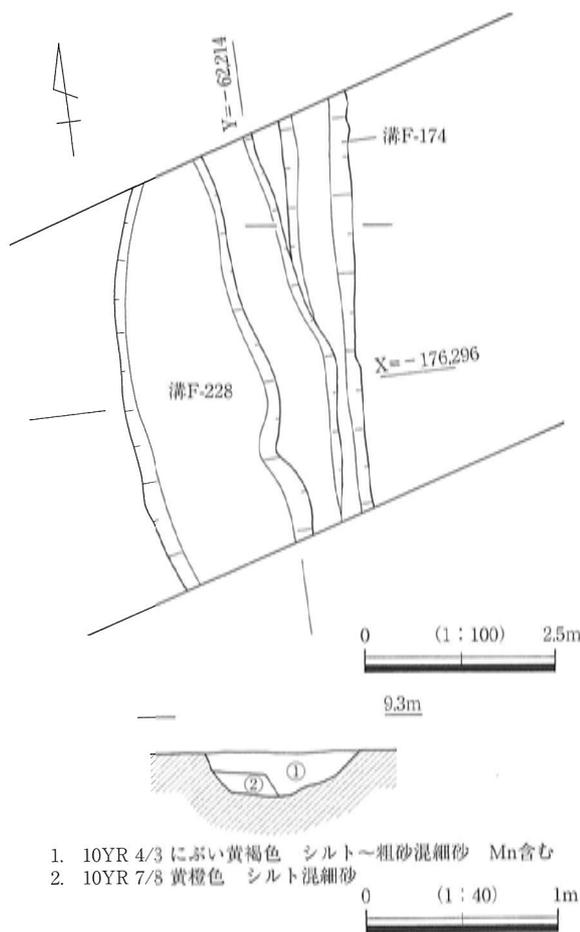


図80 溝F-174平・断面図

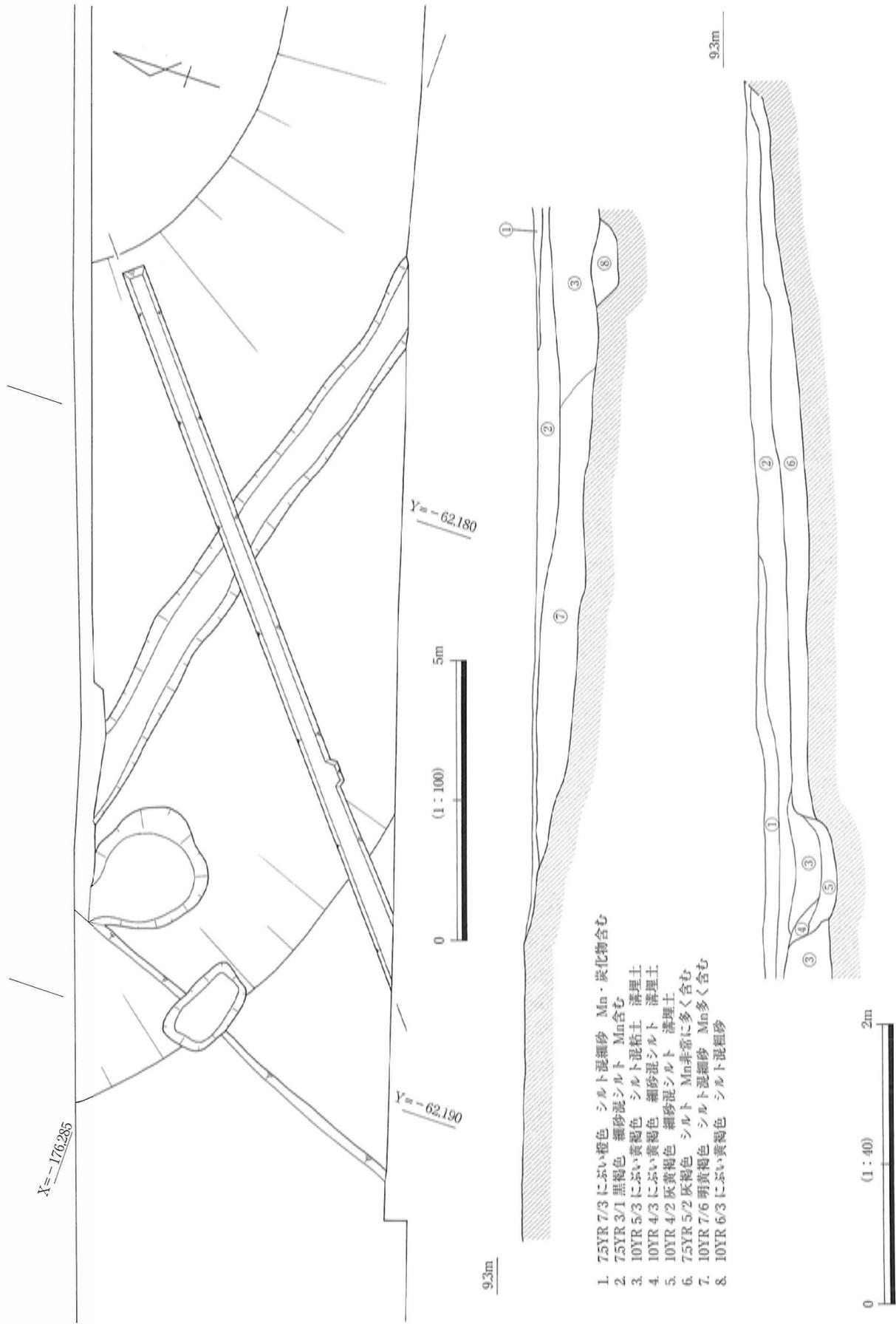


図81 溝F-154平・断面図

人為的に掘削されたものである。谷状地形は、幅約10m以上、深さ約0.5mの規模であるが、検出された溝はかなり狭く、幅0.8~1.0m、深さ約0.3mを測るのみである。ほぼ直線状にのびており、方向はN-75°-Wである。埋土は2層に分かれており、上層はにぶい黄褐色シルト混粘土、下層は灰黄褐色細砂混シルトである。堆積状況からあまり強い流れはなく、ほぼゆるい流れか滞水状態であったことがわかる。遺物は、土師器羽釜や瓦器椀、須恵器などが出土しており、器形を復元できるものもみられる。

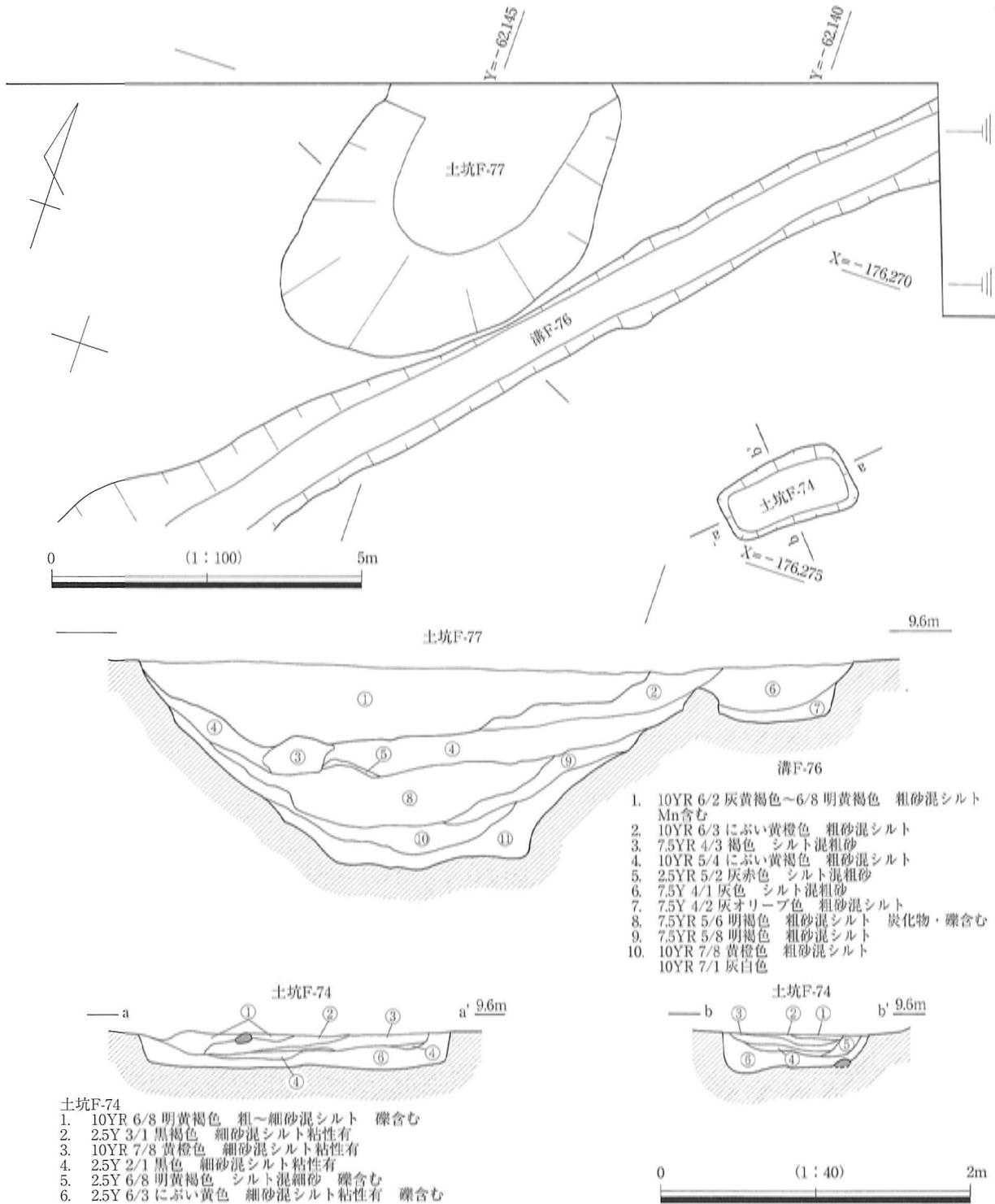


図82 溝F-76・土坑F-74・77平・断面図

溝 F-76 (図82、図版36-1~3) 東半部 (難波側) で検出され、調査区を南北方向に横切っている。東端部で5条検出された溝とほぼ同じ方向にのびており、関連性がうかがわれる。ほぼ中央部で土坑 F-77 と重複しており、土坑より古い。規模は、幅0.9~1.7m、深さ約0.3mを測り、北側に比べて南側が広がっている。肩部がほぼ垂直に立ち上がっている。ほぼ直線状にのびており、方向はN-43°-Eである。埋土は2層に分かれており、上層は灰色シルト混粗砂、下層は灰オリーブ粗砂混シルトである。粗砂を多く含むことから、ある程度の流れがあったものと考えられる。遺物は比較的多く、土師器や瓦器碗・小皿、瓦質甕、須恵器などが出土しており、器形を復元できるものもみられる。

3) 土坑群

土坑 F-74

(図82、図版36-5・6)

東半部 (難波側) で検出され、溝 F-76 の南東 3 m に位置している。平面形は長方形を呈しており、長軸方向は溝 F-76 とほぼ同じ方向である。規模は、長辺2.1m、短辺1.1m、深さ約15cmを測る。埋土の観察により土坑墓の可能性もあるが、調査区内で同様のものはみつかっておらず、1基のみであるため、確定はできなかった。土師器や瓦器碗が少量みられるほか、石も出土したが、副葬品と考えられるような遺物は出土していない。

土坑 F-77 (図82、図版36-7)

溝 F-76 と重複しており、北側は調査区外にひろがっている。平面形は楕円形を呈しており、現状で長径5.0m以上、短径約4.2m、深さ約1.3mを測る。井戸の可能性もあるが、規模が大きい形状から灌漑用の水溜めなどに利用されたものと考えられる。埋土は4層程度に分けられるが、いずれも粗砂混シルトが主体であり、自然堆積の様相を呈している。遺物量は多く、土師器や瓦器碗・小皿、瓦質土器すり鉢、須恵器、灰釉陶器、中国製陶磁器、染付、常滑焼甕などが出土している。

土坑 F-80 (図83、図版36-8)

東半部 (難波側) で検出され、土坑 F-77 の西3.5mに位置している。北端部は調査区外にひろがって

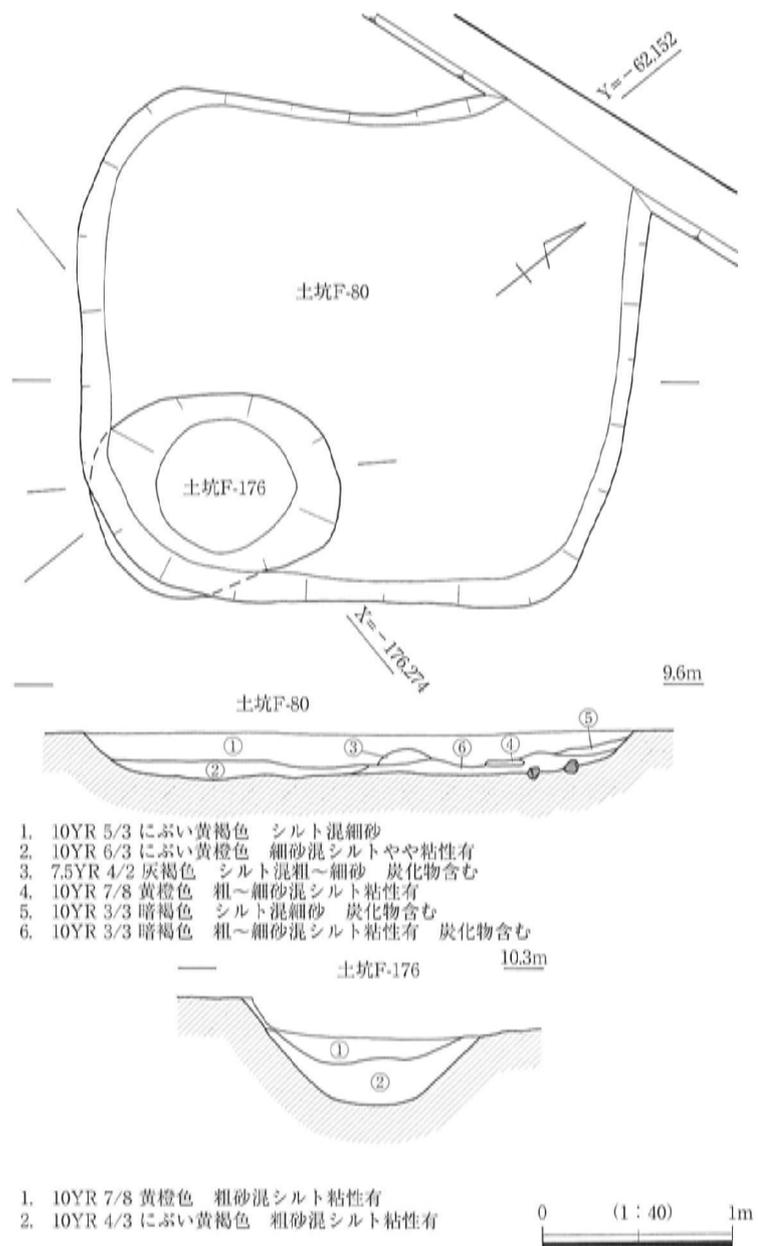


図83 土坑 F-80・176平・断面図

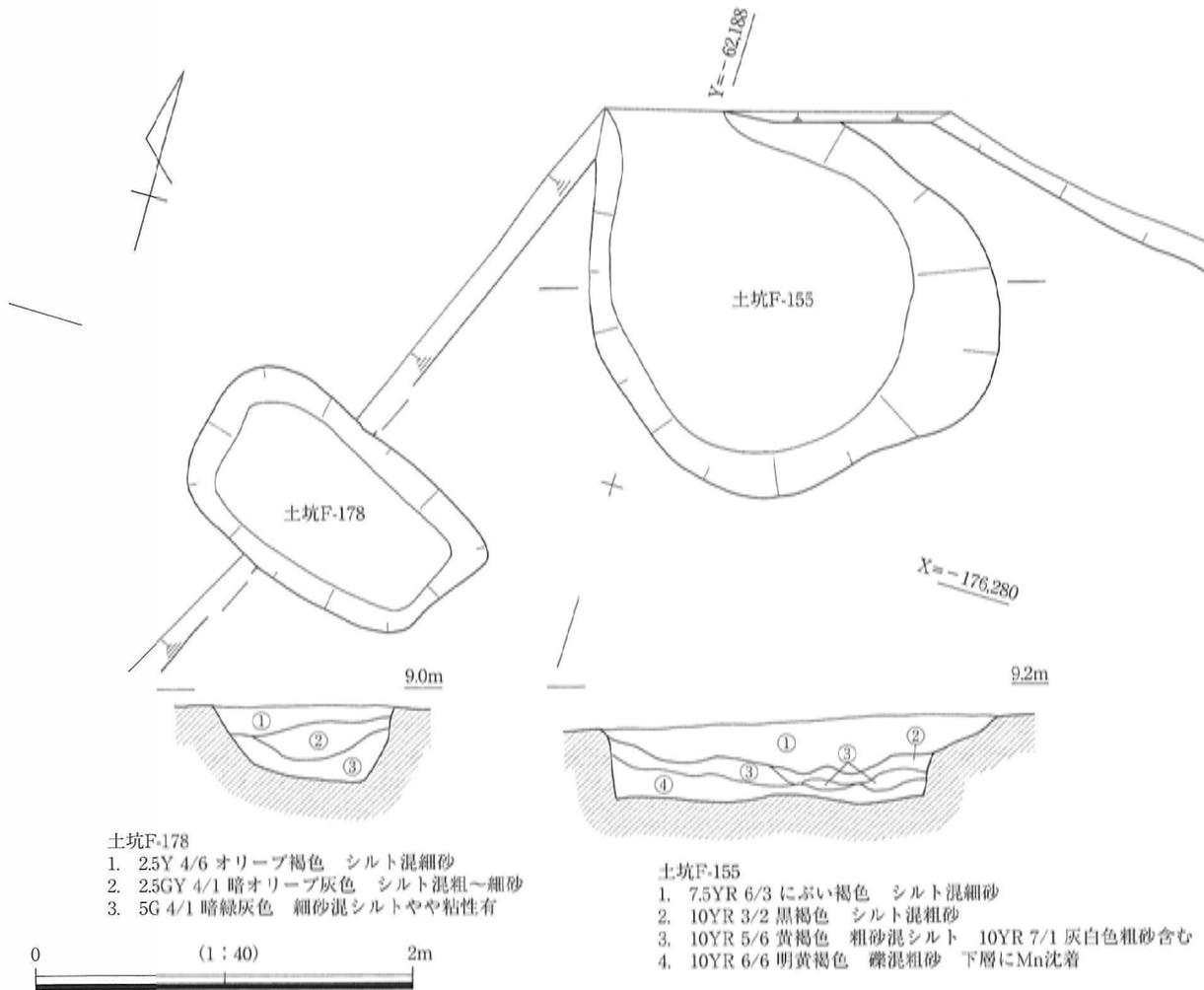


図84 土坑 F-155・178平・断面図

おり、南端部では土坑 F-176 と重複している。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は長軸方向で約 3.0 m、短軸方向で約 2.6 m、深さ約 20 cm を測る。竪穴状を呈しており、作業場のような性格をもつものとも考えることもできるが、内部から柱穴などのピットは検出されておらず、建物にはならない。周辺ではピット群が検出されているが、後につくられたものであり、むしろピット群をこわしてつくられている状況である。遺物は比較的多く、瓦器碗や土師器小皿・蛸壺、瓦質土器甕・すり鉢などが出土している。

土坑 F-176 (図83、図版37-2)

土坑 F-80 と重複しており、切り合い関係から、土坑 F-80 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径約 1.3 m、短径約 1.0 m、深さ 40 cm を測る。平面形から素掘り井戸の可能性も考えられたが、断面はすり鉢状を呈しており、底部も確認されたため可能性は低く、用途は不明である。埋土は、黄橙色およびにぶい黄褐色細砂混シルトで、粘性がある。遺物は少なく、瓦器碗が出土したのみである。

土坑 F-155 (図84)

中央部で検出され、調査区を横断する谷状地形の中に位置する。調査区北端に接しており、平面形はほぼ円形を呈しているが、北端部の状況ははっきりしない。規模は、径約 2.1 m、深さ約 40 cm を測る。埋土は、上層ににぶい褐色シルト混細砂、下層に明黄褐色礫混粗砂が堆積しており、全体に細砂が多く含まれている。素掘り井戸の可能性も考えられたが、深く掘り込まれたものではなく、底部は平坦であ

ることが確認された。さらに底部を掘り下げたが、地山の礫層が検出されたのみであるため、井戸とはいえない。遺物は少なく、土師器や陶器が出土したのみである。

土坑 F-178 (図84)

中央部で検出され、土坑 F-155 の南西約 1 m に位置している。平面形は長方形を呈しており、長軸方向は、調査区を横断する谷状地形とほぼ同じ方向である。規模は、長軸方向で約 1.6 m、短軸方向で約 0.9 m、深さは約 40 cm を測る。埋土は、オリブ褐色シルト混細砂や暗緑灰色細砂混シルトであるが、ここでも前述したように土壤汚染の影響が出ており、本来はもっと赤みがかっているものと考えられる。平面形から土坑 F-74 と同様に、土坑墓の可能性もあるが、確定できない。遺物は出土していない。

土坑 F-175 (図85、図版37-1)

東中部 (難波側) で検出され、焼土を含んでいる。調査区北端部でみつかったことから、この部分のみ壁を垂直に落として遺構の範囲を確認した。北側はさらに調査区外にひろがる。上部は削平をうけているため身われているものと考えられるが、平面形はほぼ円形を呈しており、現状で径約 1.6 m、深さ約 15 cm を測る。埋土は、上層に黄褐色細砂混シルト、下層に褐灰色細砂混シルトがみられ、自然堆積の様相を示している。底部はほぼ全体に焼けていることから赤変しており、炭化物も検出されている。遺物は、土師器真蛸壺のほか、土師器や瓦器碗・小皿、須恵器、青磁などが出土した。瓦器碗は、形が復元できるものがみられる。底部が赤変するほど火をうけているため、なにかを焼いた焼土坑といえるが、焼いたものを特定することはできない。形を復元できる瓦器碗などが出土しているため、土器焼成土坑の可能性もあるが、これらの土器は火をうけた後に入れられたものと考えられるため、特定することはできない。むしろ、土坑廃絶の際に、意識的に入れられた可能性のほうが強いものといえよう。

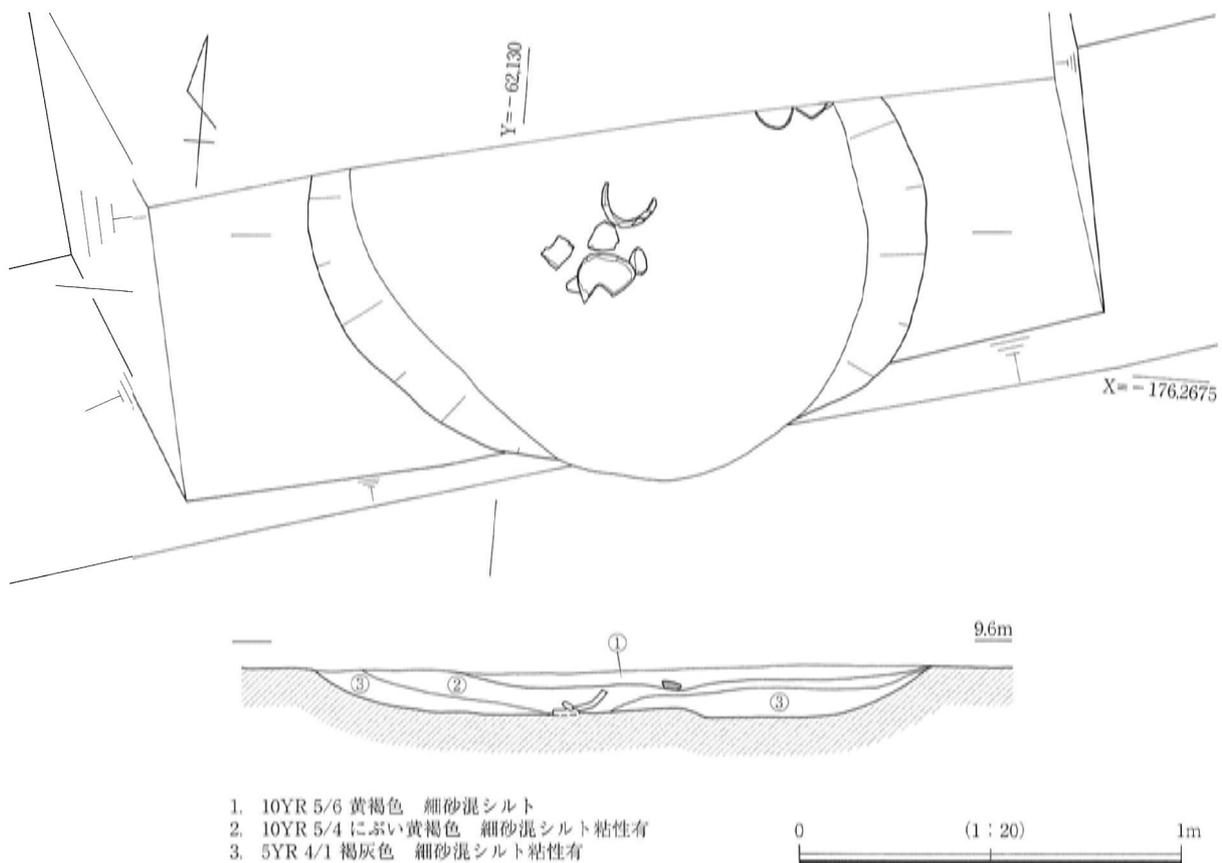


図85 土坑 F-175 平・断面図

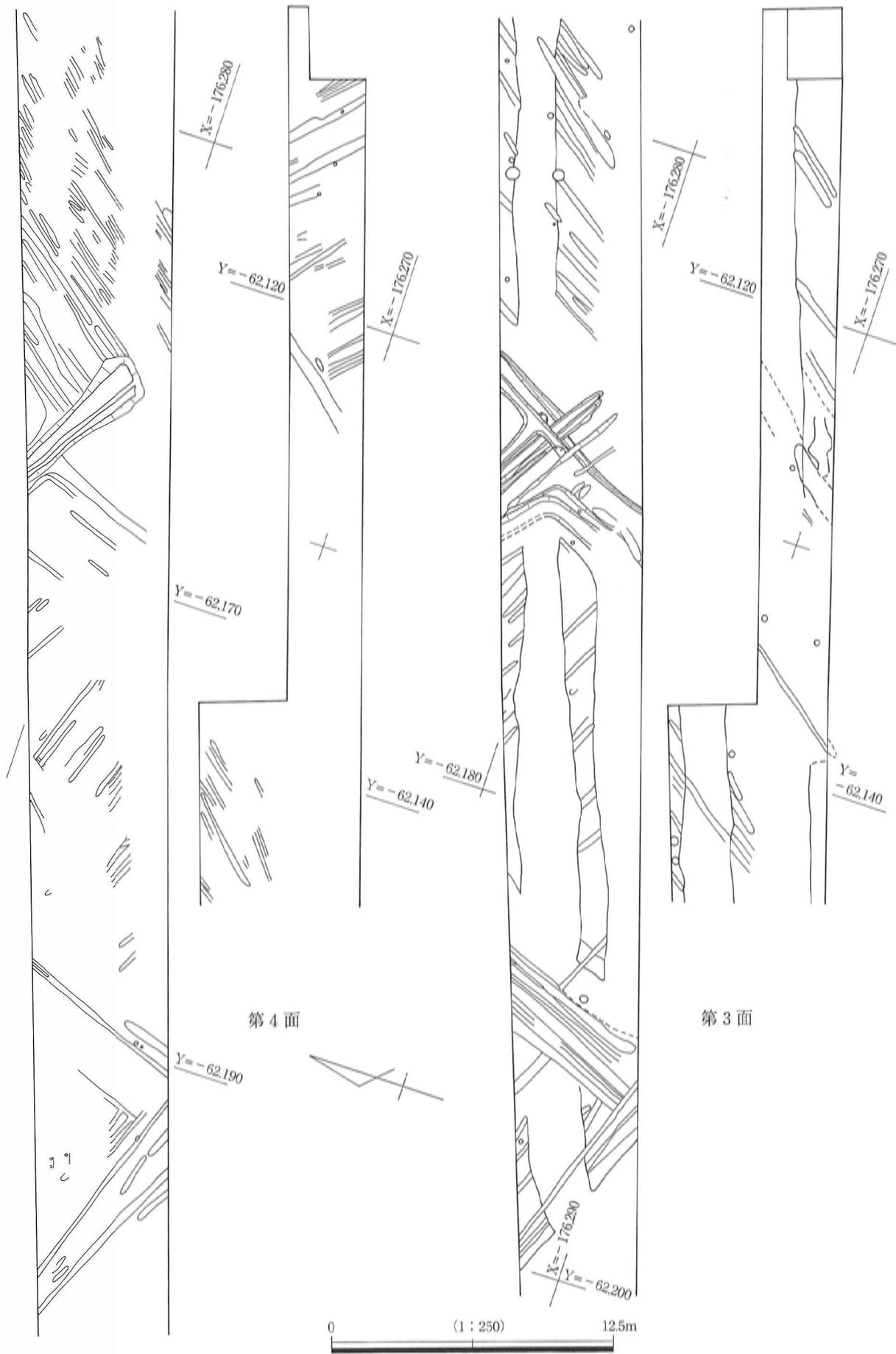


图86 F地区第3·4面平面图

(2) 第3・4面

地山面を覆う褐灰色シルト混細砂層やにぶい黄橙色シルト混細砂層などの上面で、鋤溝を主体とする遺構面が検出され、第4面とした。耕作面と考えられ、ほぼ調査区全面で検出されている。

この面ではすでに埋まっているが、中央部を横切る浅い谷状地形部分を境にして、東側（難波側）と西側（和歌山側）では鋤溝の方向に若干の違いが認められる。中央部やや東寄り（難波側）において密集した状態で多く検出されているが、他の部分でも密度は薄いものの、まんべんなくみられるため、本来は全面にひろがっていたものと考えられる。区画を示す畦畔や溝のほか、耕作にともなう鋤溝が多くみつかっている。これらはほぼ直線方向にのびており、ほぼ3方向の溝群が確認できた。方向は、東半部（難波側）の密集した部分でN-40°-E、東端部（難波側）でN-45°-W、中央部やや西寄り（和歌山側）でN-68°-Wである。特に東端部（難波側）では、地山面で検出された溝と方向が異なっており、時期によって耕作地の状況が変化していることがわかる。鋤溝はほぼ同じ規模で、幅約20cm、深さ5～10cmを測る。鋤溝からは、土師器や瓦器、瓦などの小片が出土している。

中央部やや東寄り（難波側）で検出された畦畔は、調査区の途中でとまっており、北側は調査区外へのびる。南端部で幅が最もひろがっており、北側へ向かうにつれて狭くなる。幅は、上端で1.5～0.7m、下端で2.5～1.2m、高さ約15cmを測る。中央部を横切る浅い谷状地形の北側にほぼ平行してつくられているため、この時点で谷状地形は埋没しているものの、区画の意識は残っていることがわかる。

盛土の下に堆積する旧耕作土層を除去した面で遺構が確認されたため、第3面とした。他の地区でも検出されている面と同時期のものと考えられ、鋤溝や耕作に伴う溝などがみられる。ほぼ全面で遺構面は確認できたが、線路部分については筋状に遺構面が削平されている状況である。

第4面において、中央部やや東寄り（難波側）で検出された畦畔部分には、形状がやや異なるものの、新たに区画を表す畦畔がつくられており、この部分の区画の意識は残っているものと考えられる。また、西半部（和歌山側）でも第4面において検出されたほぼ直交する溝部分で、さらに規模が大きくなった溝がつくられており、ここでも区画の意識が残っていることがわかる。鋤溝に関しても、西半部（和歌山側）では同じ方向、東半部（難波側）でもほぼ同じ方向にのびている。このため、第4面からの耕作地の区画は、第3面においても継承されており、耕作地の利用状況はほとんど変わっていなかったことがわかる。鋤溝からは、土師器や瓦器、瓦などの小片が出土しているほか、土師器十徳などもみられる。

第3面を覆う包含層からは、近世の陶磁器などが出土している。また、第4面を覆う包含層からは土師器鍋や瓦器、瓦質土器などが出土している。いずれも破片であり、形を復元できるものではないため、時期を確定することはむずかしいが、第3面は近世で、第4面は中世末～近世初頭頃と推定される。

3. 遺物

上町東遺跡部分のほかの地区と同様に遺物量は少ないが、土坑や溝からの出土が比較的多い。包含層からの遺物は破片が多く、形を復元できるものはほとんどみられない。遺物は、土師器、須恵器、瓦器碗・小皿、陶磁器、蜻壺、土鍾などである。近世以降の整地層であることから、中世～近世の遺物がほとんどである。最終遺構面の遺構からの出土品はほぼ中世におさまっている。上層で検出された鋤溝からの出土遺物は小破片が多いため、形を復元できるものはなかった。溝F-76、溝F-154、土坑F-175から出土した遺物の中に形を復元できたものが多く、まとまって図化することができた。ここでは、これらの遺構出土遺物で図化できたものと、包含層出土土鍾のみをあげておく。

図87の246～254は、溝F-76から出土した瓦器碗である。ほぼ12世紀後半に属するものと考えられる。

246は、ほぼ完形で残存状況は良好であった。口縁部外面は強い横ナデにより凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面は見込み部に格子状暗文がみられ、横方向のヘラミガキが密に施されており、口縁部まで及んでいる。格子状暗文はほぼ直交しており、ヘラミガキより先に施されている。247は、246とほぼ同じ形状であり、つくりも似ている。外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は見込み部に246より広い範囲で格子状暗文がみられ、横方向のヘラミガキが密に施されている。格子状暗文は直交よりやや傾いており、内部のヘラミガキより先に施されている。高台は先端の尖った断面三角形を呈する。248は、表面の残存状況がよくないため、はっきりしない部分もあるが、口縁部外面は強い横ナデにより凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は見込み部に格子状と考えられる暗文がみられるほか、横方向のヘラミガキが施されていることがわかる。249は、248とほぼ同じ形状であり、つくりも似ている。外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は見込み部に格子状暗文がみられるほか、横方向のヘラミガキが数条施されている。格子状暗文は直交よりやや傾いている。250は、口縁部外面は強い横ナデにより凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は見込み部に暗文がみられるほか、横方向のヘラミガキが施されていることがわかる。251は、口縁部外面は横ナデ調整が2段にわたって施されており、外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面には横方向のヘラミガキが数条施されている。252は、口縁部外面は強い横ナデにより凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は残存状態がよくないため、調整は不明である。253は、外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は磨耗しており、調整は不明である。254は、口縁部外面は横ナデ調整が2段にわたって施されており、外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は残存状態がよくないため、調整は不明である。255は、溝F-76から出土した土師器台付皿である。外面は横ナデ調整で仕上げられている。口縁部外面は強い横ナデによりやや凹線状を呈している。内面は残存状態がよくないため、調整ははっきりしないが、ナデ調整が施されているものと考えられる。

256～262は、土坑F-175から出土した瓦器碗である。ほぼ12世紀後半に属するものと考えられ、溝F-76出土遺物と同時期といえる。256は、ほぼ完形で残存状況は良好であった。口縁部外面は強い横ナデにより凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面は見込み部に格子状暗文がみられ、横方向のヘラミガキが密に施されており、口縁部まで及んでいる。格子状暗文はほぼ直交しており、ヘラミガキより先に施されている。257は、口縁部外面は強い横ナデにより凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面は横方向のヘラミガキが施されており、見込み部には一部で螺旋状暗文がみられる。258は、口縁部外面は横ナデによりやや凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面は横方向のヘラミガキが密に施されており、口縁部まで及んでいる。見込み部には一部で螺旋状暗文がみられる。259は、外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面は横方向のヘラミガキが密に施されており、口縁部まで及んでいる。底部は欠損しているが、見込み部に一定方向の暗文がみられる。260は、外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面は残存状態がよくないため、調整は不明である。261は、口縁部外面は横ナデによりやや凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面は残存状態がよくないため、調整は不明である。262は、表面は残存状態がよくないため、調整ははっきりしないが、口縁部外面は横ナデによりやや凹線状を呈している。外面には指頭圧痕が残っている。

263は、土坑F-175から出土した瓦器小皿である。完形であり、口縁部外面は横ナデによりやや凹線状

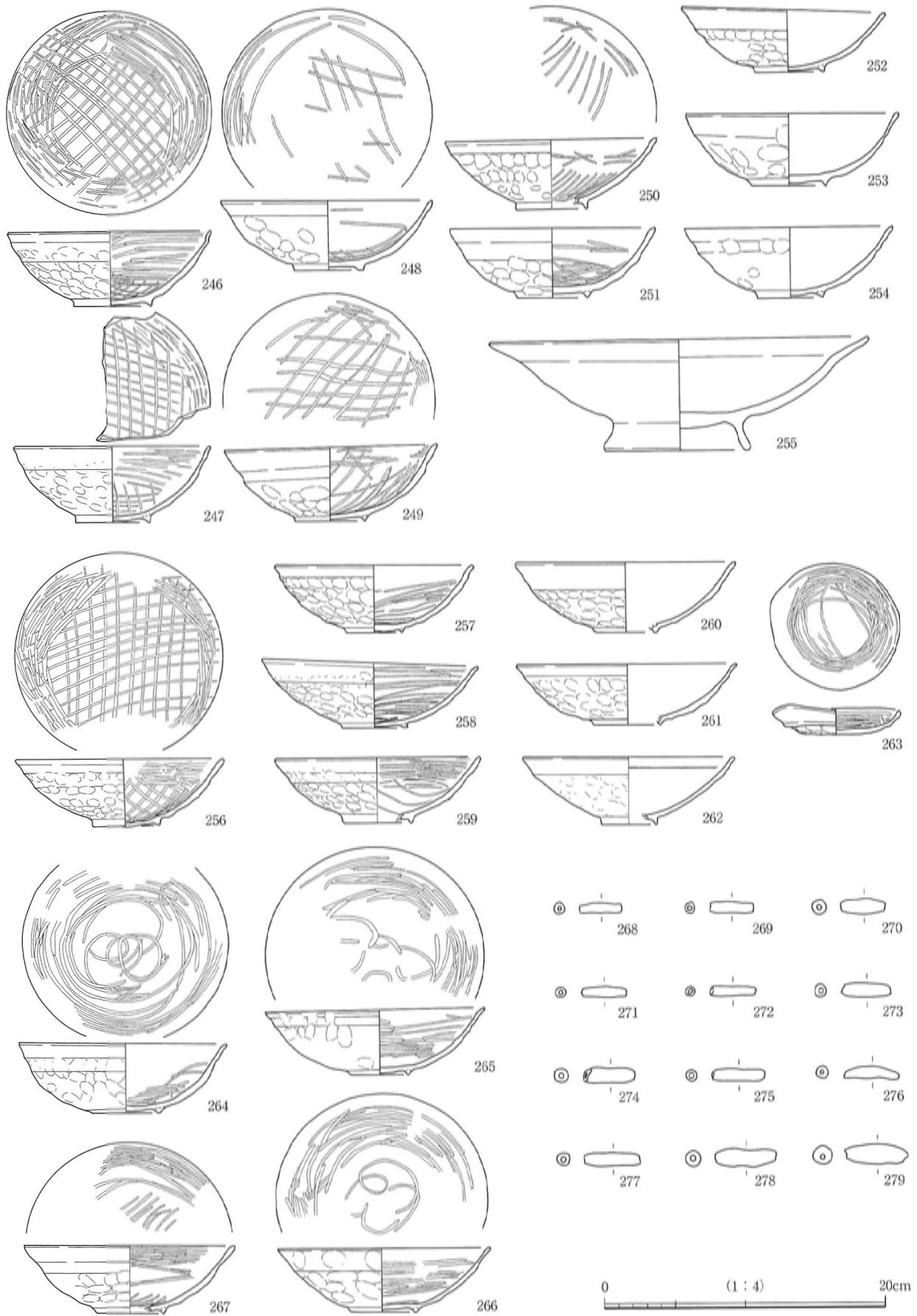


图87 F地区出土遗物

を呈している。外面の下半部には、指頭圧痕が残っている。内面は横方向のヘラミガキが密に施されており、口縁部まで及んでいる。

264～267は、溝F-154から出土した瓦器椀である。ほぼ12世紀末～13世紀前半に属するものと考えられ、溝F-76・土坑F-175出土遺物よりやや新しいといえる。264は、ほぼ完形であり残存状況は良好であった。口縁部外面は横ナデによりやや凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は横方向のヘラミガキが施されており、見込み部には螺旋状暗文がみられる。265は、口縁部外面は、横ナデ調整が2段にわたって施されており、外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は横方向のヘラミガキが施されており、見込み部には一部で螺旋状暗文と考えられる痕跡がみられる。266は、口縁部外面は横ナデによりやや凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は横方向のヘラミガキが施されており、見込み部には螺旋状暗文がみられる。267は、口縁部外面は横ナデによりやや凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が残っている。内面は横方向のヘラミガキが密に施されており、見込み部には平行線状暗文がみられる。

268～279は、包含層から出土した土師器土錘である。いずれも小型のもので、長さ3.1～4.5cm、径0.7～1.4cm、孔径0.3～0.4cmを測る。出土地点は分散しており、集積などはみられない。長さや全体径に差は認められるものの、孔径はほぼ一定で、製作方法に共通性がみられる。時期ははっきりしないが、いずれも近世に属するものと考えられ、漁業を営む集落が存在していたことを示している。

第5節 小結

ここで、上町東遺跡の範囲内であるD-1地区からF地区の成果について簡単にまとめておく。全体の成果については、第9章で述べることとする。

湊遺跡とは異なり、D-1地区を除いて谷状地形を望む安定した台地上に立地している。そのため、全体に後世の整地の影響をまともに受けており、遺構面まで達する大規模な攪乱や古い時期の包含層が削平されている状況が多くみられる。

D-1地区は、谷状地形の最深部にあたり、掘削限界まで掘り下げたが、地山面に達することができなかったことは残念である。予想以上に深く、掘削限界面でもまだ線路敷設の際の盛土が残る部分さえあった。逆に、線路敷設の際の盛土工事が大変な苦勞を伴ったことが想像できるほどである。

D-2地区では、特に大規模な攪乱や削平が地山面まで及んでいることから、包含層がほとんど残存していないほど状況は悪かったが、隣接地で検出された掘立柱建物などの復原をもとに、小規模ながらピット列を復原することができた。また、礫を伴う土坑が検出され、遺物が比較的多く検出されたことから、遺構群の時期を特定することができた。

E地区もD-2地区と同様に削平が地山面まで及んでおり、包含層がほとんど残存していない状況であった。ただし、ピット群と溝群が多く検出され、掘立柱建物などの復原はできなかったものの、区画溝との前後関係を確認することができた。

F地区では、他の地区と異なり、包含層や遺構面の残存状況は比較的良好で、掘立柱建物や土坑、溝などを検出することができた。掘立柱建物は、大型のものを復原することができ、隣接地の調査成果と合わせると、集落を構成する建物の一部と考えることができる。他の地区と比べると瓦器椀の出土量が多く、上町東遺跡の範囲内では、比較的古い時期の集落といえる。

第7章 若宮遺跡の調査

若宮遺跡は、泉佐野市のほぼ中央部に位置している。市域の中央部を流れる佐野川の左岸に、段丘が広くひろがっており、湊遺跡および上町東遺跡、若宮遺跡はこの沖積段丘上に位置する。さらに細かく見ると、調査区のすぐ東側（難波側）には円田川が調査区を横切るかたちで流れており、第6章で述べた上町東遺跡や若宮遺跡部分にあたる調査区は、海岸方向に張り出す段丘上の一番高い部分に立地している。上町東遺跡の東端は段丘崖になっており、さらに東には旧河道の低地がひろがり、湊遺跡につながる。円田川が、上町東遺跡と若宮遺跡の境界線にあたる。調査区が立地する段丘の東側（難波側）には、湊遺跡の中心部分が立地する別の段丘が、同じように海岸方向に張り出している。旧河道の低地から湊遺跡の立地する段丘にかけての調査成果は、第5章ですでに述べた。

若宮遺跡は、昭和62年に店舗建て替えの際に遺構や遺物が検出されたため、確認された遺跡である。今までに、泉佐野市教育委員会が主体となって継続して調査がおこなわれており、主に14世紀前半から近世の集落跡として知られている。ただ、現在の市街地と重なっていることから広範囲な調査は困難であるため、発掘調査は断片的におこなわれているのみで、まだ不明な部分が多い。若宮遺跡調査区は、遺跡範囲の南端部に位置しており、線路を隔てた南側は遺跡の範囲外である。また、今回の南海本線連続立体交差事業（第1工区）において、F地区と若宮遺跡調査区との間には遺跡範囲外の区域があり、この部分の調査はおこなっていない。

調査は全体工事の進行上、他の調査区の調査終了後（平成12年度）に実施された。若宮遺跡調査区は、平成10年度に泉佐野市教育委員会が発掘調査をおこなった駅舎部分と道路を隔てた東側（難波側）にあ

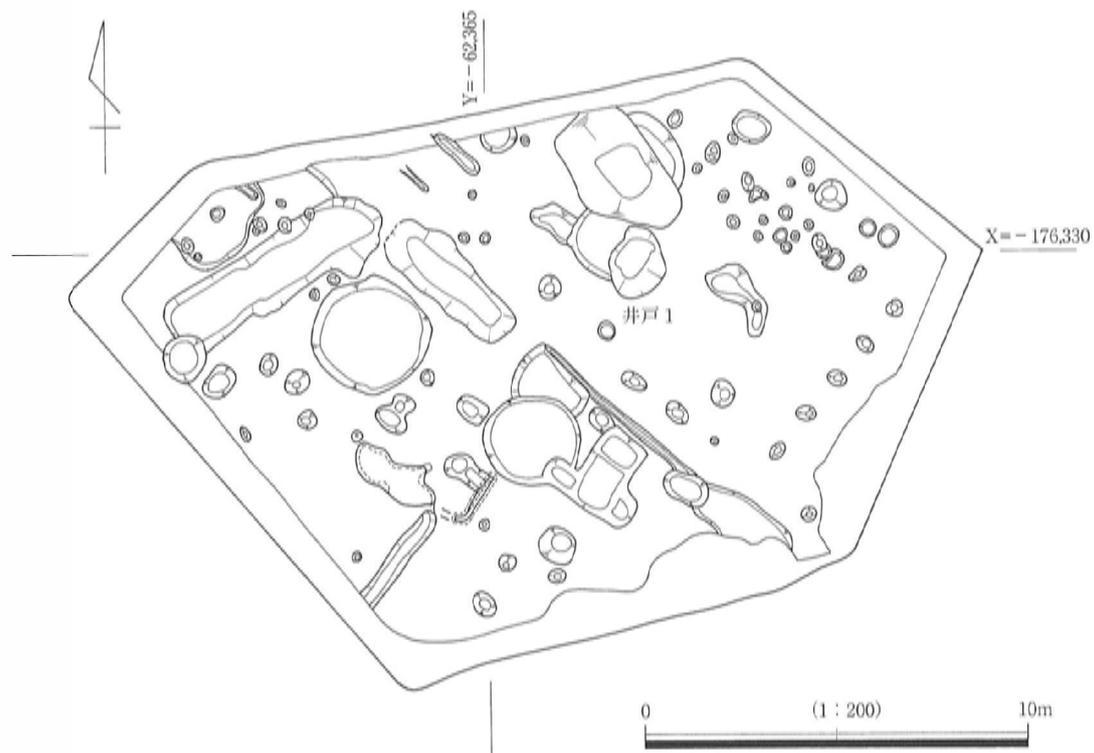


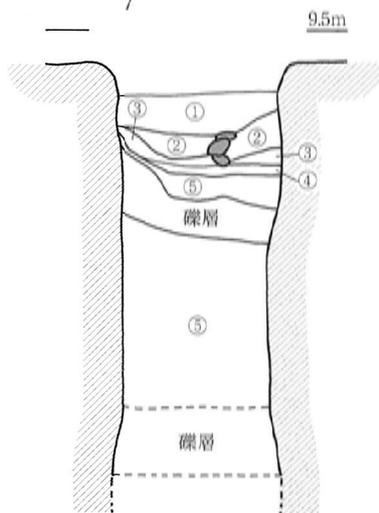
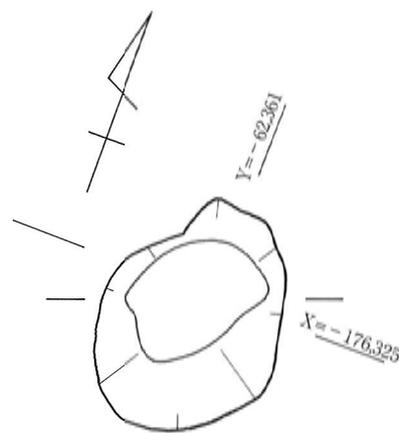
図88 若宮遺跡最終遺構面平面図

たる。他の調査区は、鉄道の線路敷部分のみであったが、若宮遺跡調査区は線路が駅に接続する場所であり、駅舎も拡張されることから、駅前の宅地部分まで調査対象範囲がひろがっている。駅に近く、主要道路に面していることから、住宅地としては条件のよい場所であり、調査前までは店舗が営業をしていた状況である。

第1節 層序・遺構

調査区はもと宅地であり、狭い範囲に限定されて余地がないことから、2分割して調査をおこなった。他の調査区と異なり、線路敷でないことから、いわゆる線路盛土は検出されていない。宅地として利用されてきたことから、整地による削平がおこなわれており、遺物包含層の残存状況は良好ではない。

中央部を横断する区画割（南西から北東方向）によって、北半部が地表面で約10cm下がっている。こ



1. 10YR 4/4 褐色 シルト
2. 7.5YR 4/6 褐色 礫混シルト
3. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト
4. 7.5YR 4/2 灰褐色 シルト混粘土
5. 7.5YR 4/4 褐色 シルト混粘土

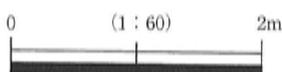


図89 若宮遺跡井戸1平・断面図

この区画部分には、1段の石組が設けられており、細い水路が平行して掘削されていた。全体に近世以降の削平を受けており、遺物包含層はほとんど残存しておらず、近世以降の耕作土を除去すると地山面が現れる部分が多い。また、西半部（和歌山側）は、近代以降の屋敷地であったため、庭木の植え替えの痕跡や貯蔵穴などが検出され、整地が繰り返されたことがわかる。

1) 東半部（難波側）

調査区全体に近世以降の削平を受けているため、遺物包含層は残存していなかったが、部分的に地山面が窪んでいる部分があり、削平を免れた遺物包含層がわずかに残存していた。ここからは、室町時代頃の土師器羽釜や瓦質土器羽釜、甕、こね鉢などがまとめて出土した。

井戸1（図89、図版38—5・6）

遺物が多く出土した遺構として、井戸が1基検出されている。調査区の中央やや北寄りに位置しており、素掘りの井戸である。平面形はほぼ楕円形を呈しており、規模は長径2.0m、短径1.4mを測る。埋土は大きく3層に分けることができる。埋土上層は、褐色シルトが主体であり、礫や粘土が混じる。埋土中層において、拳大の礫で人為的に埋められた層が認められ、土師器羽釜や瓦質土器の羽釜、甕、こね鉢、湊焼甕、中国製青磁などが多く出土した。これらの遺物は、遺物包含層の時期とほぼ一致しており、近世初頭に整地がおこなわれた際に、廃絶したものと考えられる。確認のため、機械掘削により最終的に現地表面から約3m掘り下げたが、崩落の危険があるため、底面まで達することはできなかった。そのため、掘削された時期を特定することはできなかったが、中世には使用されていたことが想定できる。

2) 西半部 (和歌山側)

遺物包含層はほとんど削平されており、遺物は出土していない。機械掘削により、表土と盛土を除去すると、地山面が露出するほどである。

この部分は、近代以降の屋敷地の庭であったため、円形を呈する庭木の植え替えの痕跡や方形の貯蔵穴などが検出されたほか、金魚を飼育していたと考えられる漆喰製の庭池がみられる(図版38-2)。この池跡からは、土師質の七輪が埋められた状態で出土しており、えさなどを与える器具として転用されていたものと考えられる。

これ以外に北端部で、L字状に配置された溝が検出されており、近世のものとして推測されるが、遺物は出土しておらず、性格は不明である。この溝の北側では、溝より古い時期のピットや土坑が検出されており、調査区外に近世以前の集落がひろがる可能性も考えられる。

第2節 遺物

前節で述べたように、遺構や遺物包含層の残存状況はよくなかったが、一部中世後期の遺物包含層が残っており、さらに中世末から近世初頭に廃絶した井戸の埋土からも同時期の遺物が出土している。若宮遺跡で従来から多く出土する近世の遺物は比較的少なく、今回の調査では量的には中世の遺物のほうが多い。内訳は、瓦質土器甕や羽釜、陶磁器、瓦などであるが、破片が多く、形を復元できるものはなかった。ただし、口縁部の破片が多かったことから、図上復元が可能なものに関しては、実測をおこない、図を作成することができた。図化できたものは、井戸1からの出土遺物がほとんどである。

図91は、井戸1中層の礫層出土遺物である。

280~284は、瓦質土器甕の口縁部である。280は、頸部が短く屈曲し、口縁部を外方に湾曲させている。体部外面に横方向のタタキ調整が施されており、口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられている。体部内面にハケ調整がみられ、後にナデ調整が施されている。281・282は、いずれも頸部がほとんどなく、口縁部断面に丸みをもつものである。体部外面に横方向のタタキ調整が施されており、口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられている。体部内面にハケ調整がみられ、後にナデ調整が施されている。283・284は、頸部が短く屈曲し、口縁部を外方に湾曲させている。体部外面に横方向のタタキ調整が施されており、口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられている。283は、体部内面にハケ調整がみられ、後にナデ調整が施されている。頸部外面でハケ調整の後にナデ調整が施されている。284は、体部内面にハケ調整がみられる。

285~293は、瓦質土器羽釜の口縁部である。いずれも口縁部が内傾するタイプで、口縁部に段をもち、体部外面に横方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部外面はナデ調整で仕上げられている。285は、口縁部内面にハケ調整がみられ、体部内面はナデ調整で仕上げられている。口縁部に径5mmの孔があげられている。286は、内面に板状工具による横方向のナデ調整がみられる。287は、口縁部内面にハケ調整がみられ、体部内面はハケ調整の後にナデ調整で仕上げられている。288は、口縁部内面までナデ調整が施されており、体部内面には横方向のハケ調整がみられる。289は、頸部が上方に屈曲する。あまりはっきりしないが、内面に板状工具によると考えられる横方向のナデ調整がみられる。290は、磨耗のため内面の調整は不明である。291・292は、口縁部内面にハケ調整がみられ、体部内面はハケ調整の後にナデ調整で仕上げられている。293は、口縁部内面までナデ調整が施されており、体部内面には横

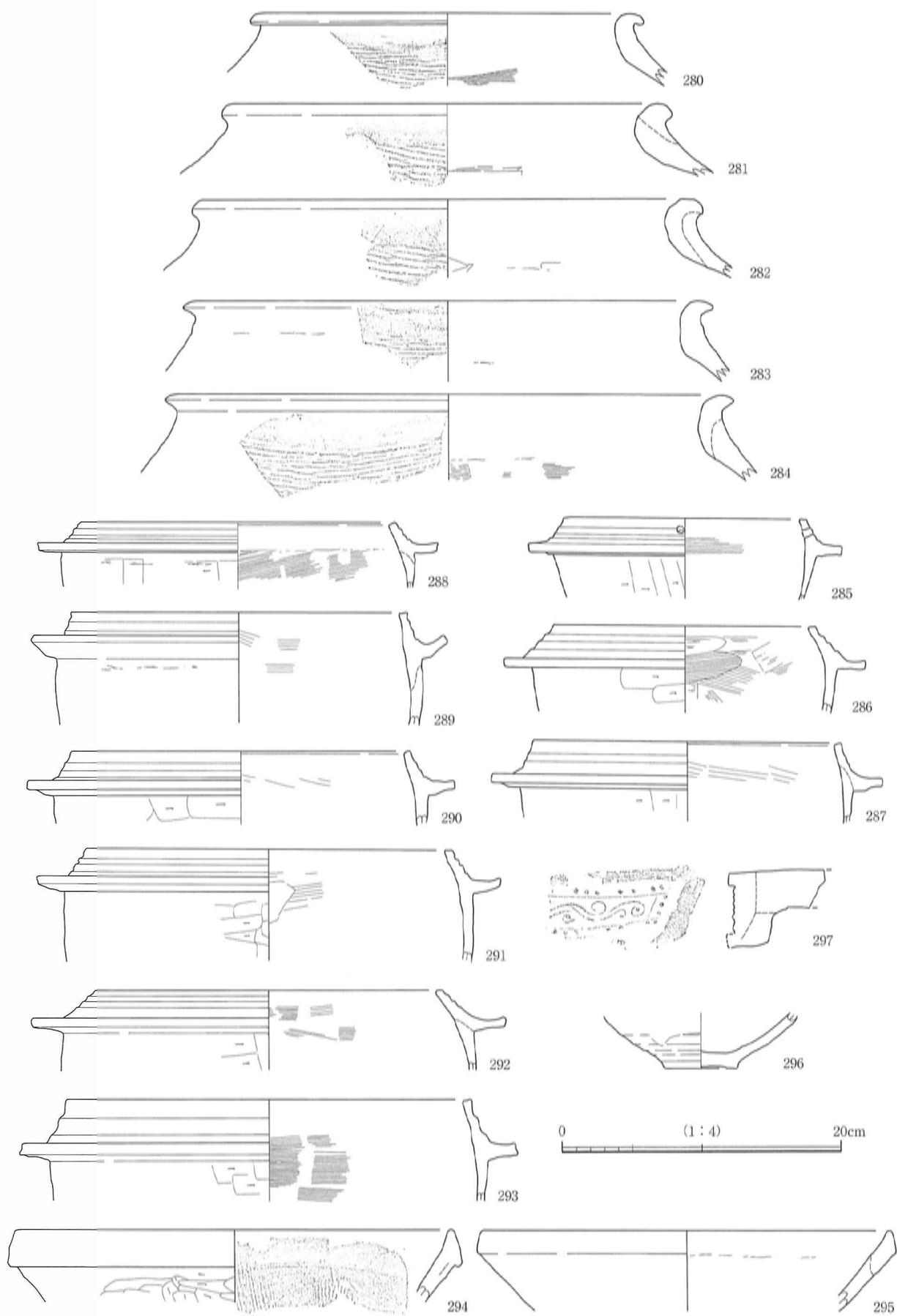


图90 若宮遺跡出土遺物1 (井戸1)

方向のハケ調整がみられる。

294・295は、瓦質土器摺鉢の口縁部である。294は、口縁部縁帯が垂下している。体部外面に不定方向のヘラケズリ調整が施されており、口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられている。内面には卸し目がみられる。295は、294ほど顕著ではないものの、口縁部縁帯がやや垂下している。体部外面に不定方向のヘラケズリ調整が施されているが、全体に磨耗しているため、調整は不明である。

296は、灰釉陶器椀（山茶椀）の底部である。体部外面下半部は回転ヘラケズリ調整がみられる。内面と体部外面上半部には灰釉が施されている。高台がかろうじて認められる形状である。

297は、軒平瓦である。瓦当部の約半分が残存しており、中心飾りは不明であるが、唐草文がみられる。凹面側に布目が認められるが、全面にナデ調整が施されている。

図92は、井戸1下層の礫層出土遺物である。

298は、瓦器椀の口縁部である。小破片であり、外面が磨耗のため調整は不明である。口縁部周辺はナデ調整が施されている。内面にヘラミガキがみられるほか、外面下半部には指オサエによる調整痕が残る。

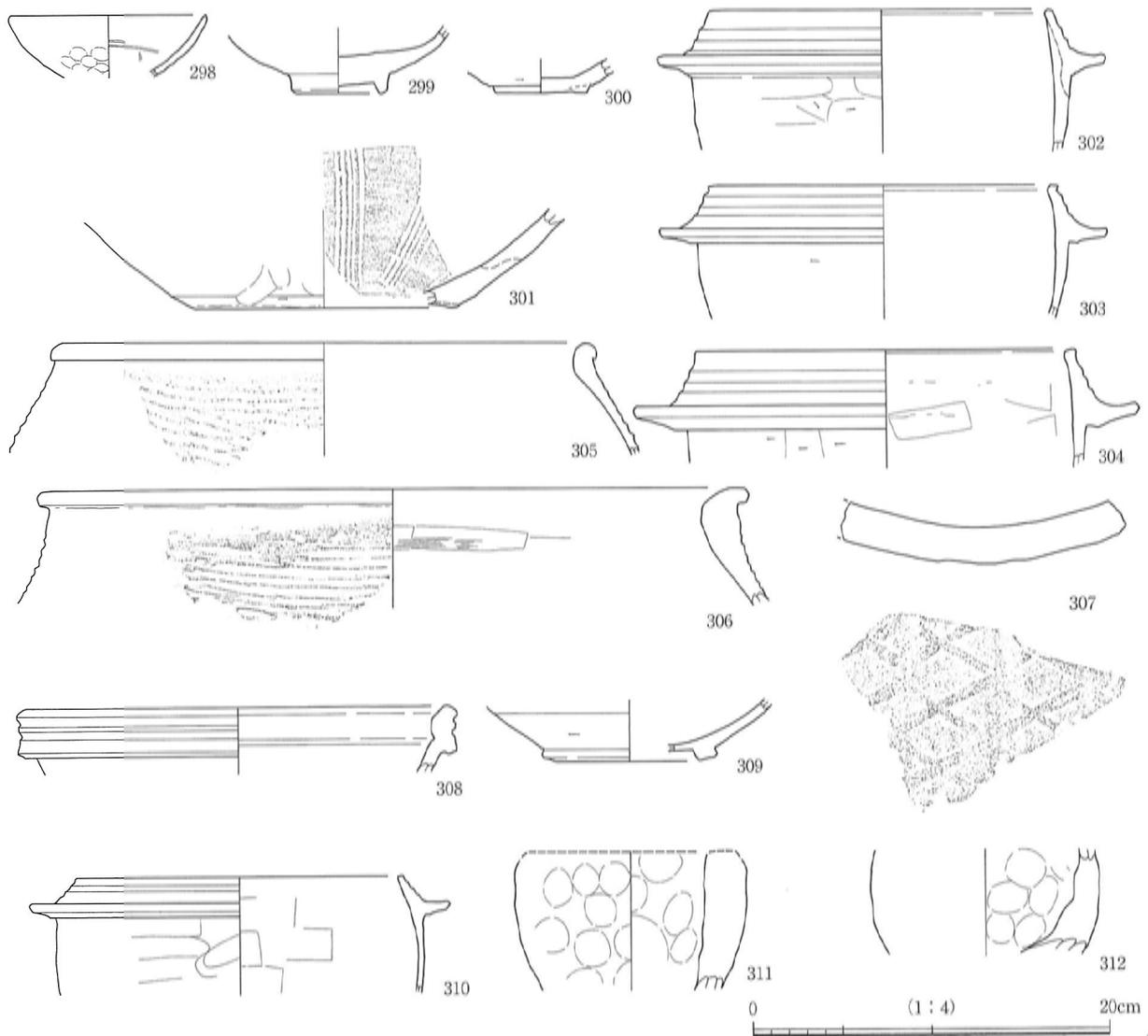


図91 若宮遺跡出土遺物 2

299・300は、灰釉陶器椀（山茶椀）の底部である。299は、体部外面下半部は回転ヘラケズリ調整がみられる。内面と体部外面には灰釉が施されている。高台が認められる形状である。300は、体部外面下半部に回転ヘラケズリ調整がみられるほか、高台部に糸切り痕が残っている。内面に灰釉が施されている。

301は、東播系須恵器播鉢の底部である。体部外面は横方向のナデ調整の後、ヘラ状工具によるナデ調整が施されている。底部外面はナデ調整で仕上げられているが、付近にはヘラケズリ痕が残る。内面は横方向のナデ調整が施されており、卸し目がみられる。

302～304は、瓦質土器羽釜の口縁部である。いずれも口縁部が内傾するタイプで、口縁部に段をもち、体部外面に横方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部外面はナデ調整で仕上げられている。体部内面はハケ調整の後にナデ調整で仕上げられている。304の内面は、磨耗のため調整は不明である。

305・306は、瓦質土器甕の口縁部である。いずれも頸部がほとんどなく、口縁部断面に丸みをもつものである。体部外面に横方向のタタキ調整が施されている。305は、剥離のため、口縁部から内面にかけての調整は不明である。体部内面にハケ調整がみられ、後にナデ調整が施されている。306は、口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられている。一部、ヘラ状工具によるナデ調整がみられる。307は、平瓦である。凹面に離れ砂が認められ、凸面には格子状のタタキ目が残る。

308・309は土坑3から出土したものである。308は、備前焼播鉢の口縁部である。体部外面にヘラケズリ調整が施されており、口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられている。内面には卸し目がみられる。309は、灰釉陶器椀（山茶椀）の底部である。体部外面下半部は回転ヘラケズリ調整がみられる。内面と体部外面には灰釉が施されている。高台が認められる形状である。

310～312は、中世包含層出土遺物である。310は、瓦質土器羽釜の口縁部である。口縁部が内傾するタイプで、口縁部に段をもち、体部外面に横方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部外面はナデ調整で仕上げられている。体部内面はハケ調整の後にナデ調整で仕上げられている。311・312は、土師器蛸壺である。311は、口縁部に近い体部上半部である。内外面とも、指押さえで仕上げられており、指頭圧痕がみられる。312は体部で、外面は磨耗のため調整は不明であるが、内面は指押さえで仕上げられており、指頭圧痕がみられる。

第3節 小結

今回の調査では、近世以降に大規模に整地されたことが確認され、遺物包含層が削平されていたため、それ以前の遺物や遺構はほとんど残存していなかった。ただし、若宮遺跡の既往の調査で多く出土する近世遺物は比較的少なく、量的には中世遺物のほうが多い。

西半部（和歌山側）では、近代以降には屋敷地内の庭地になっていたようで、造成の後に庭木などを植えた痕跡や方形貯蔵穴、庭池などが検出された。北端部で、近世の溝より古い時期のピットや土坑が検出されており、調査区外に近世以前の集落がひろがる可能性も考えられる。

東半部（難波側）では、地山面がやや下がっていたことから、遺物包含層が少し残存しており、整地の時期を特定することができた。また、整地以前の建物跡などは検出できなかったが、近世までに廃絶した井戸が1基みつかったため、中世に集落が存在した可能性を想定することができる。

第8章 既往の調査成果

今回の調査区の調査成果は、前章までで述べたが、調査区がまたがっている湊遺跡および上町東遺跡、若宮遺跡に関しては、今までに大阪府教育委員会や泉佐野市教育委員会、(財)大阪府埋蔵文化財協会によって多くの地点で発掘調査がおこなわれている。いずれも小規模で断片的な調査がほとんどであるため、なかなか遺跡全体の様相を知ることは困難な状況であるが、ここで既往の調査成果をまとめることにより、少しでもその実態に近づければ幸いと考える。

第1節 湊遺跡

今まで述べてきたように、湊遺跡は昭和54年に確認された遺跡である。大阪府教育委員会による最初の調査(55-1区)で、古代末から中世と中世末から近世の遺構面が確認され、ピットや溝、土坑などが検出された。特に、古代末から中世では、瓦器や陶磁器のほかに土錘や蛸壺、釣針などがみられることから、漁業に従事していた集落と想定されている。現在では、弥生時代から江戸時代にかけての複合集落遺跡として、泉佐野市を代表する遺跡である。特に、弥生時代から古墳時代の製塩土器が多く出土する遺跡として知られている。

遺跡はやや隅丸方形を呈しており、長辺約1.1km、短辺約0.5kmの範囲を有する。海岸線からほぼ直角に陸に向かうかたちであるが、大阪湾に流れ込む佐野川の西側に位置しており、沖積段丘上とさらに西側に下がる谷状地形を含んでいる。

発掘調査や立会調査は、個人住宅や店舗に関わる件が多いため、小規模な調査や対象範囲の一部にトレンチを設定し、調査する場合がほとんどである。段丘上は現在居住地となっており、住宅が密集していることから、広範囲な調査は困難な状況である。そのため、遺跡の中心的な部分は段丘上であると考えられるが、現状では確認することが不可能である。一方、比較的大規模な調査としては、段丘端部に位置する日新小学校(83-2区・83-5区・96-6区)や民間分譲マンション(90-4区、90-5区・91-3区・91-6区)と段丘端部に沿って計画された府道(81-6区)などがあげられる。いずれも、段丘から西に向かって下がる谷状地形を望む位置であり、立地条件はほぼ同じである。遺跡を代表する弥生時代から古墳時代の製塩土器が多く出土する部分もこの付近であり、今回の調査区(B地区)においても同様に製塩土器が出土した。

小規模な調査が多いことから、遺構のひろがり把握することが困難であるため、非常におおまかな分析であるが、出土遺物の分布状況から遺跡の様相を想定することとする。ここでは、比較的出土量の多い、弥生時代から古墳時代の製塩土器と古代から中世の蛸壺、中世から近世の土錘に注目してみた。その結果を図92に示す。

1. 製塩土器

湊遺跡を代表する遺物である製塩土器は、遺跡全体からまんべんなく出土するわけではなく、比較的出土位置が限られている。傾向をみると、後世の包含層から出土する数点を除けば、ほぼ段丘から西方向へ下がる斜面上の地点に集中している。特に出土状況をみると、今回のB地区で検出されたようにま



図92 漢遺跡製塩土器・蛸壺・土鍾出土地点

とまって廃棄された状況のものが多い。

湊遺跡の初期の調査である府道泉佐野熊取線建設に伴う調査（81-6区）で、弥生時代末から古墳時代の製塩土器がまとまって出土している。泉州地域における製塩土器の一括資料を提供したという点で、注目を浴びることになった調査である。段丘上で検出された「谷」状落ち込みで、土器溜まりが数カ所みつかり、製塩土器のほかに多量の土師器甕や壺、飯蛸壺などが出土した。製塩土器は171個体を数えるが、ほぼ広瀬分類による脚台I B式におさまるものである。土坑や溝から検出されたものではなく、人為的にまとめて廃棄された状況でみつかったものである。比較的形状がそろっており、時期差もあまりないことから、短い期間に製塩作業がおこなわれていたものといえることができる。ただし、狭い範囲の調査であるため、廃棄された製塩土器が多量に出土したのみで、製塩炉や工房跡、集落などはみつからず、実態をつかむまでには至らなかった。

同様に製塩土器が多量に出土したのは、府道に隣接する民間マンション建設に伴う調査（90-4区）である。地形的にみると、府道からこの地点にかけては、ちょうど段丘が谷状地形に向かって下がる端部にあっており、この付近で製塩作業がおこなわれていたことが考えられる。落ち込みから製塩土器を主体とする土器群がみつかり、製塩土器のほかに土師器甕や鉢が出土した。遺物は落ち込みからのものが多く、ここでも製塩炉や工房跡、集落などは検出されていない。

これらの地区に隣接する段丘上の地区は、日新小学校であるが、比較的広い面積の調査を実施しているにもかかわらず、製塩土器に関連するような弥生時代から古墳時代の遺構や遺物の検出は少なく、実態を把握できていない状況である。湊遺跡全体をみても、弥生時代から古墳時代前期の遺構や遺物の検出は、比較的少なく、製塩作業に限らず、当時の生活の痕跡はあまりみつからない。

2. 蛸壺

湊遺跡で出土する蛸壺には、古墳時代から奈良時代のものの中世のものがみられる。古墳時代の須恵器釣鐘型飯蛸壺は、後世の包含層も含めてかなり広範囲で出土している。谷状地形の谷部にあたる87-4区では、狭い範囲の調査ながら、須恵器杯などと共に須恵器釣鐘型飯蛸壺がまとまって出土している。ただし、古墳時代の須恵器は、広い範囲で出土しているものの、遺構のまとまりはあまり検出されていないため、古墳時代における集落は不明である。

段丘上で日新小学校の東側にあたる83-3区では、奈良時代の遺構面で掘立柱建物や柵列が検出されており、多量の遺物が出土している。内訳は、須恵器杯身・杯蓋・壺・盤、土師器甕・壺・皿などのほか、土師質釣鐘型飯蛸壺が多くみられ、和同開珎も出土している。隣接する87-11区や91-15区でも同様に多くの遺物が検出されており、全容はまだはっきりしないが、この周辺に奈良時代を中心とした集落が営まれていたことが考えられる。

やや海側の府道堺阪南線沿いの88-13区では、10世紀後半から11世紀前半の黒色土器と共に多くの土師器真蛸壺が出土している。黒色土器の出土は全体に少なく、府道泉佐野熊取線の調査区（55-1区）に隣接する84-1区でみられる程度である。88-13区の周辺では、ほかにあまり真蛸壺は出土していない。土坑が検出されたのみであるため、この時期の様相は不明であるが、奈良時代と中世を結ぶ時期の遺物も少量ながらみつかり、居住域は移動しているものの、湊遺跡周辺では集落が継続的に営まれていたことがわかる。

さらに、谷状地形が下がっていく位置にあたる90-5区・91-3区では、中世の遺構面でピットや溝、土坑、井戸などが検出されており、多量の遺物が出土している。内訳は、瓦器椀・小皿、土師器小皿・

鉢、陶磁器、瓦類などのほか、土師器真蛸壺がみられる。隣接する91-6区では、同様の遺物のほかに多くの瓦類が出土しており、周辺に中世寺院が存在したことが考えられる。中世の土師器真蛸壺もまとめて出土する地点はあまりみられないが、須恵器釣鐘型飯蛸壺と同様に破片は広範囲で出土している。

出土する蛸壺は、古墳時代の須恵器釣鐘型飯蛸壺から始まり、奈良時代の土師質釣鐘型飯蛸壺、平安時代後半から中世の土師器真蛸壺へと変遷しているが、恒常的に蛸壺漁を営んでいたことがわかる。具体的な集落はみつかっていないものの、時代による遺物の出土位置の傾向から、ある程度集落の位置を想定することができる。

3. 土錘

湊遺跡で出土する土錘は、中世から近世のものと考えられるが、時期差を求めるのはむずかしい。出土状況も、包含層からのものが多く、製塩土器や蛸壺のようにまとめて出土することがほとんどないため、傾向を探ることも困難である。種類としては、今回の調査でも出土している管状のものがほとんどであり、大部分は小型のものであるが、大型のものもみられる。また、棒の両側に孔をあけた有孔土錘もみられ、段丘上で日新小学校の東側にあたる83-3区では多く出土している。

湊遺跡では、蛸壺漁と共に漁業を営んでいた集落が、中世から近世を通じ現代まで存続していたことが、文献資料などでも記述されており、普遍的に出土する土錘は、これを裏付ける遺物であるといえる。

第2節 上町東遺跡

上町東遺跡は、昭和63年に確認された遺跡であり、調査件数は比較的少ない。ただ、南海本線連続立体交差事業に伴い、遺跡をほぼ横断するかたちで調査がおこなわれたため、個々の調査面積は比較的広く、中世を中心とする遺跡の様相を知ることが可能である。ここでも、湊遺跡と同様に、蛸壺出土調査区と土錘出土調査区を図93に示す。なお、上町東遺跡では、製塩土器の出土はほとんどないことから、ここでは触れていない。

最初に本格的な調査がおこなわれた88-1区では、鎌倉時代の区画溝や掘立柱建物、土坑、井戸などが検出され、多量の遺物が出土した。内訳は、瓦器椀・小皿、土師器小皿・羽釜、瓦質土器甕・羽釜、東播系須恵器鉢、陶磁器、土師器蛸壺などであり、特に多量の瓦器椀が特徴的である。時期は、12世紀後半以降と考えられる。隣接する94-1区・94-3区でも、同様の傾向がみられ、多くの瓦器椀などが出土した。今回のE地区のすぐ南側にあたるが、E地区では線路建設の際の削平により、遺構や遺物の検出はほとんどなく、遺構のひろがりを確認するまでには至らなかった。

南海本線連続立体交差事業に伴う調査では、(財)大阪府埋蔵文化財協会が平成5年度に、今回のD-2区に隣接する部分で調査をおこなっており、掘立柱建物と区画溝、土坑などを検出している。ここでは、一定の方向でつくられた建物群が復原され、D-2区においても同方向のピット列が復原できたことから、この周辺で規格性をもった建物の配置がおこなわれていたことがわかる。時期的には、13世紀後半と15世紀末の2時期に分かれるようであるが、中世を通じて集落が営まれていたことがわかる。

一方、南海本線から離れた部分で、今回のF地区の南側にあたる97-3区においても、掘立柱建物や柵列、土坑、井戸などが検出されており、ほかの調査区と同様に中世を中心とした遺物が多量に出土した。ここでは、中世後期から近世の遺物が主体で、土師器羽釜や瓦質羽釜・甕、瓦器椀、東播系須恵器鉢、陶磁器、土師器蛸壺などがみられる。

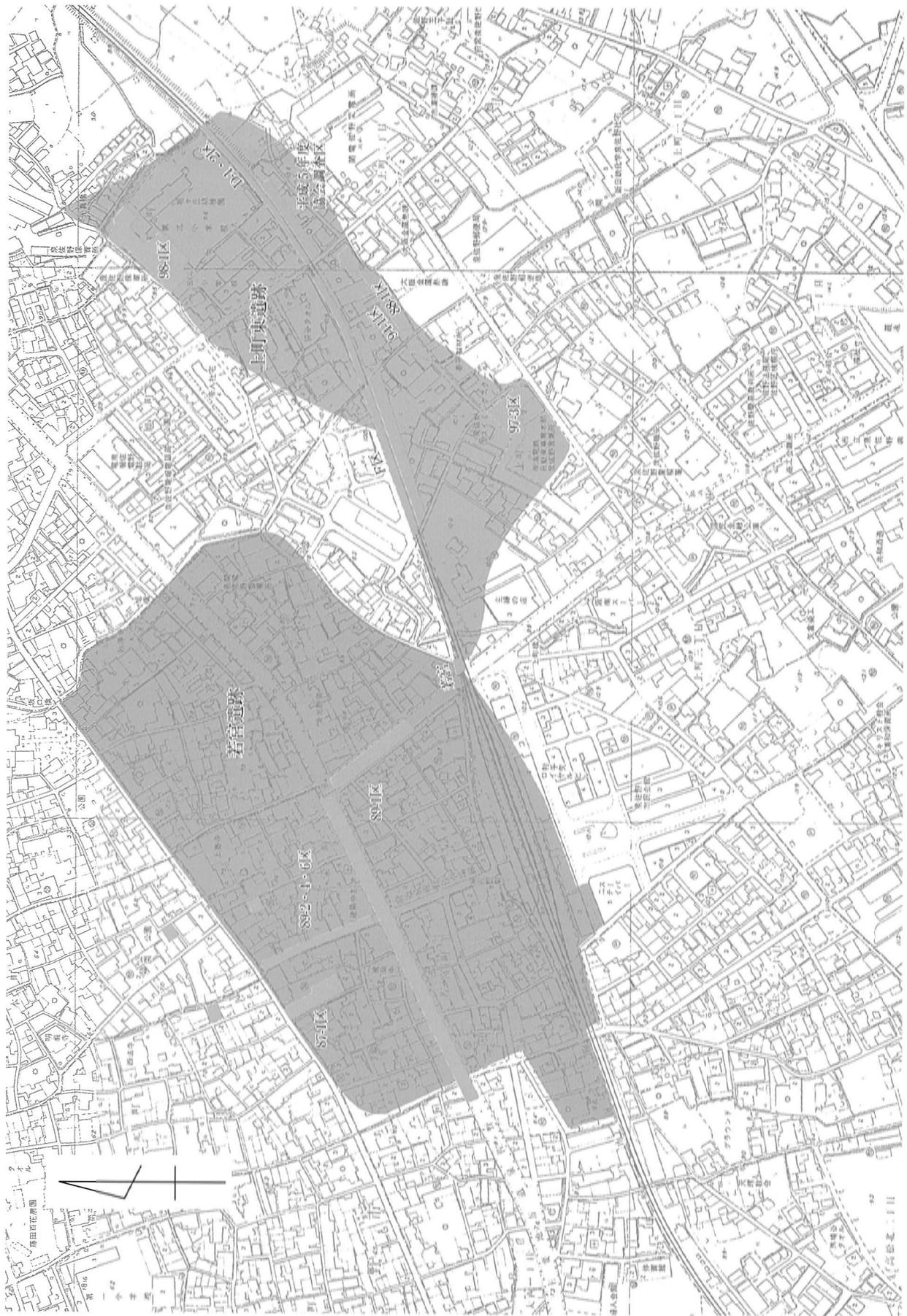


図93 上町東・若宮遺跡蛸壺・土錘出土地点

また、今回のD-2区の北側にある第三小学校の敷地内に設定された98-1区では、掘立柱建物はみつかっていないが、溝や土坑などが検出されている。ここでは、中世末から近世の遺物が主体で、土師器羽釜・焙烙や瓦質羽釜・甕などが出土している。

上町東遺跡は、段丘上に位置しており、湊遺跡の西側の谷状地形を臨む立地条件である。いままでの調査成果から、中世を中心とした集落が営まれていたことがわかる。集落内でも掘立柱建物が多くつくられており、遺物量も比較的多いことから、規模は小さくないといえる。一部で、耕作地が検出されているため、農業をおこなっていたことがわかり、湊遺跡で考えられている漁業主体の集落形態とは、やや異なるものと考えられる。上町東遺跡においても、包含層などから蛸壺や土鍾は出土しており、漁業をおこなっていたことは想定できるものの、湊遺跡に比べるとかなり出土量は少ない。

第3節 若宮遺跡

若宮遺跡は、昭和62年に確認された遺跡であり、上町東遺跡と同様に調査件数は比較的少ない。遺跡の範囲が、現在の泉佐野市街地にあたるため、調査面積が狭く、住宅建て替えや道路改修工事に伴う調査が主体である。このため、遺跡の全容をとらえるまでには至っていないのが現状である。ここでも、上町東遺跡と共に蛸壺出土調査区と土鍾出土調査区を図93に示す。上町東遺跡と同様に、製塩土器の出土はほとんどないことから、ここでは触れていない。

最初の調査である、泉佐野中央市場の建て替えに伴う調査（87-1区）で、溝や土坑、井戸などが検出され、多くの遺物が出土した。内訳は、伊万里焼や唐津焼、備前焼などで、近世を主体とする遺物が多い。泉佐野市街の中心地であり、古くは近世までさかのぼるものの、現在まで生活が営まれている部分であることから、近代の遺物も出土している。

また、遺跡を横切るかたちで走る府道堺阪南線と府道土丸栄線において、関西電力株式会社の地中送電線埋設工事がおこなわれることになり、平成元年度に事前調査を実施している（89-1区）。幅2mほどで非常に狭長な調査であるが、溝や井戸、土坑などが検出され、多くの遺物が出土した。内訳は、伊万里焼や唐津焼、備前焼などで、瓦類や木桶などの木製品もみられる。87-1区と同様に、一部中世の遺物も含まれるが、近世を主体とする遺物が多い。

さらに、遺跡の中央部を縦断するかたちで走る市道泉佐野駅西口線において、道路舗装や下水・ガス工事がおこなわれることになり、平成元年度に事前調査を実施した（89-2・4・6区）。ここでも、非常に狭長な調査となったが、溝や井戸、土坑などが検出され、多くの遺物が出土した。内訳は、伊万里焼や唐津焼、備前焼などで、廃棄土坑が検出されていることから、当時の生活雑器一式が出土したものと見える。特に、伊万里焼・波佐見焼碗（くらわんか茶碗）や皿などが多量にみられる。近世の遺物であるが、18世紀後半以降のものが多いといえる。

若宮遺跡においても、湊遺跡に比べると出土量はかなり減るものの、土鍾や蛸壺はほぼ全調査区で見られる。これは依然として若宮遺跡の範囲においても、漁業を生業としている人々が存在していることを示しているものといえる。近世には、「佐野漁民」が活躍したことが記録にも残っていることから、それを裏付けることができる。ただし、遺物の出土量からみると、漁業主体の集落は、湊遺跡の範囲におさまるものと考えるのが妥当であり、今回の調査区よりさらに海側に位置しているものと考えられる。

第9章 まとめ

南海本線連続立体交差事業（第1工区）に伴う湊遺跡・上町東遺跡・若宮遺跡の調査成果は、これまでに述べた通りである。線路部分の調査ということで、非常に狭長な調査区となっており、結果的には上記3遺跡をちょうど縦断するかたちで大きなトレンチ調査をおこなったことになる。同時期に近接する3遺跡を調査したが、それぞれの遺跡には特徴があり、主体となる時期が異なることや立地条件によっても異なる性格を持つことがわかった。このため、全体をまとめることは困難であることから、調査成果の記述では、遺跡毎よりあえて地区毎に分けて細かい記述をおこなった。ここでは、これらをふまえて、やや広い視野にたつて、これらの遺跡の様相をまとめていこうと思う。

おおまかな遺構・遺物の概略については、第4章第2節や各遺跡の小結で述べているが、記述しきれなかった部分もあることから、改めてここでまとめてみる。

調査区の東半部は、湊遺跡の範囲内である。湊遺跡は、以前より弥生時代末から古墳時代初頭の製塩土器が多く出土する遺跡として有名であり、今回の調査でもB地区において、製塩土器を主体とする土器群などがみつかり、遺跡内から普遍的に出土する遺物の一つであることがわかる。今回の調査区は狭長であるため、遺跡の全容をつかむことは困難であるが、このような狭い調査区からも多量に出土しているため、この付近で製塩作業が活発におこなわれていたことが推測できる。ただし、今回の調査においても、具体的な製塩作業に関する遺構などは検出されなかったことから、依然として湊遺跡における製塩作業は不明のままである。製塩土器を含む土器群を検出したB地区だけではなく、製塩土器がほとんど出土していないA地区においても、土器群がみられ、ほぼ完形の壺や甕が狭い範囲内でまとまって出土している。これらの中には、特異な形状の土器や壺的な使用が想定できる甕などがみられることから、断言はできないが、製塩作業の工程上で使用されていた土器と考えることができる。出土した製塩土器は、ほとんどが脚台部のみであり、既往の調査でも完形品はあまりみつからないが、今回の調査で、砂層内からほぼ完形品が出土しており、全体形状がわかるものとして貴重である。

A地区からC地区に向かっては、大きな谷状地形であり、調査区を横断するかたちで横切っている。この部分は、自然流路が流れており、B地区ではかなり重複した流路や深い砂層が検出されている。砂層の厚い堆積により、かなり強い流れが繰り返されていたことが想定され、遺構はほとんどみられない。出土遺物より、弥生時代後期から古墳時代前期には、かなりの流量をもった自然流路であったことがわかる。ただ自然流路の中には、部分的に人為的な掘削を伴い、溝として利用しているものがある。土器群などもこれらの溝内から検出されている。全体にとっても居住に適した場所とはいえないが、部分的に安定した場所もあり、ピット群なども検出されている。時期を特定することはできず、建物を復原することもできなかったが、このような悪い立地条件の中でも建物を建てていたことがわかる。

先の記述では触れなかったが、この自然流路内から検出された炭化物を放射性炭素年代測定（AMS法）に依頼し、結果を受け取っている。残念ながら4点の試料のうち、測定に成功した試料は1点のみであったが、B地区の自然流路出土炭化物の年代はA.D.245～390であり、弥生時代後期から古墳時代前期にあたるものといえることができる。

さらに、B地区の自然流路の土層観察により、地震によるものと考えられる粘土層の攪拌がみつかった。この層は、年代測定用の試料を採取した層より下層であることから、弥生時代後期以前のものと想

定される。C地区においても、さらに下層相当部分で土層のずれが顕著に残っており、地震の影響と考えられる。調査区内では、明瞭な噴砂などは確認できなかったため、地震の規模はあまり大きくなかったようであるが、このような軟弱地盤において地震の痕跡をみることができる例である。

東半部の谷状地形とは異なり、西側の上町東遺跡・若宮遺跡は、台地上に立地している。線路敷設の際の整地などで、かなり攪乱や削平をうけているため、包含層や遺構面の残存状況は悪かったが、多くのピットや溝が検出され、中世の集落の様相を知ることができた。ただし、このことは、今回の狭長な調査区での成果のみでは困難であり、隣接地での泉佐野市教育委員会や（財）大阪府埋蔵文化財協会などの調査成果とあわせることにより、はじめて可能となったものである。

上町東遺跡部分では、ほぼ全面にわたって中世の集落域や耕作地などが検出され、F地区では大型の掘立柱建物も復原することができた。屋敷を区画する溝も数条検出されたことから、一般集落ではなく、区画溝を有する屋敷を中心とした建物構成が考えられる。詳細を明らかにするには、さらに広い調査面積が必要であるが、東側の谷状地形を望む台地上に屋敷がひろがる景観が想定できる。

細かく見ていくと、D-2地区・E地区とF地区では若干の時期差があるようである。D-2地区・E地区は、出土遺物の全体量が少ないこともあるが、その出土量は多くない。出土土器の比率をみても、D-2地区・E地区では瓦質土器の比率が高い傾向が認められる。集落構造を比較できるほど遺構が検出されていないため、現時点では断定できないが、台地上の比較的安定した立地条件のF地区付近で、まず、中世前期の集落がつくられ、その後（中世後期）にやや縁辺部へ集落の主体が移ることが想定できる。D-2地区・E地区の隣接地の調査では、区画溝を有する屋敷が検出されており、屋敷地を中心とした耕作地のひろがりが見られる。有力者が屋敷を構え、新たに耕作地を開拓していったことも考えられよう。今後の周辺での調査成果が待たれるところである。

若宮遺跡の調査は、狭い範囲の調査であり、整地による削平が著しいことから、大きな成果をあげることができなかった。ただ、近世初頭に廃絶した井戸の検出により、この地域での中世の生活の痕跡がみつかったことは意義のあることである。若宮遺跡は、近世の遺跡として知られているが、調査は部分的なものしかおこなわれておらず、大部分が現在の市街地と重なっているため、詳細は明らかではない。今回、中世の遺構が検出されたことにより、さらに古い時期の遺構面の存在も考えられ、今後の調査成果が待たれるところである。

遺跡調査の成果については以上であるが、最後に今回の調査区域である南海電鉄の線路敷について、一言加えさせていただくこととする。D-1地区の調査成果で詳細は述べたが、今回の調査区として掘削した部分は、南海電鉄創生期につくられた線路敷であり、約100年前の土木工事の成果である。現在の工法ではたいしたことではないことでも当時は機械もほとんどなく、人海戦術によって進められたことを考えると、盛土や築堤の工事は相当の大事業であったことが想像できる。鉄道が開通することは、当時大変なことであり、移動や輸送の面で飛躍的に産業が発達する原動力となったものである。築堤の土層をみると、細かい工法を知る痕跡はあまり残っていないが、現在土留め支保工を施し、機械によって掘削してもなお残る盛土の土量を考えると、鉄道をこの地に敷設しようとした当時の人々の情熱が伝わってくるようであり、それを忘れてはならないと感じるものである。

今後、このような線路敷の遺跡調査が増加するものと考えられるが、近代において大事業であった鉄道敷設事業についても、ぜひ調査対象としていただきたいと思う。

第10章 分析・考察

第1節 ^{14}C 年代測定

川崎地質株式会社関西支社 居川 信之

1. 調査概要

分析試料の数量

財団法人大阪府文化財調査研究センターが採取した木材について年代測定を行った。

分析試料の数量は以下の通りである。

- ・ ^{14}C 年代測定（AMS法） 2点
- ・ ^{14}C 年代測定（ β 線計数法） 2点

2. 分析方法

^{14}C 年代測定法

（加速器質量分析[AMS]法）

- 1) 測定試料は土壌中の有機物、木片、炭化物等とし、数g程度を採取する。
- 2) 採取した試料はアルミホイルに包み、ポリエチレン袋に入れ封をする。
- 3) 試料に応じた洗浄及び化学処理によって、二次的混入物を除去し、グラファイト化する。
- 4) タンデム型加速器質量分析計を用い放射性炭素（ ^{14}C ）濃度を測定する。
- 5) 試料の ^{14}C 濃度から、 ^{14}C の半減期5568年を用いて1950年からの逆算年代を計算する。1万年より新しい試料については暦年代補正を行う。

（ β 線計数法）

- 1) 測定試料は土壌中の有機物とし、500g程度を採取する。
- 2) 採取した試料は速やかに乾燥させ、ポリエチレン袋に入れ封をする。
- 3) 試料に応じた化学処理によって、試料中の炭素を二酸化炭素やアセチレンの形にして、炭素同位体 ^{14}C の出す β 線をガス比例計数管または液体シンチレーションカウンターを用いて測定する。
- 4) 試料の ^{14}C 濃度から、 ^{14}C の半減期5568年を用いて1950年からの逆算年代を計算する。1万年より新しい試料については暦年代補正を行う。

3. 分析結果

^{14}C 年代測定結果を表1に示す。試料採取地点の断面図を図94に示す。また図95として暦年代補正資料を添付する。

表1 湊遺跡他の¹⁴C年代測定結果

試料番号	測定方法	試料種別	分析No	測定 ¹⁴ C年代 (yBP)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (yBP)	暦年代 (年)
No. 1	AMS	木片	Beta-142141	49250 ± 1550	-29.7	49170 ± 1550	-
No. 2	β線	木片	Beta-142142	>46190	-27.3	>46150	-
No. 3	AMS	木片	Beta-142143	>52200	-29.2	>52130	-
No. 4	β線	木片	Beta-142144	1810 ± 50	-29.9	1730 ± 50	AD245~390

項目の説明

・分析No…分析機関（BETA ANALYTIC INC.）における分析整理番号

・測定¹⁴C年代…試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した年代。半減期として5568年を用いた。

・補正¹⁴C年代…試料の安定同位対比（¹³C/¹²C）を測定して、試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。

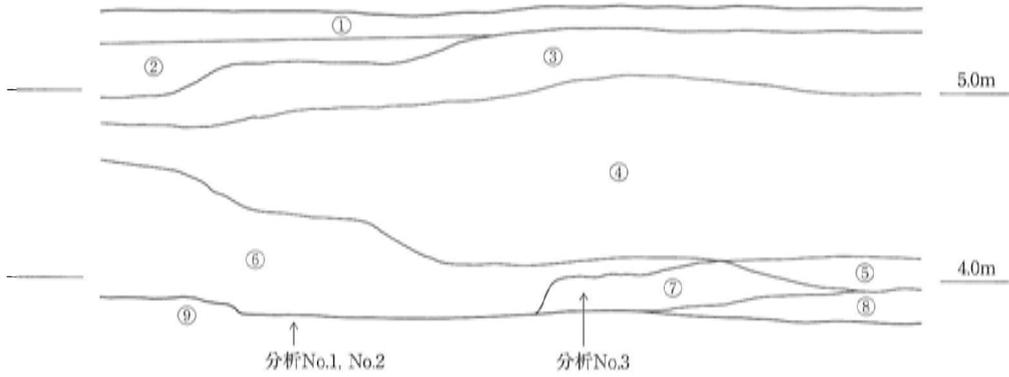
δ¹³C…この安定同位対比は、下式のように標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]} \times 1000$$

・暦年代…過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの測定、サンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al,1998,Radiocarbon 40 (3)）により約19,000年までの換算が可能になった。

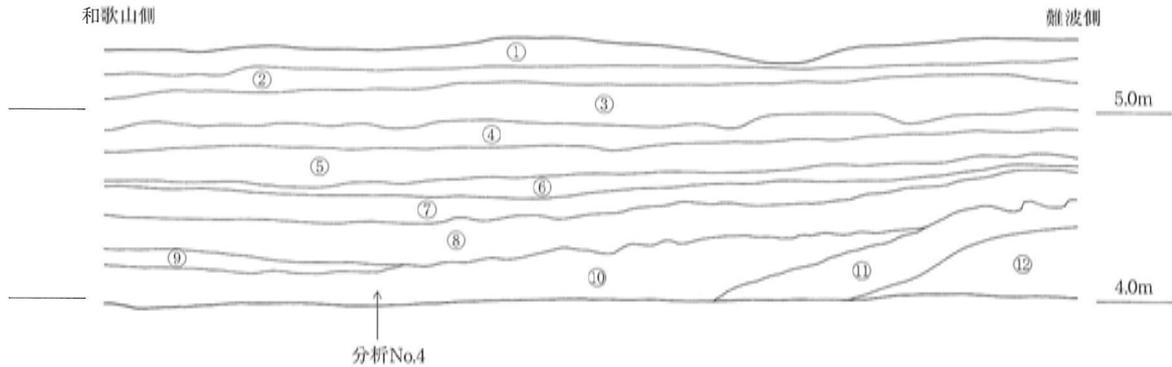


C地区



1. 2.5Y 7/8 黄色 細砂混シルト
2. 5G 6/1 緑灰色 シルト (粘性あり)
3. 2.5Y 8/6 黄色 シルト混中細砂
4. 7.5YR 5/2 灰褐色～5/8明褐色 粗～中砂混礫
5. 2.5Y 8/2 灰白色 粘土 7より植物遺体少ない
6. 7.5YR 8/6 浅黄橙色～8/1 灰白色 シルト混粗砂のラミナ状
7. N 7/0 灰白色 粘土 9より植物遺体少ない
8. N 5/0 灰色 細砂
9. N 4/0 灰色 粘土 植物遺体を多く含む

B地区



1. 10YR 4/4 褐色 シルト混粗?細砂 3層
2. 10YR 6/6 明黄褐色 シルト混粗?細砂 3含む 4層
3. N 5/0 灰色 細砂混シルト (粘性有) 5層
4. 2.5Y 5/6 黄褐色 細砂混シルト (粘性有) 6層
5. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 細砂混シルト 礫含む
6. 5YR 4/8 赤褐色 粗砂混シルト
7. 5Y 4/1 灰色 粗砂混シルト
8. 5G 2/1 緑黑色 シルト混粘土
9. 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 粘土 下層に植物遺体含む
10. N 5/0 灰色 粘土 下層に粗砂少量含む、植物遺体含む
11. 10YR 7/1 灰白色 シルト混細砂 植物遺体多く含む
12. 7.5Y 4/1 灰色 粗砂混礫 (径約 1～5 cm)

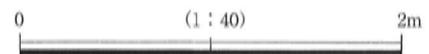


図94 ^{14}C 年代測定試料採取地点断面図

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-29.9;lab. mult=1)

Laboratory Number: Beta-142144

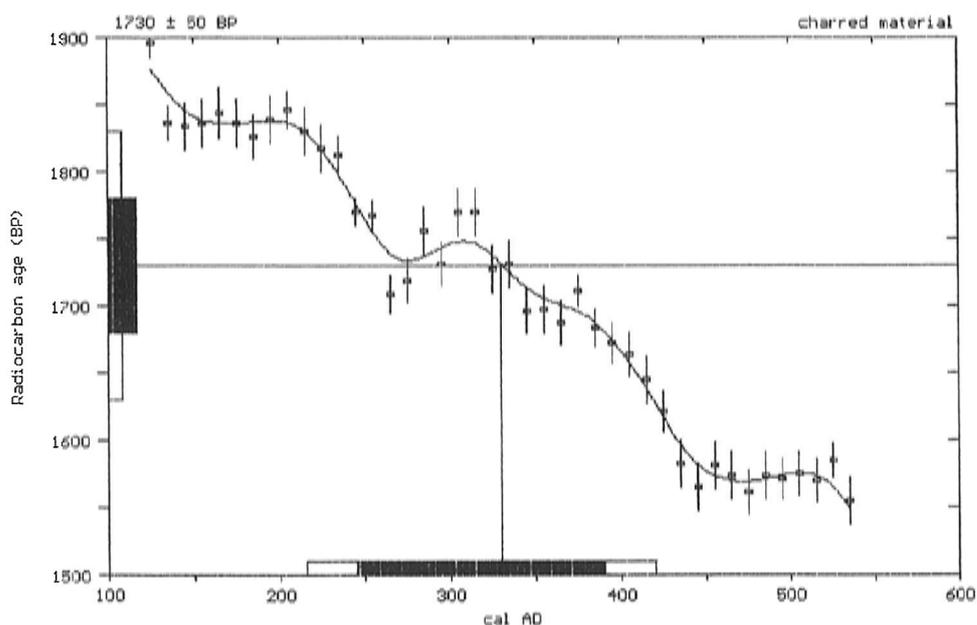
Conventional radiocarbon age: 1730 ± 50 BP

Calibrated results: cal AD 215 to 420 (Cal BP 1735 to 1530)
(2 sigma, 95% probability)

Intercept data:

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: cal AD 330 (Cal BP 1620)

1 sigma calibrated results: cal AD 245 to 390 (Cal BP 1705 to 1560)
(68% probability)



References:

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(3), pxi-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 ■ Tel: (305)667-5167 ■ Fax: (305)663-0964 ■ E-mail: beta@radiocarbon.com

図95 ^{14}C 年代測定暦年補正資料

第2節 地形と景観復原

調査地付近のみならず、泉州南部地域の特徴であるが、内陸の山地から大阪湾に向かう自然河川がほぼ海岸線と垂直方向に流れていることから、同じ方向で段丘を削った谷状地形が多く存在する。遺跡や集落の分布状況をも、これらの自然河川流域を中心としてまとまっている様子が認められる。集落をつなぐ道は、谷状地形を横切り、河川を渡るルートをとっており、海岸線とほぼ平行にのびている。

今回の調査区は鉄道路線であるが、道と同様にほぼ海岸線に平行して走る方向で設定されている。このため、調査では段丘と谷状地形を横切るかたちでトレンチをいれたことになり、現地表面だけでは把握できない地形を確認することができた。調査成果の部分で個々のトレンチで確認された地形に関しては述べているので、ここでは少し範囲をひろげて、調査地周辺の地形を簡単に概観してみることにする。今回の調査で最も特徴的な地形は、A地区からD-1地区にひろがる谷状地形である。図96のカウンターラインをみてもわかるように、現地表面においてもこの谷状地形は容易に見ることができる。何度も述べているが、北東（難波側）から南西（和歌山側）にかけては緩やかに下がっており、反対側のD-1地区とD-2地区の境界部分では急斜面となって上がっている。このことは、時期は確定しないものの、最終的にはD地区側に自然流路の激しい流れが押し寄せて段丘を削ったものといえるが、現在はこの谷状地形の中に大規模な流路は存在していない。現状では、水田や畑地として利用されている。また、谷状地形の最深部にあたるD-1地区で、中世後期頃の土器集積がみつまっていることから、この時期にはすでに大量の水量を有する流路はなかったものと考えられる。一方、谷状地形の北東部（難波側）にあたるB地区では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、自然流路が錯綜して恒常的に流れていることが判明している。ただ、谷状地形のほぼ中央部分にあたるC地区において、流路が確認できない部分が見つかったことから、流路が時期によって移動したものか、人為的に移されたものかは不明であるが、谷状地形の中で流路が2方向に分岐していることがわかった。

また、この谷状地形の上流部分をみると、台地上にある溜池の七ノ池につながるよう見える。七ノ池は、開析谷を利用してつくられた灌漑用の溜池である。当初は、湊遺跡の北東側に位置する佐野川が、遺跡の中央部を縦断する府道と第二阪和国道の交差点付近で、分岐していたものと考えていたが、この開析谷がのびることになれば、この両者はつながらずに別々の流路であった可能性も考えられる。この谷状地形から急斜面で上がる南西部の段丘であるが、比較的安定した大規模な段丘であることから、現在の泉佐野市街になっており、上町東遺跡や若宮遺跡をはじめとして上町遺跡などもひろがっている。これらの遺跡からは、弥生時代から古墳時代の遺構は検出されておらず、遺物量もきわめて少ない。それに対して、中世以降になると急激に遺構や遺物量が増加することから、この時期以降に発展したものといえる。特に、中世の区画溝をもった屋敷や掘立柱建物が多く検出されている。

一方、湊遺跡側の台地上では集落は確認されていないが、それ以前の弥生時代から古墳時代の遺物が多く出土していることから、古くから集落が営まれていたことがわかる。特に谷状地形に向かって下がる部分では、広い範囲で製塩土器が出土しているため、製塩炉などはまだ検出されていないが、集落において製塩作業をおこなっていたことが推測される。

このため、調査区周辺では、当初は湊遺跡側の台地上に集落が営まれていたが、やや時期的には空白があるものの、集落の中心部分が移動し、中世以降は泉佐野市街側の台地上に移って発展し、現在に至っているものと考えられる。

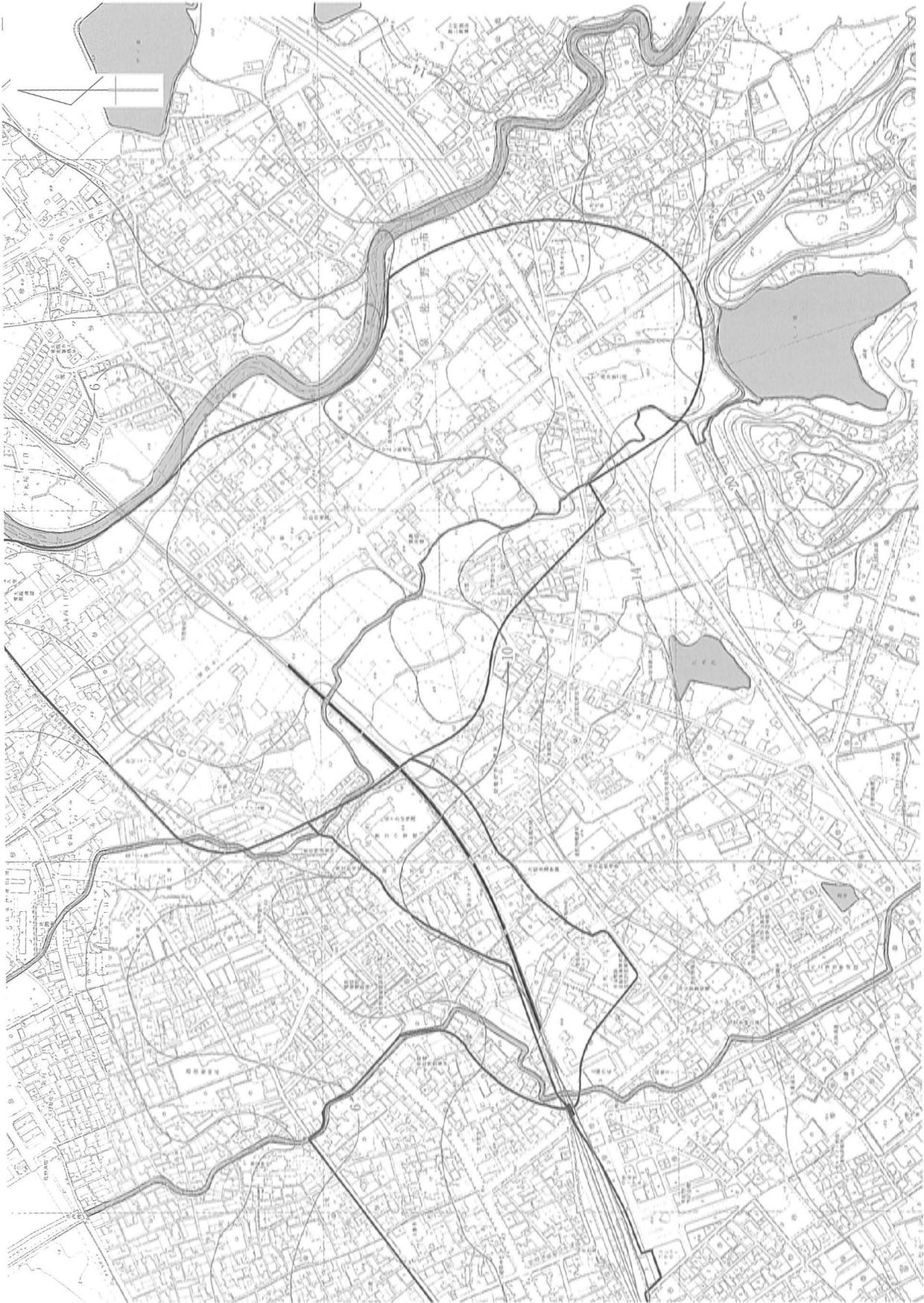


図96 調査区周辺コンター図

第3節 南海電気鉄道の変遷

今回の調査地は、南海電気鉄道株式会社の南海本線の線路敷部分にあたる。今まで述べてきたように、調査地の線路敷は、すでに100年以上経過したものであり、その後ほとんど路線が変更されていないことから、当時の土木技術を知るうえで重要なものといえることができる。遺跡発掘という観点での調査であるため、線路敷設以前に主眼は置かれたが、特に谷状地形を横断する築堤（線路盛土）建設技術などは、当時の最新技術が投入されたものと考えられる。現在のような機械力はまだなく、ほとんど人力によってつくられたものが、現在でも使用されていることは、技術力の高さを物語っているものといえよう。鉄道建設に関わる構造物は、古いものでもかなりの数がまだ残っており、使用中のものも少なくない。特に旧国鉄（JR線）には、100年以上経過したものが多く現存している。今後、発掘調査で古い時期に建設された鉄道構造物を扱う場合は、慎重な調査が望まれる。

ところで、南海電気鉄道株式会社は、現存するわが国の民営鉄道（旧官営鉄道であるJR線を除く）の中で最古の歴史をもつもので、南海本線はまさに最古の路線ということになる。ここでは、南海本線を中心として、南海電気鉄道株式会社の変遷について簡単に述べることにする。

最初の営業路線は、阪堺鉄道株式会社が明治18（1885）年2月に起工し、12月末に大阪難波から大和川間の7.6kmを開通させたことに始まる。この時点では鉄道はまだ大和川を越えておらず、明治21（1888）年5月ようやく橋梁が完成して堺に乗り入れることができるようになる。この鉄道設立にあたっては、閉山した官営鉾山で不要になった機関車やレール、その他付属品の払い下げが認められ、時価の三分の一程度の価格で取得することができたという。このことは、工事の進捗が早まった大きな要因となった。ここでの軌間は2フィート9インチ（約83.8cm）であったが、これは明治18（1885）年6月に閉山した官営釜石鉾山の鉄道の軌道をそのまま採用したためである。阪堺鉄道の初代取締役社長になった松本重太郎は、大阪財界の重鎮であったが、自ら大阪と堺を結ぶ街道を歩いて、通行人や荷車の数を調査し、採算についての確信を得たという。当時は、まだ鉄道に対する認識がなく、様々な妨害があった時代で困難がつきまっていた。ただし、開業後は抜群の収益を示した。明治30（1897）年度のデータによると、1日1哩（約1.61km）あたりの営業純益は、当時の官・民営32線中第1位の64円50銭で、第2位の筑豊鉄道の36円弱を大きく上回っており、明治19（1886）年から明治31（1898）年までの純益は、資本総額の2倍半を超える額に達したという。

ちなみに、わが国最初の官営鉄道が、品川～横浜間で営業を開始したのは明治5（1872）年である。阪神間における最初の官営鉄道は、京浜間より2年遅れて明治7（1874）年に営業を開始したが、わが国初のトンネルと錬鉄製橋梁が設けられた。関西で官営鉄道が開通した約10年後に、最初の民営鉄道が開通したことになる。

阪堺鉄道株式会社の動きに刺激され、堺と和歌山を結ぶ目的のため、明治22（1889）年に紀泉鉄道、明治24（1891）年に紀阪鉄道が相次いで発足した。明治26（1893）年には、両者が合併して紀摂鉄道となったが、明治28（1895）年に南海鉄道と改称した。この間に阪堺鉄道は、明治25（1892）年に難波～住吉間の複線営業を開始している。南海鉄道は、難波・泉佐野・和歌山に建設事務所を設置して建設工事を進め、明治30（1897）年10月に堺～佐野間を開通させ、11月には尾崎まで延長した。ここでは、官営鉄道と同じ狭軌を採用しており、軌間3フィート6インチ（1.067m）である。阪堺鉄道の軌間2フィート9インチは、南海鉄道の負担で改軌されている。この時点で、今回の調査区となる線路は敷設されたこと

になり、以来現在まで営業していることになる。12月には、阪堺鉄道が住吉～堺間の複線営業を開始し、難波～堺間の複線営業が実現された。翌年の明治31（1898）年10月には、南海鉄道が阪堺鉄道を吸収合併し、さらに尾崎～和歌山北口間の開通により、難波～和歌山間の直通列車が運転されるようになった。

明治31（1898）年11月に発行された『南海鉄道案内 上巻』は、一民営鉄道の沿線案内記として最古のものであるが、「南海鉄道の位置」と題し、次のような一文が記されている。開通当時の駅の配置が記されているほか、南海の社名の由来も見えており、興味深い

我南海鉄道は、大阪府下摂津国大阪市南区難波新地六番地に起り、和歌山県下名草郡紀の川の北岸に終る、其間の里程凡そ四十英里（まいる）、摂泉紀の三国を貫通て、難波、天下茶屋、住吉、大和川、堺、湊、浜寺、大津、岸和田、貝塚、佐野、樽井、尾崎、箱作、深日、和歌山の十六駅に停車場を置き、又天下茶屋駅より分岐して、大阪鉄道の天王寺駅に接続す、（中略）又南は紀の川の南岸なる紀和鉄道に依て、岩手粉川を経て大和の五条御所高田八木に至る可く、又淡島より海上僅に五英里（まいる）にして四国に渡る可く、四通八達何れに行くも便ならざるは無れど、殊に南海に便なるを以て、南海鉄道の称が起ったのでございます。

この時点での和歌山駅は、和歌山北口駅（現在の紀ノ川駅付近）であり、ここから現在の和歌山市に達するためには、紀ノ川に橋梁を設けなければならず、最大の難所であった。実際に橋梁が完成し、和歌山市まで開通するのは明治36（1903）年3月であり、工事に約4年を費やすことになる。この間は、渡船で和歌山市街と連絡していた。紀ノ川鉄橋は、南海線の鉄橋の中で最大規模であり、長さ627m余りに及ぶ。また、それ以前においても、尾崎～和歌山北口間には孝子峠越えの難所があり、3ヶ所のトンネルを掘削するという工事をおこなっている。南海線が和歌山まで到達するには、多くの難工事を克服している。開通当時の運転状況は、普通列車が1日上下各11本、急行列車が上下各1本で、所要時間は普通列車が2時間半、急行列車が2時間、運賃は3等片道59銭、往復90銭であった。開業当初は、難波一和歌山間には喫茶室のついた列車が運転されていた。

南海線は、紀和鉄道（現在のJR和歌山線）の和歌山（現在の紀和駅）に乗り入れず、新規に和歌山市駅を設けた。このため、紀和鉄道との連絡の必要性から同時に和歌山～和歌山市間の連絡線もつくられた。この線を利用して、開業当時より難波から南和鉄道（現在のJR和歌山線）の五条まで直通運転していた。一方、大阪側では、大阪鉄道（現在のJR関西線）の官設連絡線（現在のJR大阪環状線の鶴橋・京橋側）の分岐駅である天王寺駅に接続するため、明治33（1900）年に天下茶屋～天王寺間を開通させ、大阪～住吉間の直通運転も開始された。

泉佐野は、近世に遠国へ出漁する漁業基地として知られており、泉州地域の港の中でも、航運の要衝として大いに繁栄した商業地であった。先の『南海鉄道案内』によると、鉄道が泉佐野まで開通した頃、まだ和歌山まで開通していないことから、「それ（鉄道）に接続して此湊より1日数回汽船を和歌山へ往復させ、旅客の便利を謀らん」と、土地の有志が計画したという。この地が商業港市として発展してきたことから、このような積極的な対応も考えられたものといえる。また、泉州地域の近代化に拍車をかけた繊維産業は、タオル工業を中心として明治30年代から発展をとげるが、鉄道開通にともなう物資の運搬や人の流れが促進されたことが、大きな要因となっている。

余談であるが、『泉南市史』によると、尾崎まで南海鉄道が開通した翌年の春早々に、後に平民宰相として知られる原敬が、当時大阪毎日新聞社の要職（のち社長）にあり、金熊寺の観梅のために鉄道を利用して樽井駅までやって来たそうである。『原敬日記』に明治31（1898）年3月6日の記事として次

の一節が見える。「二水会員と共に金熊寺の観梅に赴く、鉄道の便開けて今年始めて観梅に赴く者あるに至りたるなり。」南海鉄道が、郊外行楽や沿線開発的交通手段としての性格を強めていく、新しい鉄道のあり方を早い時期に記録したものとして興味深い。すなわち、鉄道の開通にともない、大阪市内などの都市部から郊外に行楽地へ容易に移動できる（たとえば一泊を要する旅行が日帰り済む）ようになり、行楽地の人出が増加する要因となった。金熊寺梅林までは、「樽井停車場より1里14町ばかりの路程」があるので、より近くを通る阪和電気鉄道（現在のJR阪和線）が開通する以前には、観梅客の多くは南海鉄道で樽井まで来て、そこから人力車を雇ったようである。

さらに、調査区周辺に関しては、明治44（1911）年10月に貝塚～泉佐野間が複線化し、同年11月には和歌山市まで全線電化が完成する。蒸気鉄道から電気鉄道への転換は、甲武鉄道（現在のJR中央線）に次いで日本で2番目のものであった。南海鉄道は、甲武鉄道の電化事業を実際に指揮した技術者を招聘し、電化を進めるほど力を入れていた。電化によりスピードアップが促進され、従来の蒸気列車で難波～和歌山市間は急行1時間50～56分、普通列車2時間30～40分を要していたものが、全列車が従来の急行列車並みの1時間50分前後となった。このため、花形列車であった急行列車の「和歌号」や「浪速号」は廃止され、喫茶室もなくなってしまう。蒸気機関車は貨物専用として残った。なお、民営鉄道における最初の電気機関車は、大正5（1916）年に大阪高野鉄道堺東工場で製造された凸形機である。全長約9m、重量20.5tで、車体は木製、アメリカのジェネラル・エレクトリック社製70馬力電動機4台を同国ブリル社製台車に搭載したものという。翌年には、国産の台車と電動機を使って同形機を製造している。

ちなみに、関西の民営鉄道では、明治38（1905）年4月に阪神電気鉄道が大阪出入橋～神戸三宮間開通、明治43（1910）年3月に箕面有馬電気鉄道（現在の阪急）が梅田～宝塚間開通、4月に京阪電気鉄道が天満橋～京都五条間開通しており、南海鉄道が和歌山まで全線電化を達成した頃、大阪北部ではようやく鉄道網が整備され始めている。南海鉄道が蒸気鉄道から電気鉄道への転換をしているのに対し、これらの鉄道は当初から電気鉄道でつくられている。蒸気鉄道は高い水準を持っていて、最初から高速電車を走らせる機能を備えていたといわれる。さらに、箕面有馬電気鉄道は、大正7（1918）年に社名を阪神急行鉄道と改称し、大正9（1920）年7月に梅田～上筒井間を開業している。南海鉄道では、大正11（1922）年12月に難波～和歌山市間の複線化が完成した。なお、これに先立ち同年9月には、南海鉄道が大阪高野鉄道株式会社と高野大師鉄道株式会社を合併し、現在の南海高野線（汐見橋～高野下間）を保有することとなる。

大阪高野鉄道株式会社の前身は、明治29（1897）年に設立された高野鉄道株式会社である。明治31（1898）年1月に堺東～狭山間、3月にさらに河内長野まで開通している。南海鉄道が佐野・尾崎への延伸工事をおこなっていた頃、会社は異なるものの、時期を同じくして鉄道敷設工事が進められていたことになる。ところで、この路線の中で、狭山～大阪狭山市（旧狭山遊園前）間に大規模な盛土の築堤が設けられている個所があり、今回の調査区でみられる築堤と同様の方法でつくられたものと考えられる。ここでは、数本の道路や水路が築堤を横切っており、れんが巻きのトンネルが現在でも残っている。記録によると、昭和7（1932）年に竣工した南海ビル建設の際、掘った土砂を連夜貨車に積み込んで難波から運び築いたものとされている。ただし、この記事は複線化工事の時期のものであり、開通当時とは別の場所から土砂を運んだことが考えられる。土砂採取地および運搬方法などは不明である。南海本線の路線は、尾崎までは比較的起伏が少ないことからトンネルもなく、大きな河川も横切っていないこと

から、工事は順調に進んだ旨の記述もみられるが、細かい部分では今回の調査区で見られるような築堤なども存在しており、決して簡単な工事だったわけではないと考えられる。鉄道開業以前の土砂運搬には、相当の苦勞があったものと推測される。

南海本線では、大正11（1922）年12月に難波～和歌山間の複線開通し、所要時間1時間35分の急行を新設した。翌年大正12（1923）年10月には、蒸気機関車の営業を廃止している。大正13（1924）年には、所要時間1時間の特急の運転を開始し、喫茶室が復活した。大正14（1925）年3月には、岸ノ里で南海線と高野線の連絡が完成し、難波から橋本方面への列車直通が可能になった。また、大正15（1926）年12月には、輸送力増強のため、天下茶屋～粉浜間が複々線化され、昭和6（1931）年12月にはさらに住吉公園まで複々線化が進んだ。昭和4（1929）年には、難波駅に南海高島屋がオープンし、昭和7（1932）年7月の難波駅大改築完成にともない、高島屋南海店として全店営業を開始した。昭和13（1938）年10月には、昭和8（1933）年に梅田～心齋橋間で開業していた大阪地下鉄が難波まで延長されたため、大阪キタからの便がよくなった。

この頃、大阪南部で新規鉄道の計画が立てられ、大正15（1926）年に阪和電気鉄道株式会社が設立された。昭和4（1929）年、羽衣～鳳間から漸次開業していき、昭和5（1930）年6月には天王寺～東和歌山間が開通した。現在のJR阪和線である。当時、紀勢西線は紀伊田辺まで開通しており、東和歌山で連絡することから、天王寺からの直通運転が可能となった。鉄道省の認可をうけ、昭和8（1933）年には、阪和間ノンストップの48分、東和歌山～紀伊田辺間ノンストップで運転した。毎週土曜日午後には天王寺発、日曜日午後には紀伊田辺発という週末観光列車で、名称は公募で「黒潮」となった。さらに紀勢西線が紀伊富田まで開通したため、白浜口（現在の白浜）まで延長運転となった。この時、特急の所要時間は阪和間で45分に短縮し、表定速度81.7キロになった。当時の国鉄の特急「燕」の表定速度は70キロ代であったことから、当時の最高速列車であった。

昭和9（1934）年11月には、南海鉄道も和歌山市での連絡を利用して、難波～白浜口間の黒潮列車の直通運転を開始した。南海線は、線内ノンストップ運転で阪和電鉄に対抗したが、スピードの点では劣っていた。そのため、昭和11（1936）年夏に、サービス向上のため、冷房車を登場させた。この時は、試作車のため、1日4往復の特急列車にしか連結できなかったが、翌年には8両の冷房車を揃え、ほとんどすべての特急が冷房車で運転されるようになった。ただし、戦時体制に突入したため、昭和13（1938）年には冷房機が取り外されてしまった。

鉄道省の働きかけにより、阪和電気鉄道株式会社は、昭和15（1940）年12月に南海鉄道に吸収合併され、南海山手線と呼称されるようになった。あまりにも激しいスピード競争や運賃競争のため、安全性や経済面で無理が生じるという理由である。その後、昭和19（1944）年5月には、南海山手線を運輸通信省に譲渡し、国鉄の所有となった。

また、6月に南海鉄道は戦時統合のため、関西急行鉄道株式会社と合併し、近畿日本鉄道となった。その後、戦災にあい、空襲による駅舎被害や車両の焼失などをこうむったが、終戦とともに復活をとり、昭和21（1946）年7月には急行列車の運転を再開している。さらに、翌年の昭和22（1947）年6月には、近畿日本鉄道から分離した。この時は、独立した会社として存続していた高野山電気鉄道（現在の南海高野線高野下～高野山間）を南海電気鉄道に改称した上で、旧南海鉄道傘下の路線を譲り受けるという形をとっている。

昭和23（1948）年11月には、深日港から淡路島や四国へ渡る航路を開設した。この年には、急行を難

波発毎時0分、準急を毎時30分に走らせるようになった。急行の所要時間は60分、準急は泉佐野から各駅停車となり、所要時間は100分であった。昭和29（1954）年には、新型車両を投入し、2往復の特急を新設した。さらに、昭和26（1951）年4月には、紀勢西線への直通列車が復活した。1往復のみであったが、国鉄から借り入れた車両を使い、南海線内では電車が牽引した。昭和34（1959）年7月には、国鉄のディーゼル準急「きのくに」を東和歌山で分割併合して、うち2両（全車指定）を難波発着とした。昭和36（1961）年2月には、南紀直通準急「南紀」が登場し、難波～新宮間で運転されるようになった。しかし、昭和42（1967）年には、紀勢線直通の客車は廃止され、急行「きのくに」の直通運転も、昭和60（1985）年に国鉄がディーゼル急行を廃止したためなくなってしまった。

一方で、四国への連絡ルートの開発を図り、昭和31（1956）年5月には、和歌山市～和歌山港間の和歌山港支線が開通し、和歌山港～小松島港間の航路を開設した。この時、四国連絡特急「あわ」が登場した。昭和38（1963）年12月には、四国連絡特急「あわ」「とさ」に一部座席指定制を実施するようになった。昭和60（1985）年には、特急「サザン」が登場した。座席指定車両に一般車両を連結したもので、当初は座席指定車両2両に一般車両4両編成、全車座席指定車両4両編成、一般車両のみ6両編成のものが走っていたが、現在では座席指定車両4両に一般車両4両編成、全車座席指定車両8両編成である。

さらに、泉州沖の大阪湾に人工島をつくり、建設された関西国際空港への乗り入れ路線となり、泉佐野から関西空港線への直接乗り入れが実現した。今回の調査は、連続立体交差事業の一環であるが、関西空港線への乗り入れ路線も関連している。空港連絡橋上の線路は、JR線との共同運行となっている。関西国際空港の開業にともない、アクセス線となる関西空港線も開業し、南海線では新たに新型特急「ラピート」が登場させ、空港急行も新設した。特急「ラピート」は、ノンストップの「ラピートα」と新今宮・天下茶屋・堺・岸和田・泉佐野に停車する「ラピートβ」が運行されている。

大阪側では、天下茶屋駅の大改修をおこない、高野線との連絡がスムーズになった。これに伴い、特急・急行の停車駅とした。また、地下鉄堺筋線の延長開業により、キタの阪急電鉄との連絡が容易になり、関西国際空港への利便性を高めている。

以上、簡単に南海線を中心とした鉄道の変遷を述べたが、車両の変遷やプロ野球南海ホークスの話題なども見逃せない。今後、機会があれば、記述してみたいと思う。

参考文献

- 『大阪府誌 第四編』大阪府 1903
- 『泉佐野市史 復刻版』泉佐野市 1980
- 『南海沿線百年誌』南海電気鉄道株式会社 1985
- 『泉南市史 通史編』泉南市 1987
- 『新修大阪市史 第5巻』大阪市 1991
- 『新修大阪市史 第6巻』大阪市 1994
- 原田勝正「鉄道の開通と地域社会」『講座・日本技術の社会史 第八巻 交通・運輸』日本評論社 1985
- 佐藤博之・浅香勝輔「民営鉄道の歴史がある景観Ⅰ」古今書院 1986
- 川島令三『全国鉄道事情大研究 大阪南部・和歌山篇』草思社 1993
- 堤一郎『近代化の旗手、鉄道』（日本史リブレット59）山川出版社 2001

遺物一覽表(1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	器形	部位	地区	遺構	備考
1	20	39	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器2
2	20	39	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器11
3	20	39	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器4
4	20	39	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器10
5	20	39	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器11
6	20	39	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器2
7	20	40	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器18
8	20	40	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器11
9	20	40	弥生土器	甕		A	溝A-13	土器8
10	20	40	弥生土器	甕		A	溝A-13	
11	20	40	弥生土器	鉢		A	溝A-13	土器5
12	20		弥生土器	壺	底部	A	溝A-13	土器6
13	20		弥生土器	壺	底部	A	溝A-13	土器15
14	21		弥生土器	高杯	杯部	A	溝A-13	土器17
15	21	40	弥生土器	高杯	杯部	A	溝A-13	土器18
16	21	41	弥生土器	高杯		A	溝A-13	土器18
17	21	41	弥生土器	高杯		A	溝A-13	土器18
18	21		弥生土器	高杯		A	溝A-13	土器18
19	21		弥生土器	高杯	脚部	A	溝A-13	土器18
20	21		弥生土器	高杯	脚部	A	溝A-13	土器18
21	21		弥生土器	高杯	脚部	A	溝A-13	土器17
22	21	41	弥生土器	甕		A	溝A-23	土器3
23	21	41	弥生土器	高杯		A	溝A-23	土器1
24	21	41	弥生土器	高杯	脚部	A	溝A-23	土器4
25	21		弥生土器	高杯		A	溝A-23	土器6
26	21		弥生土器	鉢		A	溝A-23	土器2
27	21	41	弥生土器	鉢		A	溝A-23	土器5
28	21	42	土師器	壺	口縁部~頸部	A	土坑A-9	
29	21	42	土鍾			A	溝A-1	
30	21	42	土鍾			A	溝A-1	
31	21	42	土鍾			A	側溝	
32	21	42	土師質	蛸壺		A	盛土	
33	21	42	須恵器	蛸壺		A	2層	
34	21	42	須恵器	蛸壺		A	3層	
35	21	42	土師質	蛸壺		A	盛土	
36	21	42	土鍾			A	2層	
37	21		土鍾			A	2層	
38	21		土鍾			A	2層	
39	21		土鍾			A	2層	
40	21		土鍾			A	盛土	
41	21	42	土鍾			A	2層	
42	21		土鍾			A	2層	
43	21	42	土鍾	板状土鍾		A	盛土	有孔
44	21		土鍾			A	側溝	大型
45	34	43	弥生土器	甕		B	土器群1	
46	34	43	弥生土器	甕		B	土器群1	
47	34	43	弥生土器	甕		B	土器群1	
48	34	43	弥生土器	甕		B	土器群1	
49	34	43	弥生土器	甕		B	土器群1	
50	34	43	弥生土器	甕		B	土器群1	
51	34		弥生土器	甕	底部	B	土器群1	

遺物一覧表(2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	器形	部位	地区	遺構	備考
52	34		弥生土器	壺	底部	B	土器群 1	
53	34		弥生土器	壺	体部下半	B	土器群 1	
54	34	44	弥生土器	甕		B	土器群 2	
55	35		製塩土器		完形	B	土器群 3	
56	35	45	製塩土器		完形	B	土器群 3	
57	35	45	製塩土器		口縁部欠損	B	土器群 3	
58	35		製塩土器		口縁部	B	土器群 3	
59	35		製塩土器		口縁部	B	土器群 3	
60	35		製塩土器		口縁部	B	土器群 3	
61	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
62	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
63	35		製塩土器		口縁部	B	土器群 3	
64	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
65	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
66	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
67	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
68	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
69	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
70	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
71	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
72	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
73	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
74	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
75	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
76	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
77	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 3	
78	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 4	
79	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 4	
80	35		製塩土器		脚台部～体部	B	土器群 4	
81	35		製塩土器		脚台部	B	土器群 4	
82	35		製塩土器		脚台部	B	土器群 4	
83	35		製塩土器		脚台部	B	土器群 4	
84	35		製塩土器		脚台部	B	土器群 4	
85	35		製塩土器		脚台部	B	土器群 4	
86	35		製塩土器		脚台部	B	土器群 4	
87	36		庄内系	甕	口縁部	B	土器群 5	
88	36		弥生土器	広口壺		B	土器群 5	
89	36		弥生土器	鉢	口縁部	B	土器群 6	
90	36	44	弥生土器	甕		B	土器群 6	
91	36		弥生土器	甕		B	土器群 6	
92	36	44	弥生土器	甕		B	土器群 6	
93	36		弥生土器	鉢	口縁部	B	土器群 6	
94	36		弥生土器	鉢		B	土器群 6	
95	36		弥生土器	鉢		B	土器群 6	
96	36	44	弥生土器	鉢		B	土器群 6	製塩土器の可能性
97	36		弥生土器	広口壺	口縁部	B	土器群 6	
98	36		弥生土器	甕か鉢	底部	B	土器群 6	
99	36		弥生土器	鉢	底部	B	土器群 6	
100	37	45	製塩土器			B	溝B-83	
101	37		土師器	小型甕		B	溝B-83	
102	37	45	須恵器	杯蓋		B	溝B-39	

遺物一覧表(3)

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	器形	部位	地区	遺構	備考
103	37	45	須恵器	杯身		B	溝B-39	
104	37	46	須恵器	蛸壺		B	溝B-38	
105	37	46	須恵器	蛸壺		B	溝B-38	
106	37	45	施釉陶器	皿	高台部	B	溝B-1	
107	37	46	須恵器	蛸壺		B	砂層上面	
108	37	46	須恵器	蛸壺		B	砂層上面	
109	37	46	須恵器	蛸壺		B	黒色粘土層	
110	37		土師質	蛸壺		B	砂層上面	
111	37	45	波佐見焼	染付碗		B	黒色粘土層上面	仏具の可能性
112	37	45	製塩土器		脚台部	B	砂層	脚台Ⅰ式
113	37		製塩土器		脚台部	B	側溝	脚台Ⅱ式
114	37		製塩土器		脚台部	B	砂層	脚台Ⅰ式
115	37		製塩土器		脚台部	B	砂層	脚台Ⅰ式
116	37	45	製塩土器		脚台部	B	砂層	脚台Ⅰ式
117	37		製塩土器		脚台部～体部	B	側溝	脚台Ⅱ式
118	37	45	製塩土器		脚台部	B	砂層	脚台Ⅰ式
119	37	46	土鍾			B	3層	大型
120	37	46	土鍾			B	3層	
121	37		土鍾			B	2層	
122	37	46	土鍾			B	2層	
123	37	46	土鍾			B	黒色粘土層上面	
124	37	46	土鍾			B	2層	
125	37	46	土鍾			B	2層	
126	37	46	土鍾			B	2層	
127	48		弥生土器	甕	口縁部	C	溝C-9	土器4 口縁・底部の2個体
128	48		弥生土器	長頸壺	口縁部	C	溝C-9	土器5
129	48		弥生土器	甕	底部	C	溝C-9	土器2
130	48		弥生土器	甕	底部	C	溝C-9	土器4 口縁・底部の2個体
131	48		弥生土器	壺	底部	C	溝C-9	土器1
132	48		弥生土器	壺	底部	C	溝C-9	土器3
133	48	48	土鍾			C	溝C-9	
134	48	47	唐津窯系	溝縁皿		C	溝C-7	
135	48	47	備前焼	小徳利	底部	C	溝C-7	
136	48	47	波佐見窯系	染付草花文碗	下半部	C	溝C-7	高台内「大明年製」銘有り
137	48	47	瀬戸窯系	染付碗	口紅皿	C	溝C-8	
138	48	47	波佐見窯系	染付碗	高台部	C	溝C-7	メンコに転用
139	48	48	土鍾			C	溝C-7	
140	48		軒平瓦			C	溝C-7	
141	48	48	土鍾			C	溝C-8	
142	48	48	土鍾			C	溝C-7	
143	48	48	土鍾			C	溝C-8	大型
144	49	48	土師質	蛸壺		C	5層	
145	49	48	土師質	蛸壺		C	4層	
146	49	48	土師質	蛸壺		C	斜面包含層	
147	49	48	土鍾			C	拡張部	大型
148	49	48	土鍾	有溝土鍾		C	4層	大型
149	49	48	土鍾			C	4層	大型
150	49		土鍾			C	拡張部	
151	49	48	土鍾			C	2層	
152	49	48	土鍾			C	2層	
153	49	48	土鍾			C	包含層	

遺物一覽表(4)

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	器形	部位	地区	遺構	備考
154	49		土錘			C	3層	
155	49	48	土錘			C	包含層	
156	49	48	土錘			C	4層	
157	49		土錘			C	2層	
158	49	48	土錘			C	包含層	
159	49	48	土錘			C	5層	
160	49		土錘			C	盛土	
161	49	48	土錘			C	拡張部	
162	49		土錘			C	2層	
163	49	48	土錘			C	盛土	
164	49	48	土錘	板状土錘		C	包含層	有孔
165	49	48	石棒			C	包含層	縄文時代
166	49	48	石製品			C	礫層	緑泥片岩
167	57		瓦質土器	羽釜	口縁部	D-1	礫群	石群2
168	57	49	瓦質土器	羽釜	口縁部	D-1	礫群	石群2
169	57		瓦質土器	羽釜	口縁部	D-1	礫群	石群2
170	57	49	瓦質土器	羽釜	口縁部	D-1	礫群	石群2
171	57	49	瓦質土器	搗鉢		D-1	礫群	石群2
172	57	49	瓦質土器	甕	口縁部	D-1	礫群	石群2
173	57	49	瓦質土器	甕	口縁部	D-1	礫群	石群2
174	57	49	瓦質土器	甕	口縁部	D-1	礫群	石群2
175	57		湊焼	甕	口縁部	D-1	礫群	石群2
176	57		湊焼	甕	底部	D-1	礫群	石群2
177	57	50	土師器	真蛸壺		D-1	礫群	石群2
178	57		土師器	真蛸壺	体部下半	D-1	礫群	石群2
179	57	49	瓦質土器	香炉		D-1	礫群	石群4
180	58		瓦質土器	香炉	口縁部	D-1	黒色土層	
181	58	50	土師器	蛸壺		D-1	黒色土層	
182	58		土師器	土鍋		D-1	礫群	
183	58		土師器	焙烙		D-1	盛土	
184	58	49	土師器	焙烙		D-1	盛土	
185	58		土師質	五徳	底部	D-1	攪乱	
186	58	50	土錘			D-1	盛土	
187	58	50	土錘			D-1	黒色土層	
188	58		土錘			D-1	盛土	
189	58		土錘			D-1	溝D-61	
190	58	50	土錘			D-1	盛土	
191	58	50	土錘			D-1	盛土	
192	58		土錘			D-1	盛土	
193	58	50	土錘			D-1	攪乱	
194	58		土錘			D-1	盛土	
195	58	50	土錘			D-1	盛土	
196	58		土錘			D-1	盛土	
197	58	50	土錘			D-1	攪乱	
198	58	50	土錘			D-1	盛土下	
199	58	50	土錘			D-1	溝D-62	
200	58	50	土錘			D-1	盛土	
201	58	50	土錘			D-1	盛土	
202	58	50	土錘			D-1	包含層	
203	58	50	土錘			D-1	盛土	
204	58	50	土錘			D-1	盛土	

遺物一覽表(5)

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	器形	部位	地区	遺構	備考
205	58		土鍾			D-1	盛土	
206	58	50	土鍾			D-1	包含層	
207	58	50	土鍾			D-1	盛土	大型
208	66		土師器	小皿		D-2	土坑D-44	
209	66	51	土師器	小皿		D-2	土坑D-44	
210	66		土師器	椀		D-2	土坑D-44	瓦器椀?
211	66	51	瓦器	椀		D-2	土坑D-44	
212	66	51	土師器	小皿		D-2	土坑D-46	
213	66	51	瓦質土器	羽釜	口縁部	D-2	土坑D-46	
214	66		瓦質土器	羽釜	口縁部	D-2	土坑D-46	
215	66	51	土師器	羽釜	口縁部	D-2	土坑D-46	紀伊型
216	66	51	瓦質土器	播鉢	口縁部	D-2	土坑D-46	
217	66		瓦質土器	播鉢	口縁部	D-2	土坑D-46	
218	66		瓦質土器	甕	口縁部	D-2	土坑D-46	
219	66		瓦質土器	甕	口縁部	D-2	土坑D-46	
220	66		瓦質土器	甕	口縁部	D-2	土坑D-46	
221	66		瓦質土器	羽釜	口縁部	D-2	土坑D-46	
222	66		土師器	甕	口縁部	D-2	土坑D-46	
223	66		瓦質土器	甕	口縁部	D-2	土坑D-46	
224	66	51	瓦質土器	甕	口縁部	D-2	土坑D-46	
225	67	52	土師器	真蛸壺	口縁部	D-2	土坑D-46	
226	67	52	土師器	真蛸壺	上半部	D-2	ビットD-29	
227	67		瓦質土器	羽釜	口縁部	D-2	3層	D-46付近
228	67		土師器	甕	口縁部	D-2	3層	D-46付近
229	67	52	土鍾			D-2	攪乱	
230	67	52	土鍾			D-2	2層	
231	67	52	土鍾			D-2	2層	
232	67	52	土鍾			D-2	2層	
233	67	52	土鍾			D-2	2層	
234	67		土鍾			D-2	2層	
235	67	52	土鍾	板状土鍾		D-2	土坑D-44	有孔
236	67	52	土鍾			D-2	2層	大型
237	67	52	土鍾	有溝土鍾		D-2	盛土	大型
238	74		瓦器	椀		E	ビットE-89	
239	74		瓦器	椀		E	溝E-34	
240	74	52	白磁	鉢	口縁部	E	溝E-34	
241	74		瓦器	椀	口縁部	E	溝E-28	
242	74		土師器	真蛸壺	上半部	E	溝E-26	
243	74		瓦器	椀		E	溝E-77	
244	74		瓦器	椀	口縁部	E	溝E-77	
245	74		瓦器	椀		E	溝E-77	
246	87	53	瓦器	椀		F	溝F-76	
247	87		瓦器	椀		F	溝F-76	
248	87	53	瓦器	椀		F	溝F-76	
249	87	53	瓦器	椀		F	溝F-76	
250	87		瓦器	椀		F	溝F-76	
251	87	53	瓦器	椀		F	溝F-76	
252	87	53	瓦器	椀		F	溝F-76	
253	87	53	瓦器	椀		F	溝F-76	
254	87	53	瓦器	椀		F	溝F-76	
255	87	53	土師器	台付皿		F	溝F-76	

遺物一覧表(6)

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	器形	部位	地区	遺構	備考
256	87	54	瓦器	椀		F	土坑F-175	
257	87		瓦器	椀		F	土坑F-175	
258	87	54	瓦器	椀		F	土坑F-175	
259	87	54	瓦器	椀		F	土坑F-175	
260	87	54	瓦器	椀		F	土坑F-175	
261	87		瓦器	椀		F	土坑F-175	
262	87		瓦器	椀		F	土坑F-175	
263	87	54	瓦器	小皿		F	土坑F-175	
264	87	53	瓦器	椀		F	溝F-154	
265	87		瓦器	椀		F	溝F-154	
266	87	53	瓦器	椀		F	溝F-154	
267	87		瓦器	椀		F	溝F-154	
268	87	55	土錘			F	側溝	
269	87	55	土錘			F	精査時	
270	87	55	土錘			F	精査時	
271	87	55	土錘			F	側溝	
272	87	55	土錘			F	5層	
273	87	55	土錘			F	5層	
274	87	55	土錘			F	4層上面	
275	87	55	土錘			F	側溝	
276	87	55	土錘			F	5層	
277	87	55	土錘			F	4層上面	
278	87	55	土錘			F	5層	
279	87	55	土錘			F	4層上面	
280	90	56	瓦質土器	甕	口縁部	若宮	井戸1	
281	90		瓦質土器	甕	口縁部	若宮	井戸1	
282	90	56	瓦質土器	甕	口縁部	若宮	井戸1	
283	90		瓦質土器	甕	口縁部	若宮	井戸1	
284	90	56	瓦質土器	甕	口縁部	若宮	井戸1	
285	90		瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
286	90	56	瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
287	90		瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
288	90		瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
289	90	56	瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
290	90		瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
291	90	56	瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
292	90		瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
293	90	56	瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
294	90	56	瓦質土器	播鉢	口縁部	若宮	井戸1	
295	90	56	瓦質土器	播鉢	口縁部	若宮	井戸1	
296	90	56	灰釉陶器	椀	底部	若宮	井戸1	
297	90	56	軒平瓦	瓦当部		若宮	井戸1	
298	91		瓦器	椀	口縁部	若宮	井戸1	
299	91	56	灰釉陶器	椀	底部	若宮	井戸1	
300	91	56	灰釉陶器	椀	底部	若宮	井戸1	
301	91	56	須恵器	播鉢	底部	若宮	井戸1	東播系
302	91		瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
303	91	56	瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
304	91	56	瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	井戸1	
305	91	56	瓦質土器	甕	口縁部	若宮	井戸1	
306	91	56	瓦質土器	甕	口縁部	若宮	井戸1	

遺物一覧表(7)

遺物番号	挿図番号	図版番号	種類	器形	部位	地区	遺構	備考
307	91		平瓦			若宮	井戸1	格子状タタキ目が残る
308	91		備前焼	播鉢	口縁部	若宮	土坑3	
309	91		灰釉陶器	椀	底部	若宮	土坑3	
310	91		瓦質土器	羽釜	口縁部	若宮	中世包含層	
311	91		土師器	蛸壺	上半部	若宮	中世包含層	
312	91		土師器	蛸壺	体部	若宮	中世包含層	
313		42	土錘			A	包含層	
314		42	石庖丁			A	側溝	
315		42	サヌカイト	剥片		A	4層上面	
316		42	サヌカイト	剥片		A	礫層	
317		44	弥生土器	壺		C	3層	
318		45	緑色片岩	たたき石		B	溝B-38	
319		47	志野長石釉	盤		C	盛土	
320		47	波佐見窯系	色絵一輪挿し		C	盛土	上絵付
321		47	波佐見窯系	陶胎染付碗		C	盛土	
322		47	泥めんこ			C	溝C-7	
323		47	泥めんこ			C	溝C-1	釉付着
324		49	砥石			D-1	礫群	
325		49	石臼			D-1	盛土下砂層	
326		50	土師器	真蛸壺	底部	D-1	礫群	
327		51	サヌカイト	剥片		D-2	2層	
328		51	砥石			D-2	ビットD-26	
329		52	土師器	鉢		E	溝E-51	
330		52	結晶片岩	石棒		E	溝E-77	
331		52	青磁	碗		E	3層	中国製
332		52	青磁	碗		E	2層	中国製
333		52	砥石?			E	3層	
334		54	土師器	羽釜	口縁部	F	溝F-154	
335		54	土師器	皿		F	土坑F-80	
336		54	瓦器	椀		F	土坑F-74	
337		54	瓦器	小皿		F	土坑F-80	
338		54	瓦器	椀		F	土坑F-80	
339		54	瓦器	椀	高台部	F	土坑F-80	
340		54	瓦質土器	鉢	口縁部	F	土坑F-80	
341		55	白磁	碗		F	土坑F-77	中国製
342		55	瓦器	小皿		F	土坑F-77	
343		55	瓦器	小皿		F	土坑F-77	
344		55	瓦質土器	鉢		F	土坑F-77	
345		55	土師器	真蛸壺		F	F-175	
346		55	結晶片岩	石棒?		D-2	土坑D-44	裏
347		55	土師器	小皿		F	5層	
348		55	チャート	石器		F	5層	赤チャート
349		55	サヌカイト	刃器		F	5層	
350		55	サヌカイト	石器		F	5層	
351		56	砥石			若宮	井戸1	
352		56	磁器	碗		若宮	井戸1	

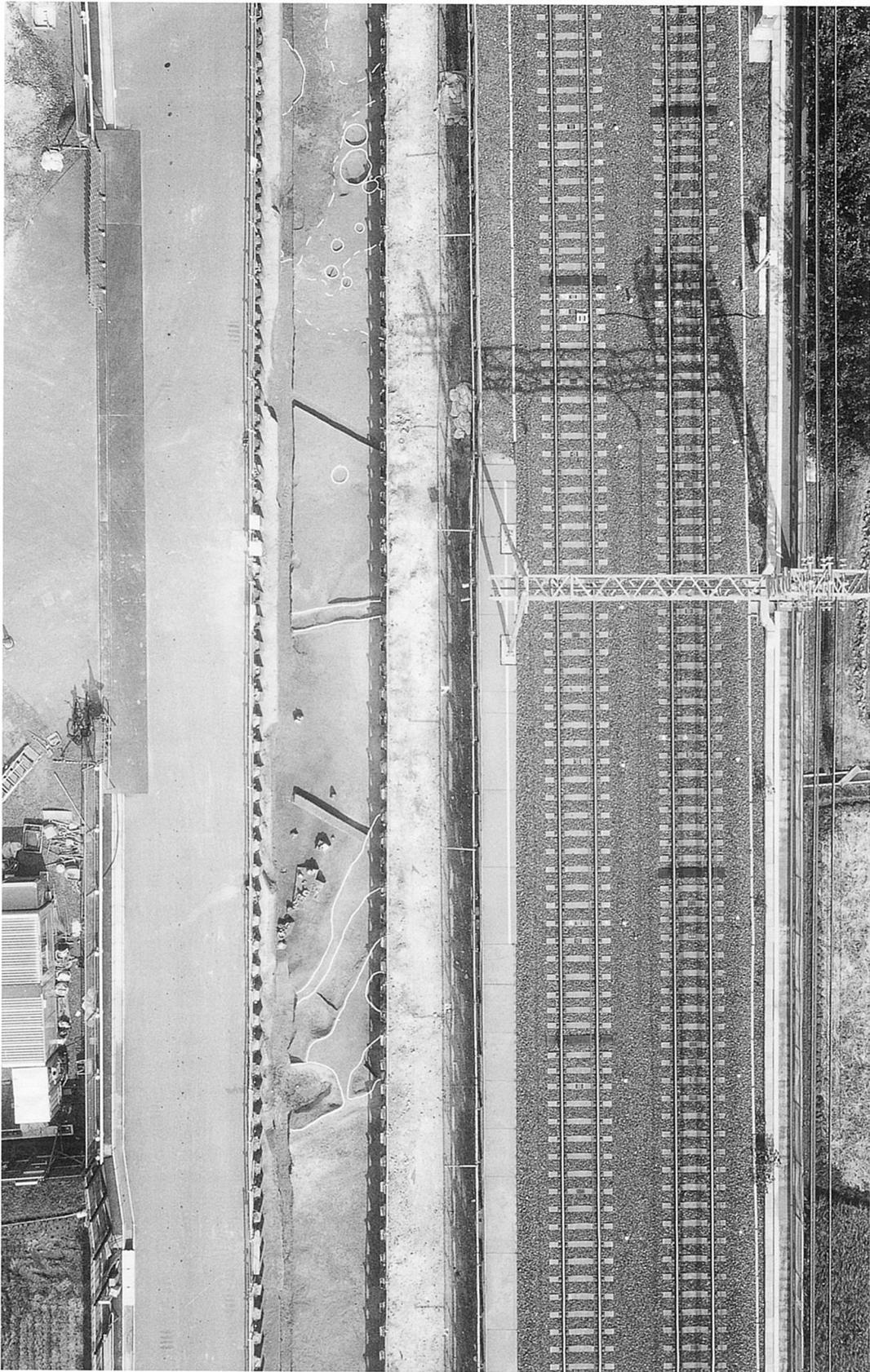
参考文献

発掘調査報告のみあげることとする。

- 『泉佐野市所在遺跡発掘調査概要Ⅰ - 湊遺跡・三軒屋遺跡・船岡山B地点遺跡-』 1981 泉佐野市教育委員会
- 『昭和56年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ』 1982 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡発掘調査報告書 - 泉佐野熊取線建設工事に伴う発掘調査-』 1982 泉佐野市教育委員会
- 『昭和57年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要・Ⅲ』 1983 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡発掘調査報告書 - 81-5区の調査-』 1983 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要・Ⅳ 昭和58年度』 1984 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡調査報告書 - 市立日新小学校増改築（5期）工事に伴う発掘調査-』 1984 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡 - 84-2区の調査-』 1984 泉佐野市教育委員会
- 『昭和59年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘概要・Ⅴ』 1985 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡Ⅳ - 84-6・85-1区の調査-』 1985 泉佐野市教育委員会
- 『昭和60年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』 1986 泉佐野市教育委員会
- 『昭和61年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅶ』 1987 泉佐野市教育委員会
- 『若宮遺跡発掘調査報告書 - 87-1区の調査-』 1987 泉佐野市教育委員会
- 『昭和62年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅷ』 1988 泉佐野市教育委員会
- 『昭和63年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅸ』 1989 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡 - 89-2区調査の報告-』 1989 泉佐野市教育委員会
- 『平成元年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅹ』 1990 泉佐野市教育委員会
- 『若宮遺跡Ⅱ - 89-1区の調査-』 1990 泉佐野市教育委員会
- 『若宮遺跡 89-2区の調査 89-4区の調査 89-6区の調査』 1990 泉佐野市教育委員会
- 『平成2年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』 1991 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 第3号』 1991 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成3年度』 1992 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財調査概報 第4号』 1992 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡 - 90-5区・91-3区の調査-』 1992 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡 - 90-6区の調査-』 1992 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡 - 92-1区の調査-』 1992 泉佐野市教育委員会
- 『若宮遺跡 - 91-11区の調査-』 1992 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野都市計画道路事業、関西国際空港連絡鉄道・南海分岐線事業、南海本線（泉佐野）連続立体交差事業に伴う中開遺跡他発掘調査並びに試掘調査 1991年度終了報告』 1992 （財）大阪府埋蔵文化財協会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成4年度』 1993 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 第13号』 1993 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 第16号』 1993 泉佐野市教育委員会

- 『湊遺跡 -90-4区の調査-』 1993 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成5年度』 1994 泉佐野市教育委員会
- 『中開遺跡Ⅲ・上町東遺跡 南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書』 1994
（財）大阪府埋蔵文化財協会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成6年度』 1995 泉佐野市教育委員会
- 『上町東遺跡 -94-3区の調査-』 1995 泉佐野市教育委員会
- 『南海連続立体交差事業に伴う 上町東遺跡発掘調査事業報告 平成7年度』 1996 泉佐野市教育委員会
- 『若宮遺跡 -96-4区の調査-』 1997 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 第30号』 1997 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成9年度』 1998 泉佐野市教育委員会
- 『湊遺跡 -96-6区の調査-』 1998 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成10年度』 1999 泉佐野市教育委員会
- 『上町東遺跡 -97-3区の調査-』 1999 泉佐野市教育委員会
- 『上町東遺跡 -98-1区の調査-』 1999 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成11年度』 2000 泉佐野市教育委員会
- 『若宮・上町東遺跡 -南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査-』 2001 泉佐野市教育委員会

写 真 图 版



1 最終掘削面（航空写真）

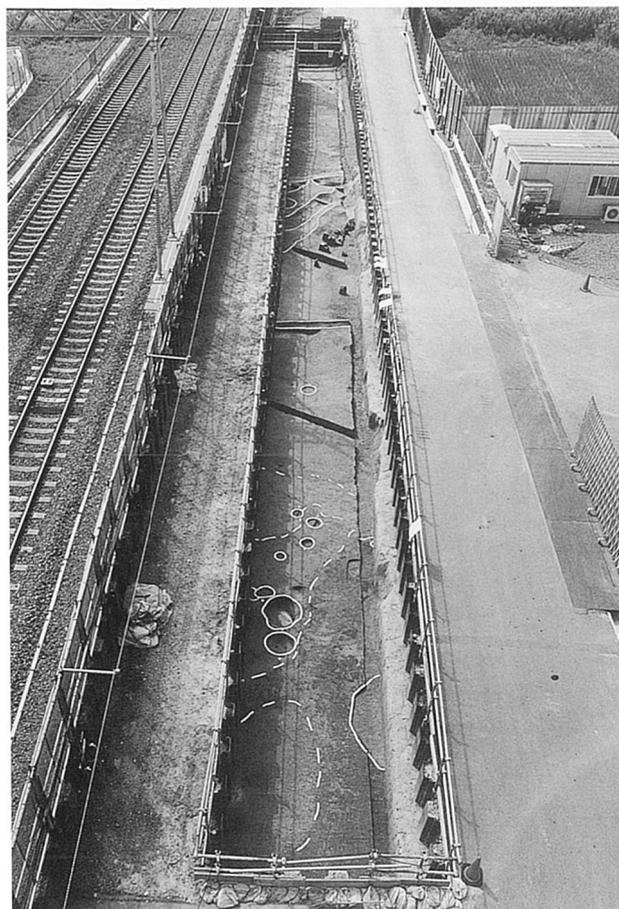
図版2 A地区(湊遺跡)遺構



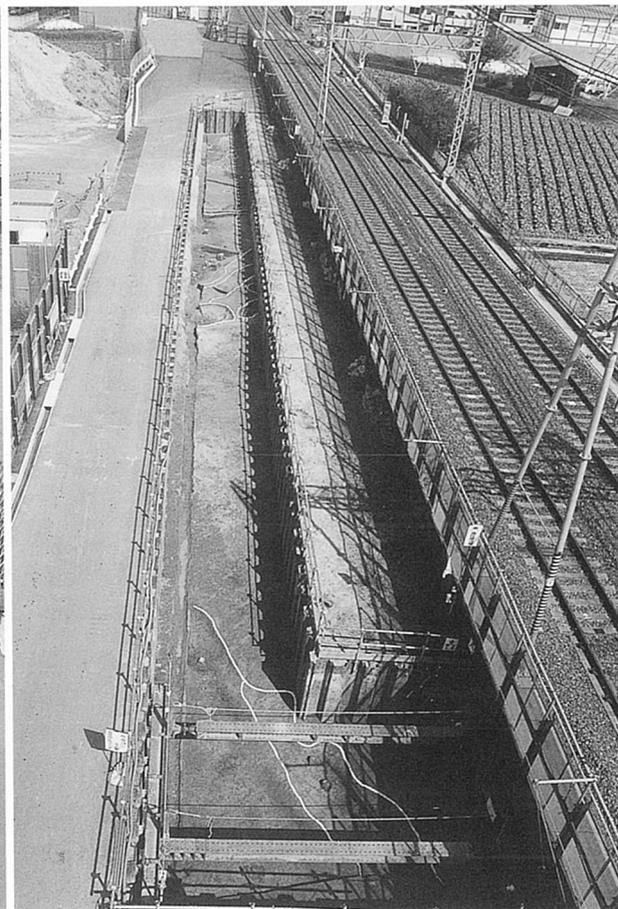
1 最終面北半部(難波側から)



2 第4面中央部(和歌山側から)



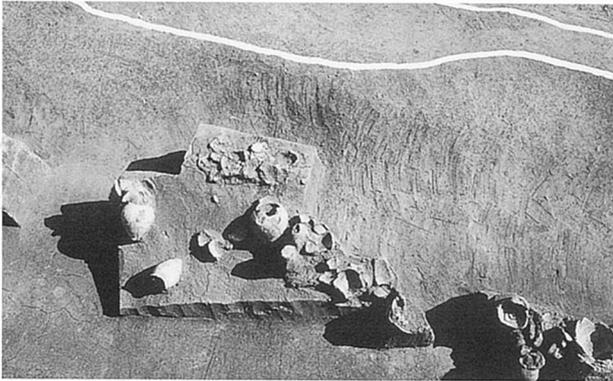
3 第4面全景(難波側から)



4 第4面全景(和歌山側から)



1 溝A-13 全景(北から)



2 溝A-13土器群 全景(海側から)



3 溝A-13土器群 細部1



4 溝A-13 断面

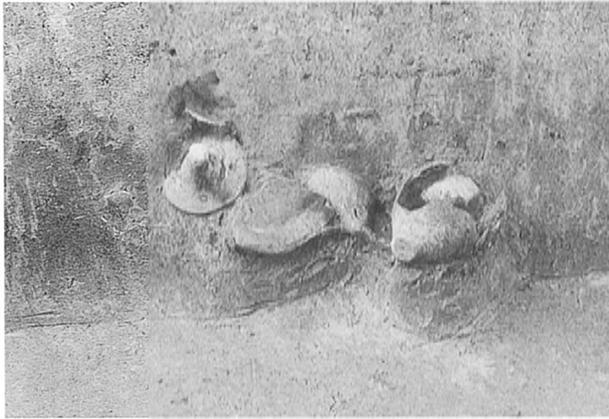
図版4 A地区(湊遺跡)遺構



1 溝A-13土器群 細部2



2 溝A-13土器群 細部3



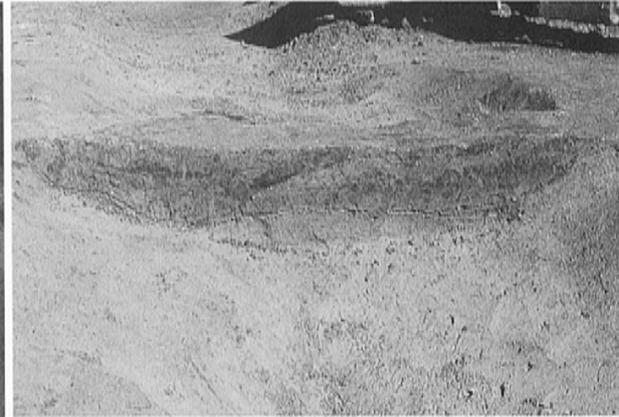
3 溝A-13土器群 細部4



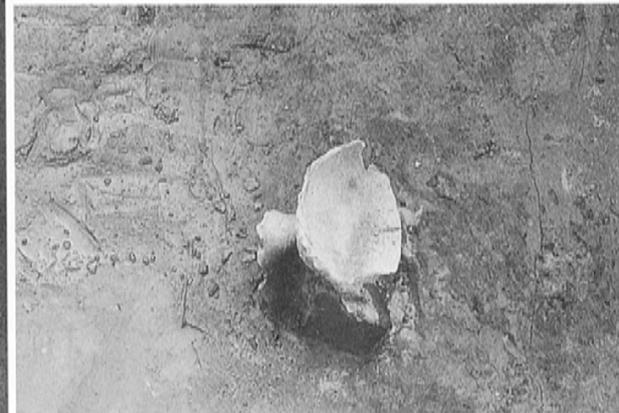
4 溝A-13土器群 細部5



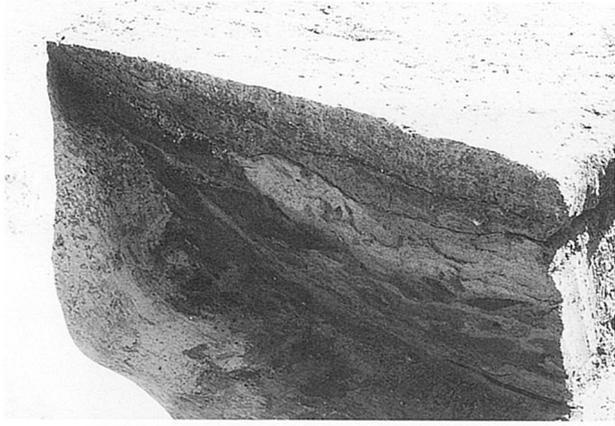
5 溝A-13土器群 細部6



6 溝A-12 断面



7 溝A-23 土器出土状況



1 土坑A-9 断面



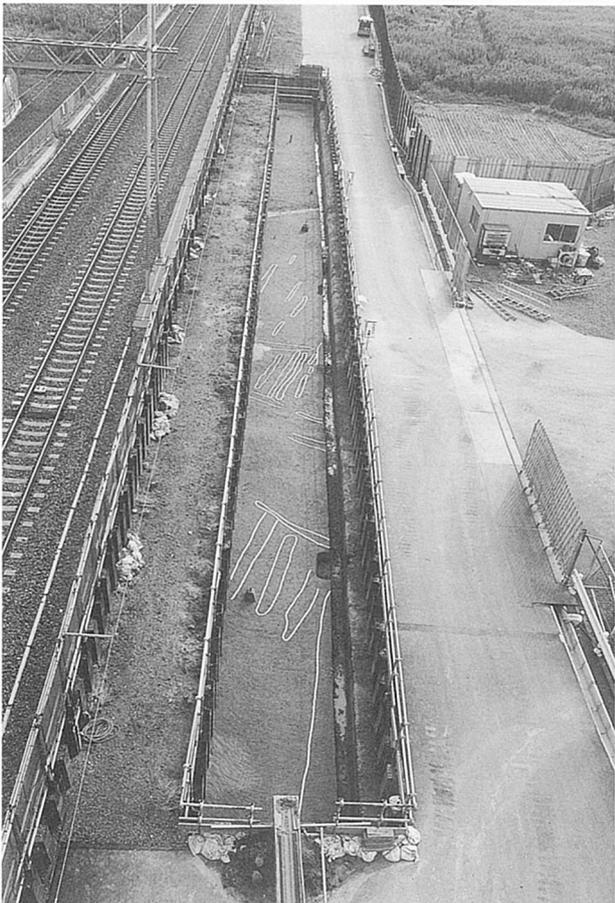
2 溝A-21 断面



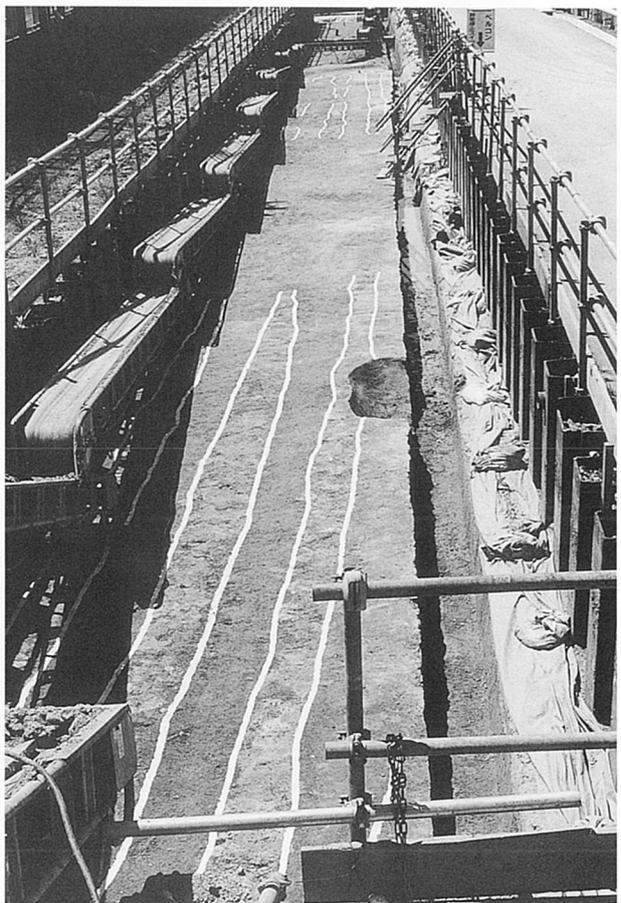
3 溝A-15 断面



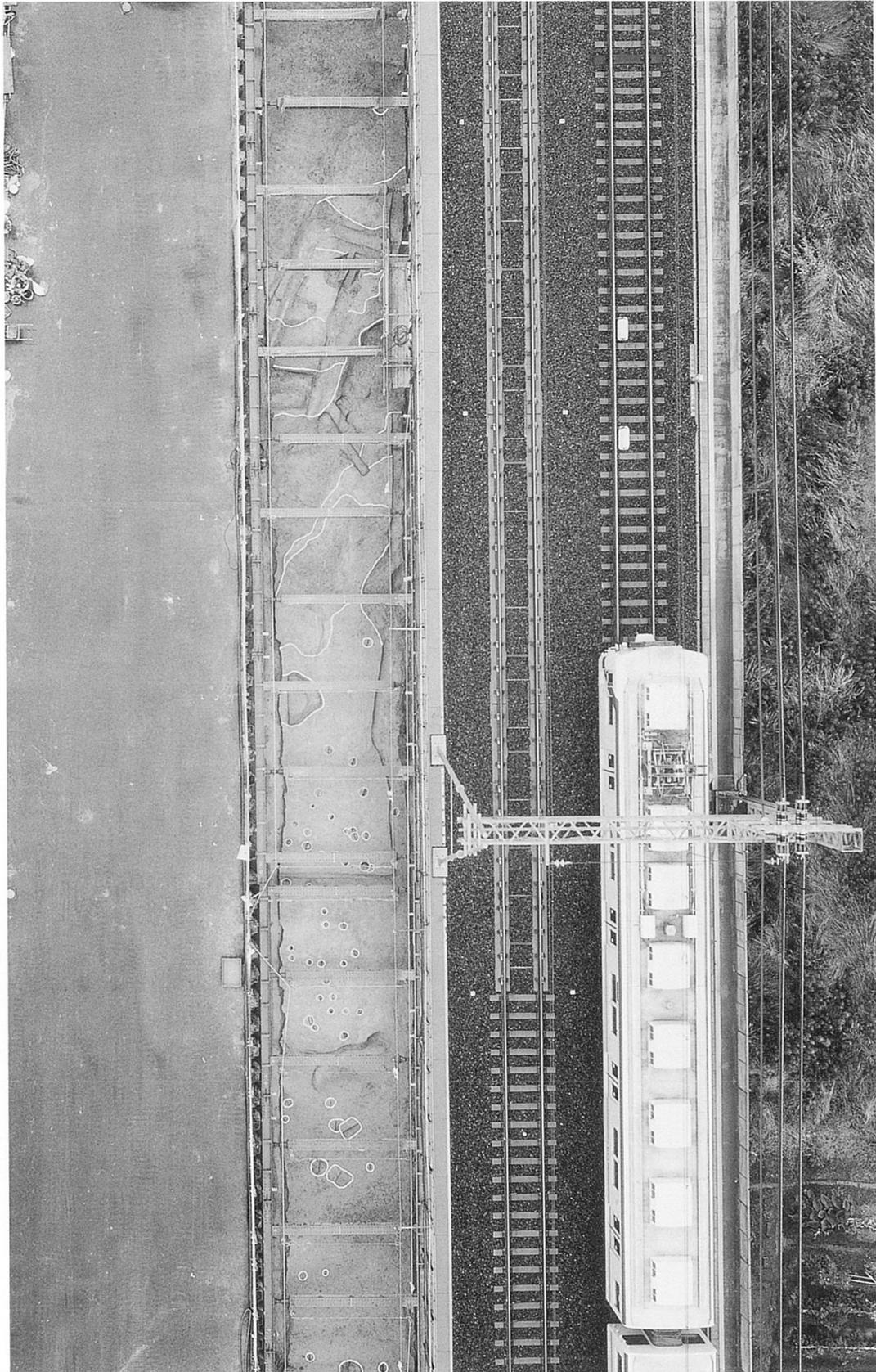
4 壁断面



5 第3面全景（難波側から）



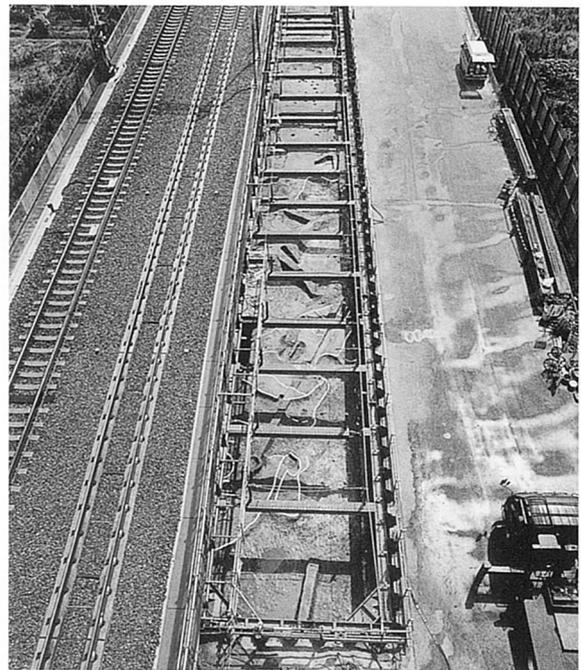
6 第2面全景（難波側から）



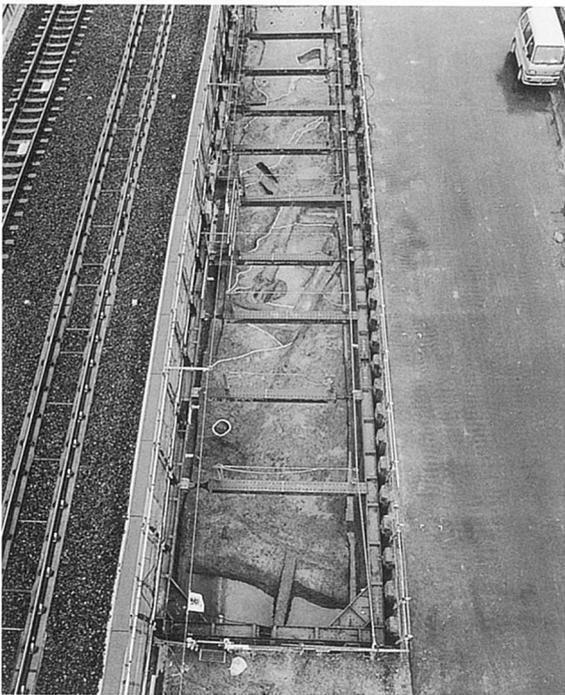
1 第8面(航空写真)



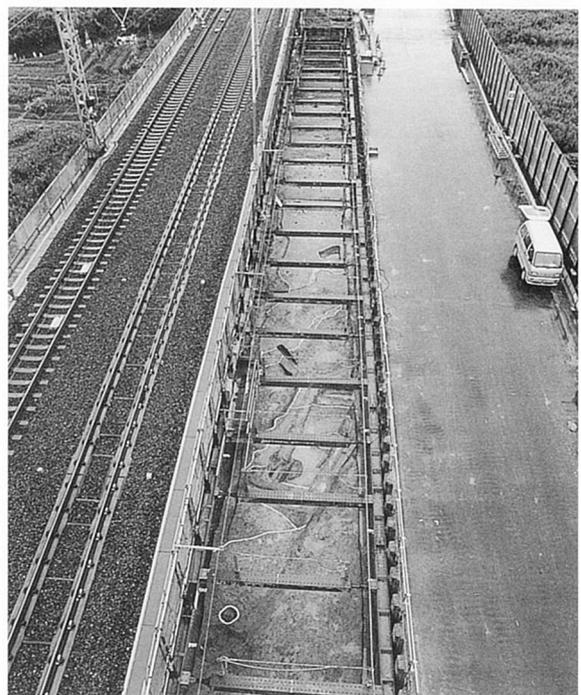
1 最終掘削面全景(難波側から)



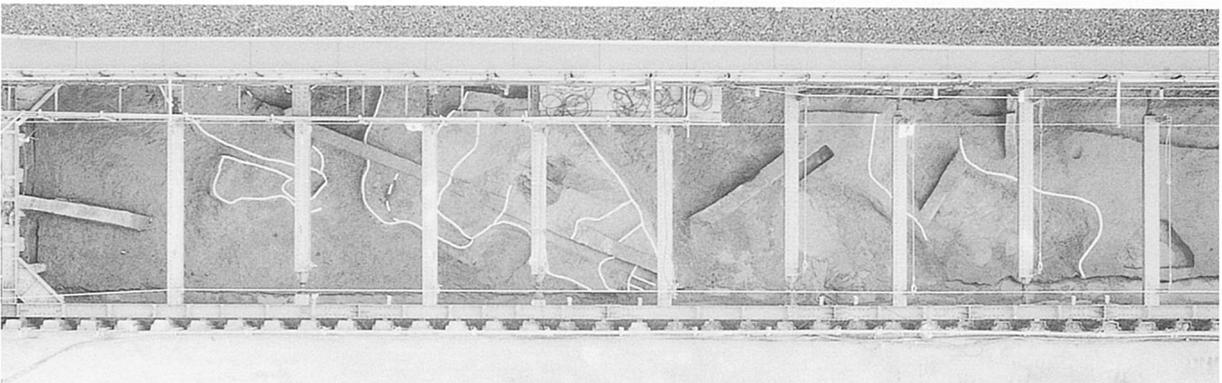
2 第8-b面全景(難波側から)



3 第8面北半部(難波側から)



4 第8面全景(難波側から)

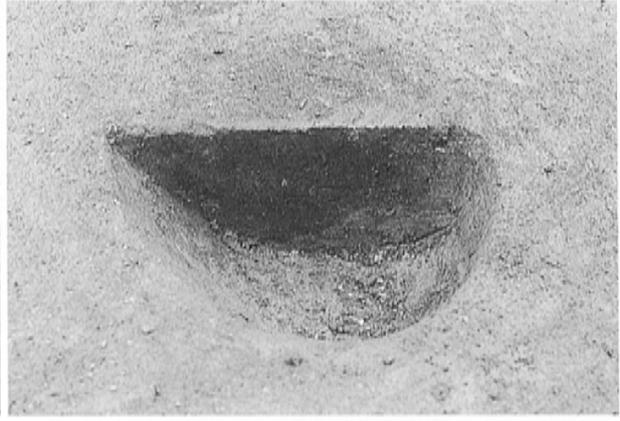


5 第8-b面(航空写真)

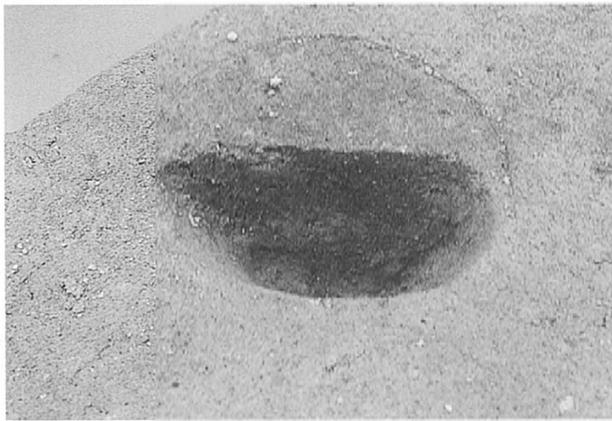
図版8 B地区(湊遺跡)遺構



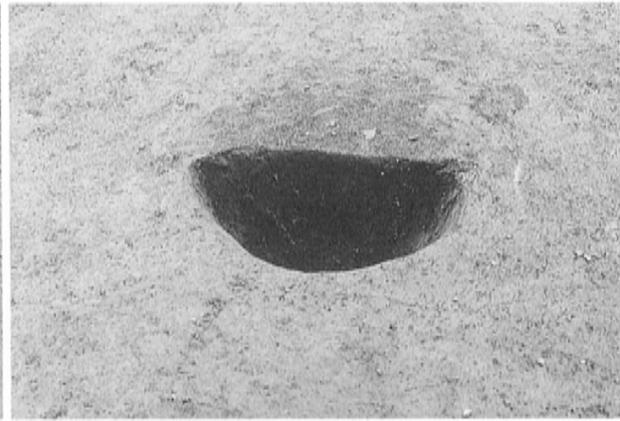
1 ピットB-11 断面



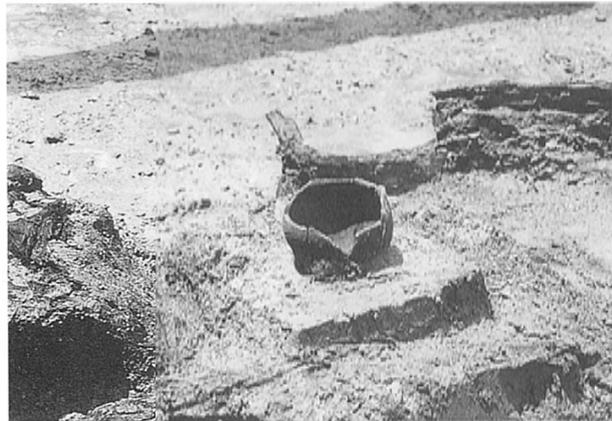
2 ピットB-14 断面



3 ピットB-21 断面



4 ピットB-48 断面



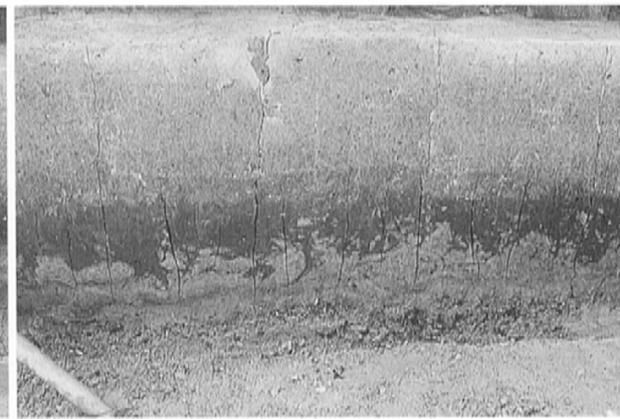
5 溝B-83 土器出土状況



6 溝B-83 製塩土器出土状況



7 壁断面 南部



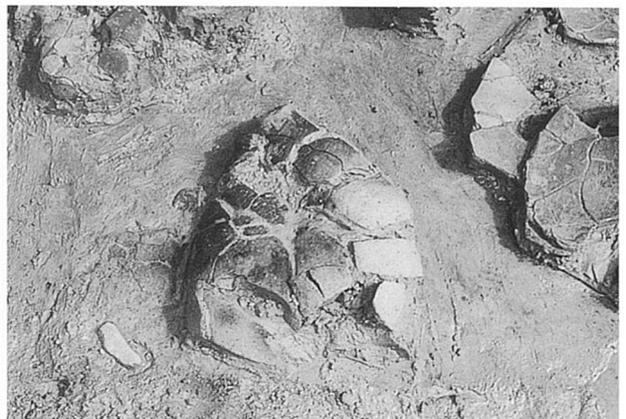
8 壁断面 南部(砂層攪拌状況)



1 土器群1 全景1



2 土器群1 全景2



3 土器群1 細部1



4 土器群1 細部2

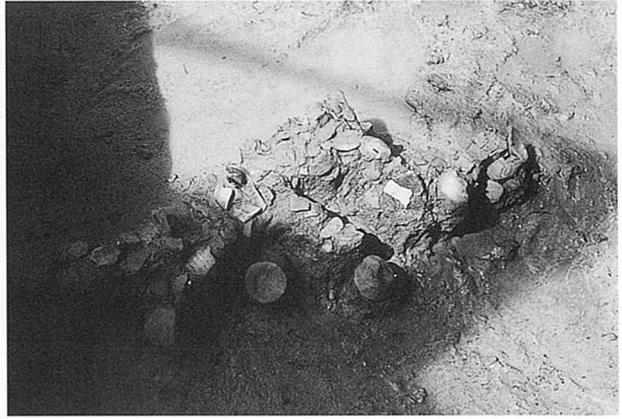


5 土器群2

図版10 B地区（湊遺跡）遺構



1 土器群3付近土層断面



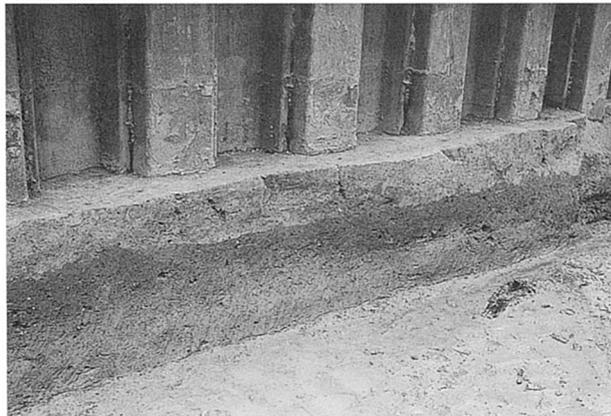
2 土器群4



3 土器群3



4 土器群6



5 壁断面



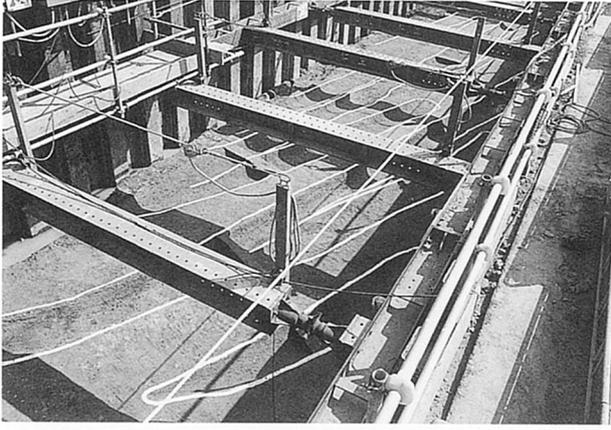
6 流路群土層断面1（海側から）



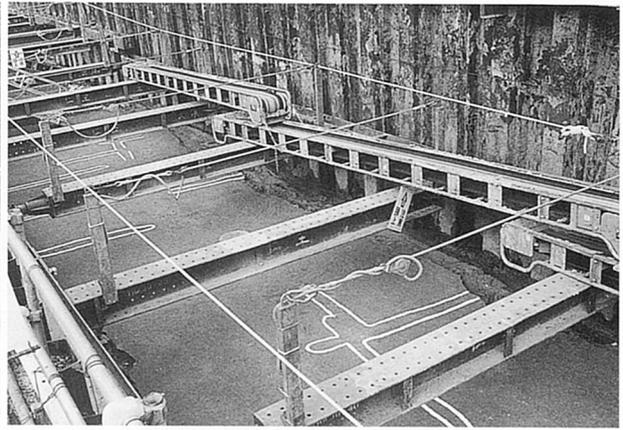
7 溝B-86 断面



8 溝B-1 断面



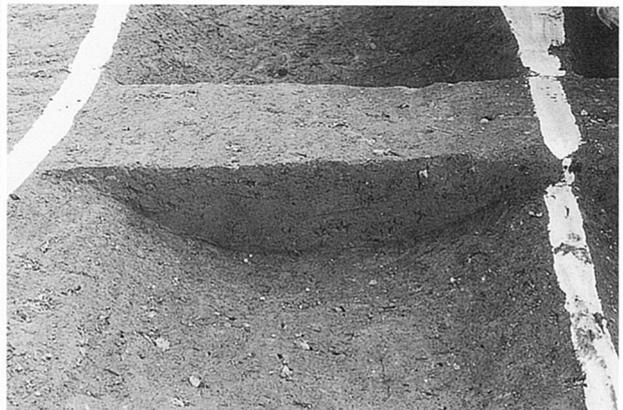
1 第6面北部（難波側から）



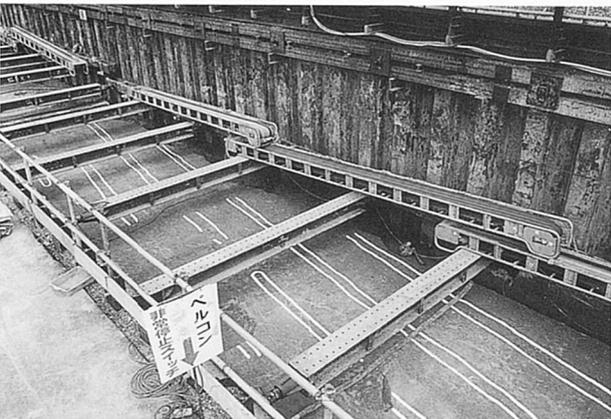
2 第6面南部（和歌山側から）



3 溝B-7・8 断面



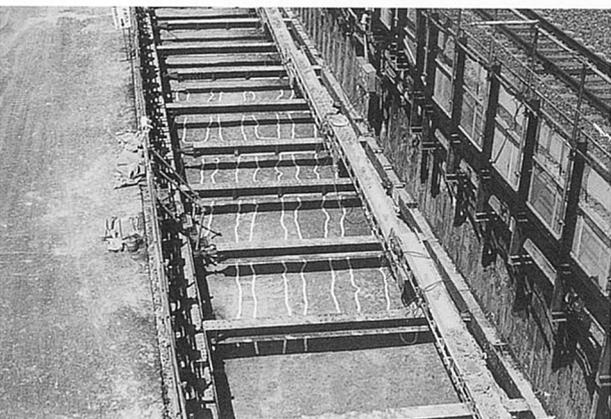
4 溝B-4 断面



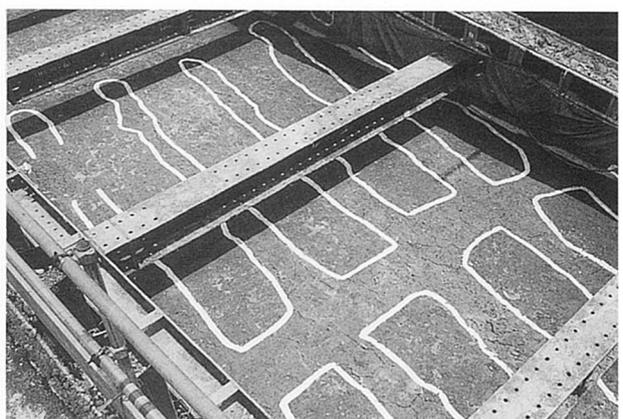
5 第3面南半部



6 第3面 畝溝検出状況

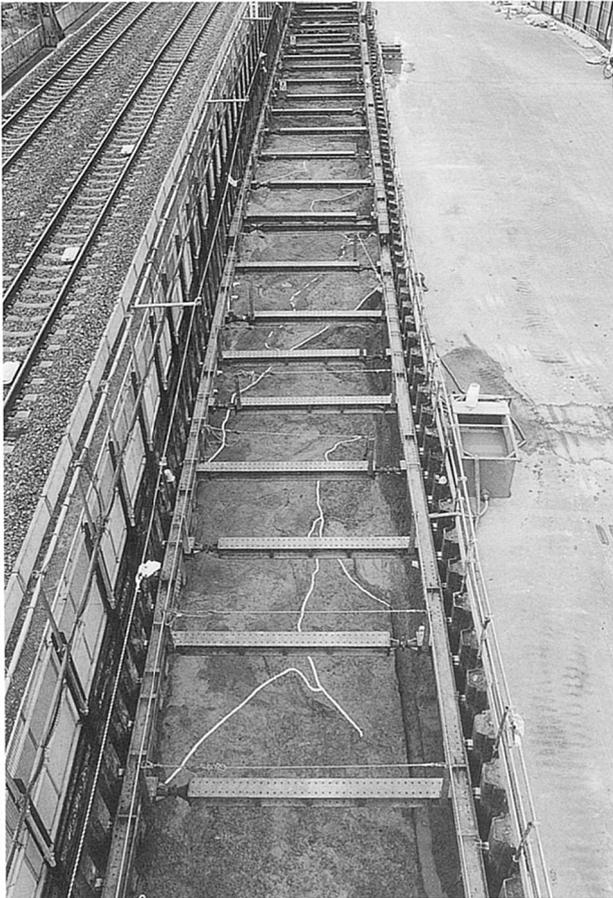


7 第2面中央部（和歌山側から）

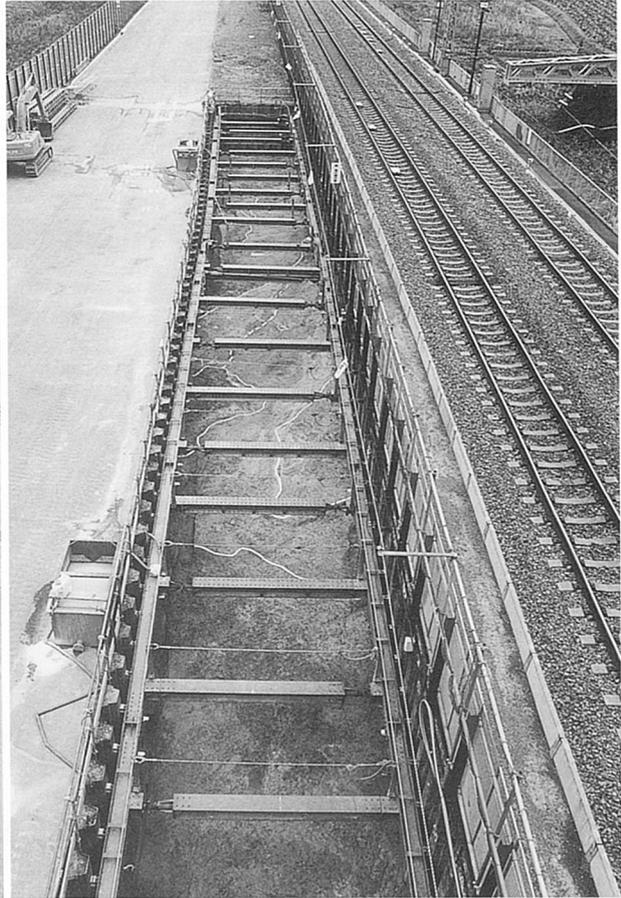


8 第2面 畝溝検出状況

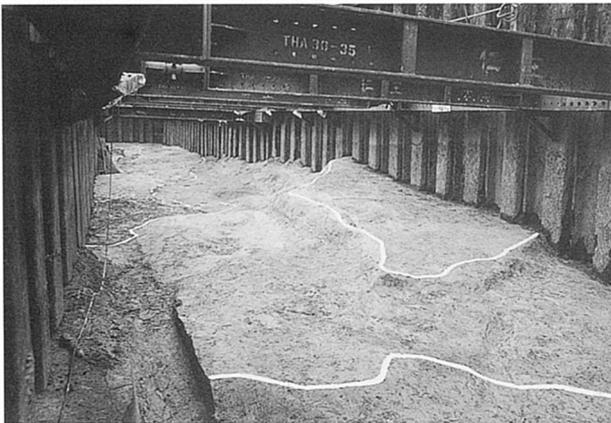
図版12 C地区（湊遺跡）遺構



1 最終掘削面全景（難波側から）



2 最終掘削面全景（和歌山側から）



3 最終掘削面中央部（和歌山側から）



4 最終掘削面中央部（難波側から）



5 地滑り痕全景（難波側から）



1 地滑り痕全景（海側から）



2 地滑り痕土層断面1（難波側から）



3 地滑り痕土層断面2（和歌山側から）



4 地滑り痕検出状況1



5 地滑り痕検出状況2

図版14 C地区(湊遺跡)遺構



1 溝C-9断面



2 壁断面



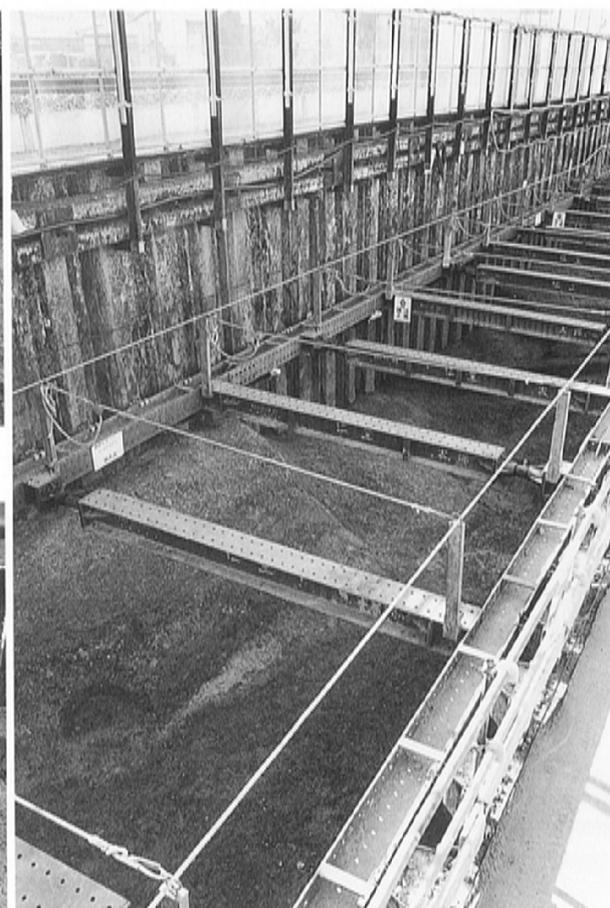
3 調査区横断面1 (難波側から)



4 調査区横断面2 [溝C-7付近](難波側から)



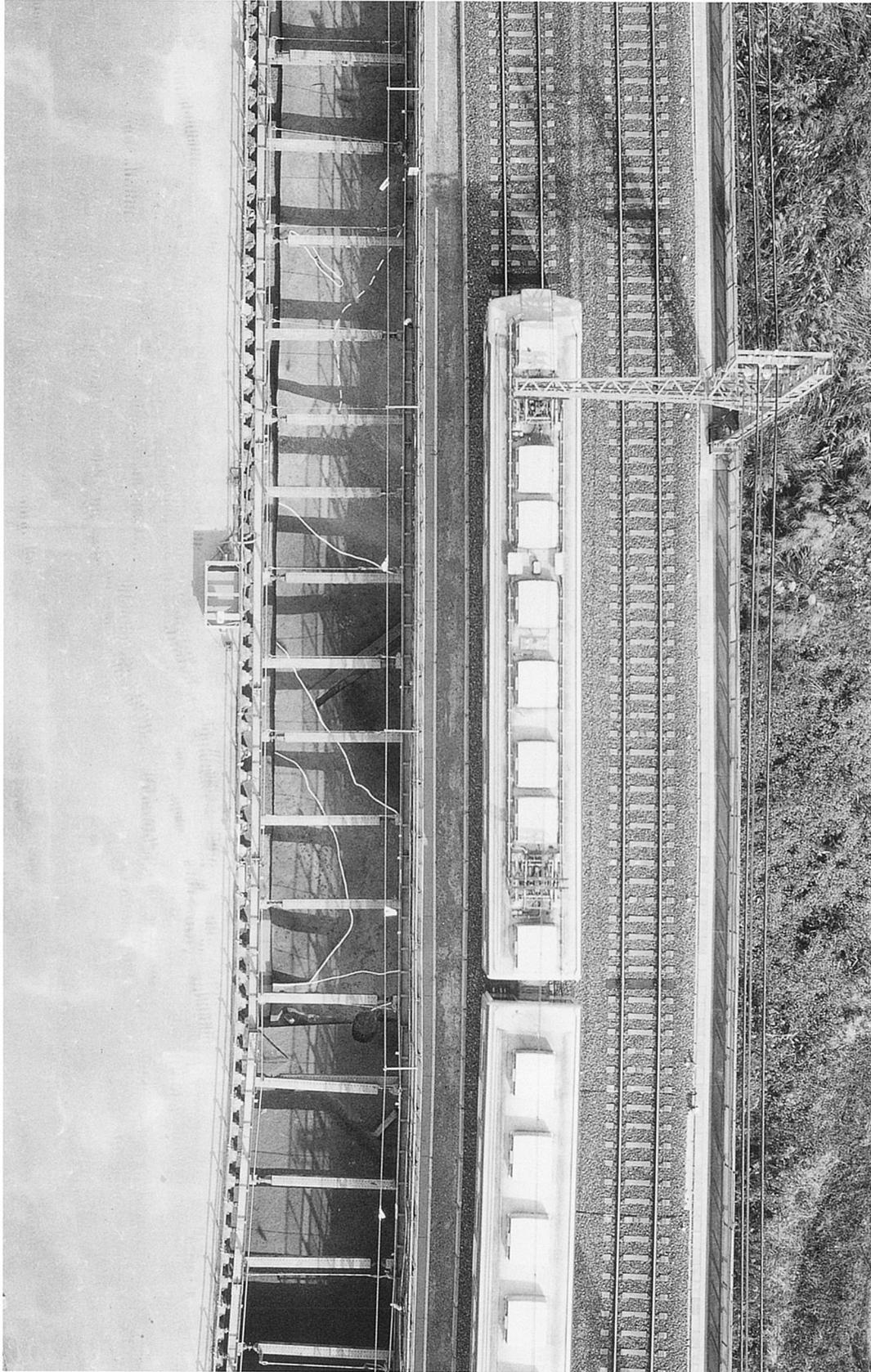
5 第5面中央部 (和歌山側から)



7 第5面全景 (難波側から)



6 第5面南半部 (難波側から)



1 第4面（航空写真）

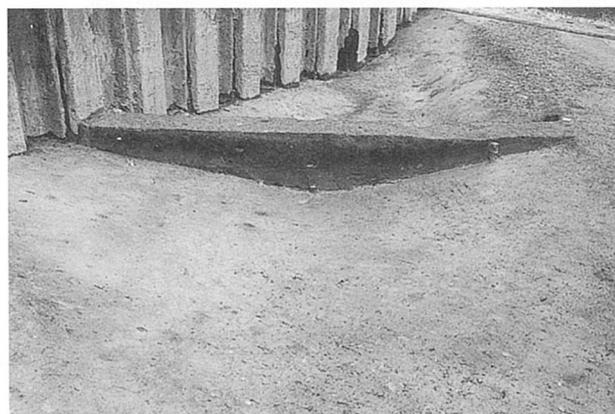
図版16 C地区（湊遺跡）遺構



1 溝C-9 土器出土状況1



2 溝C-9 土器出土状況2



3 溝C-9 完掘状況



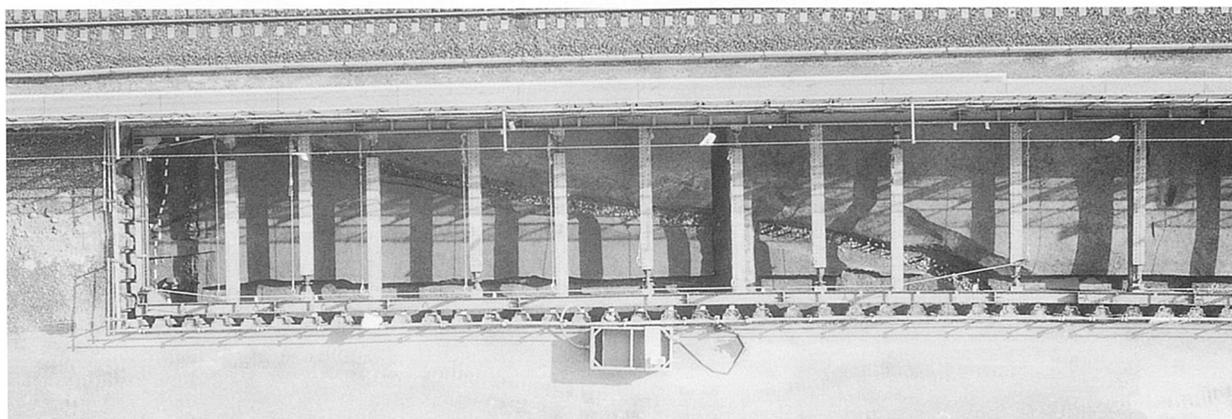
4 土坑C-12 断面



5 溝C-8 断面



6 溝C-8 木製品出土状況



7 溝C-7 全景



1 溝C-7 北部



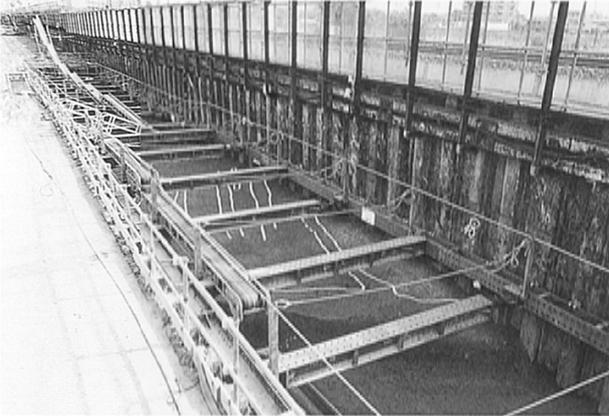
2 溝C-7 南部



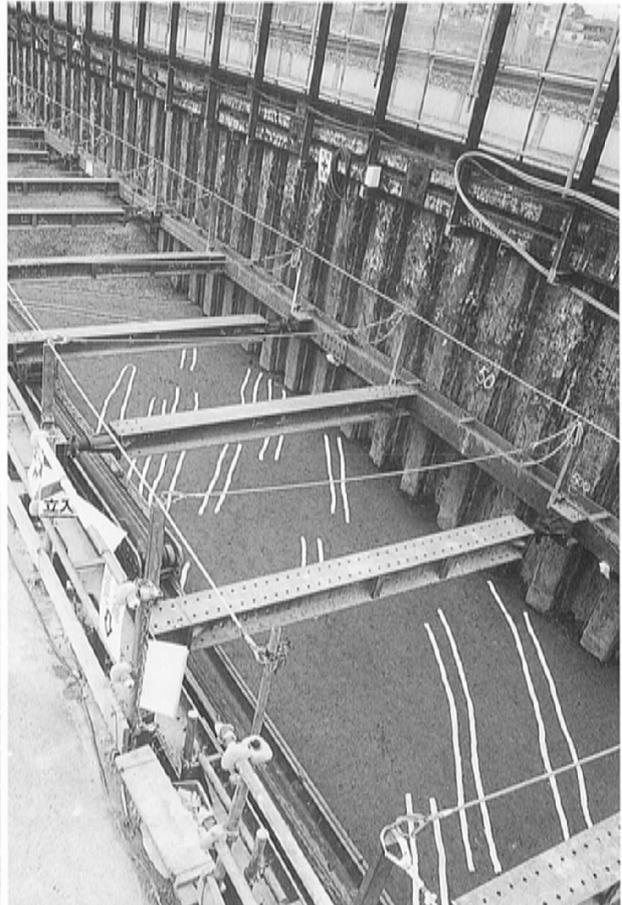
3 溝C-7 中央部



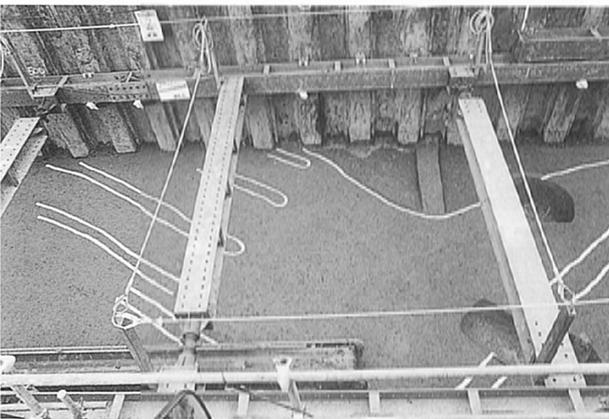
4 溝C-7 石敷表面



5 第3面全景（和歌山側から）

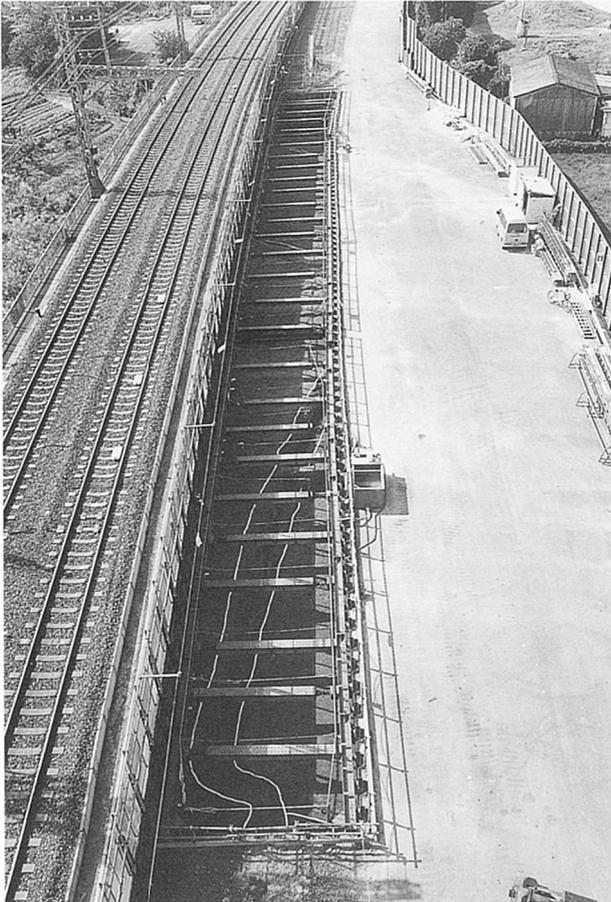


7 第3面 鋤溝群

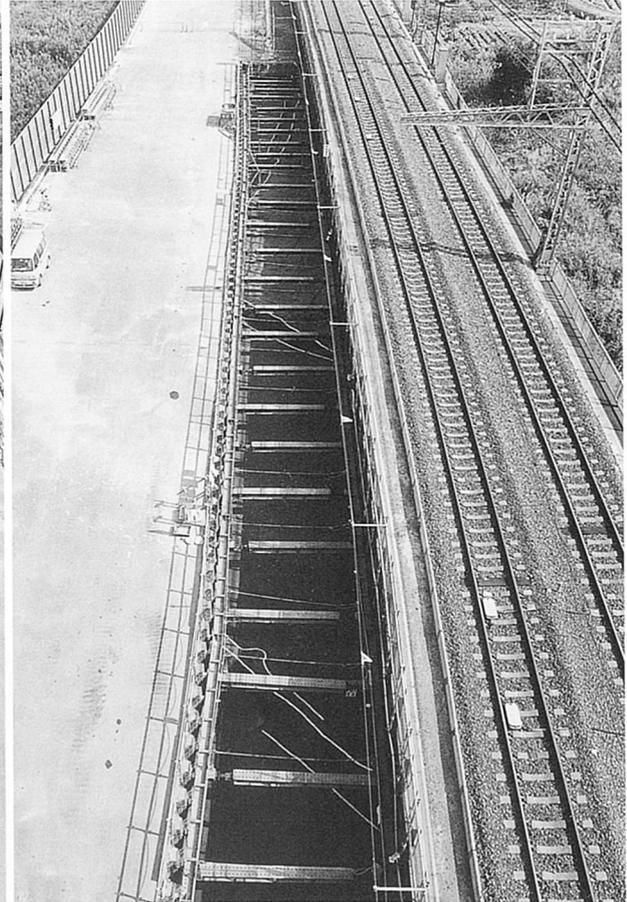


6 第3面南部

図版18 C地区（湊遺跡）遺構



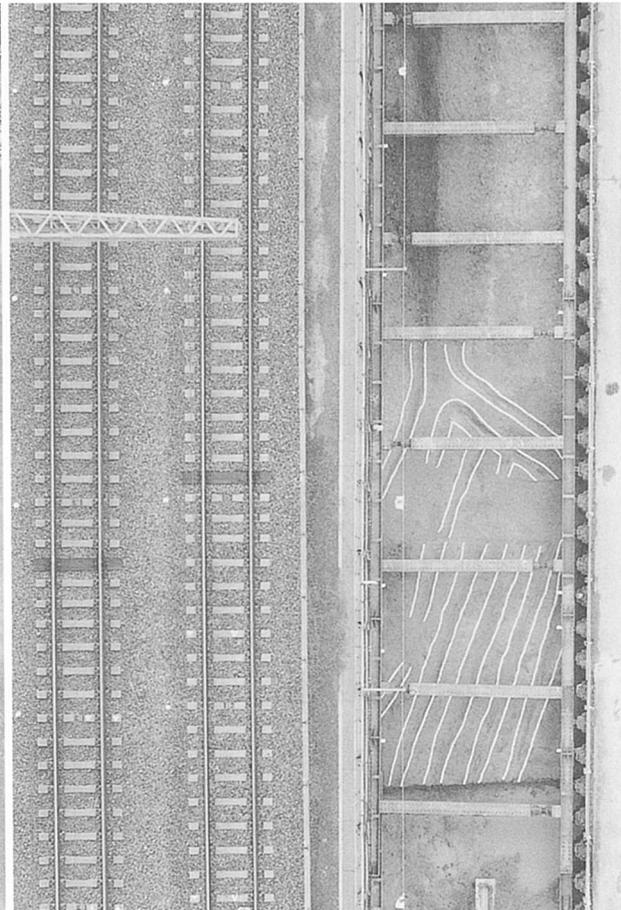
1 第2面全景（難波側から）



2 第2面全景（和歌山側から）



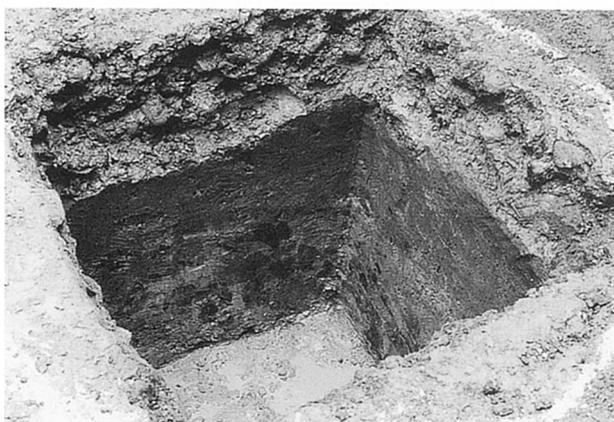
3 盛土層上面（難波側から）



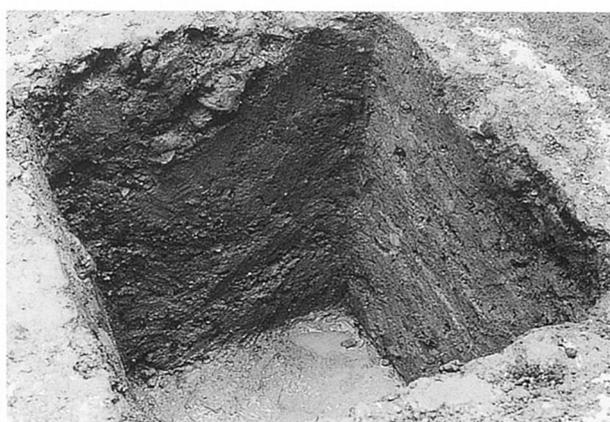
4 盛土層上面（航空写真）



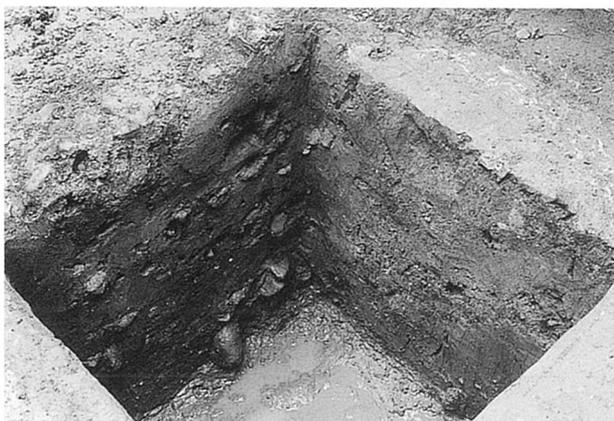
1 最終掘削面西半部(航空写真)



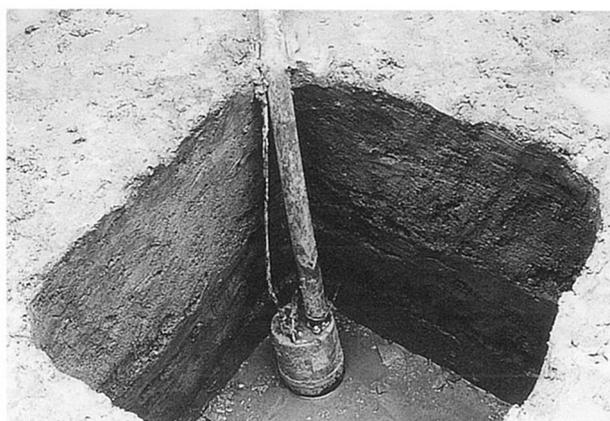
2 トレンチ3土層断面



3 トレンチ4土層断面



4 トレンチ5土層断面

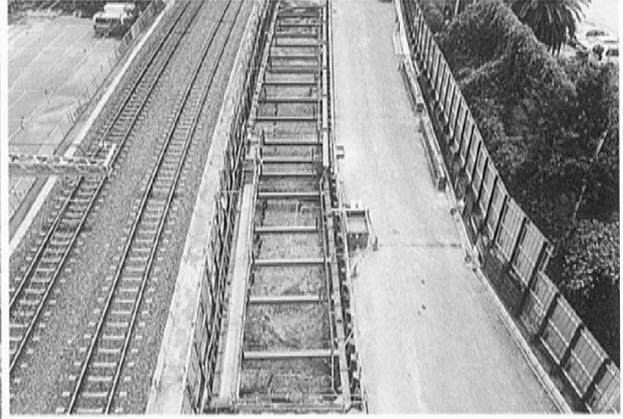


5 トレンチ6土層断面

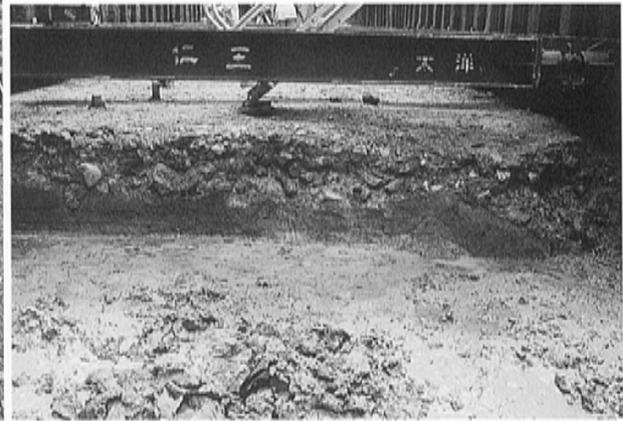
図版20 D-1地区(上町東遺跡)遺構



1 第3面相当面全景(和歌山側から)



2 第3面相当面全景(難波側から)



3 調査区横断面(難波側から)



4 礫群全景



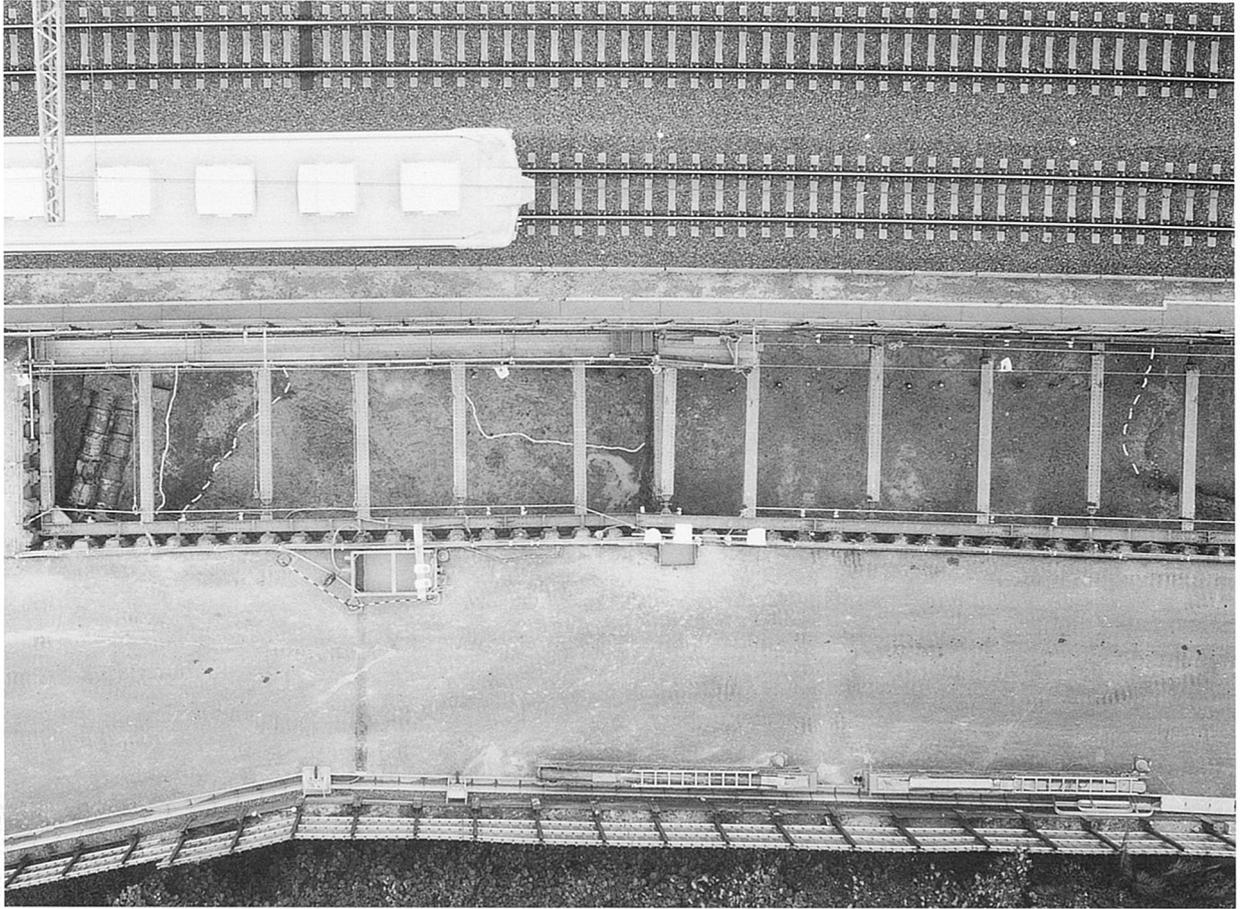
5 礫群検出状況



6 第2面西部



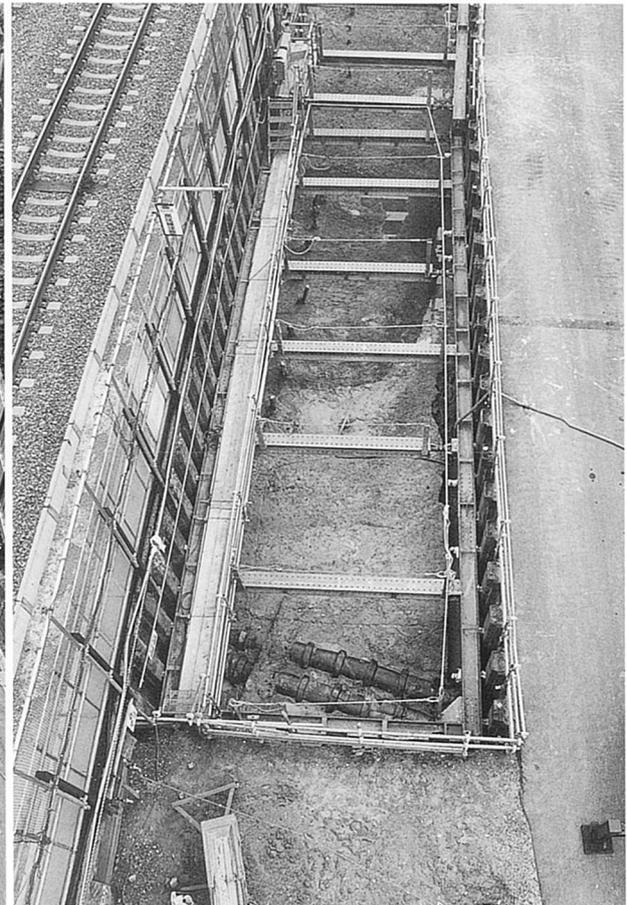
7 盛土層下 土管検出状況(海側から)



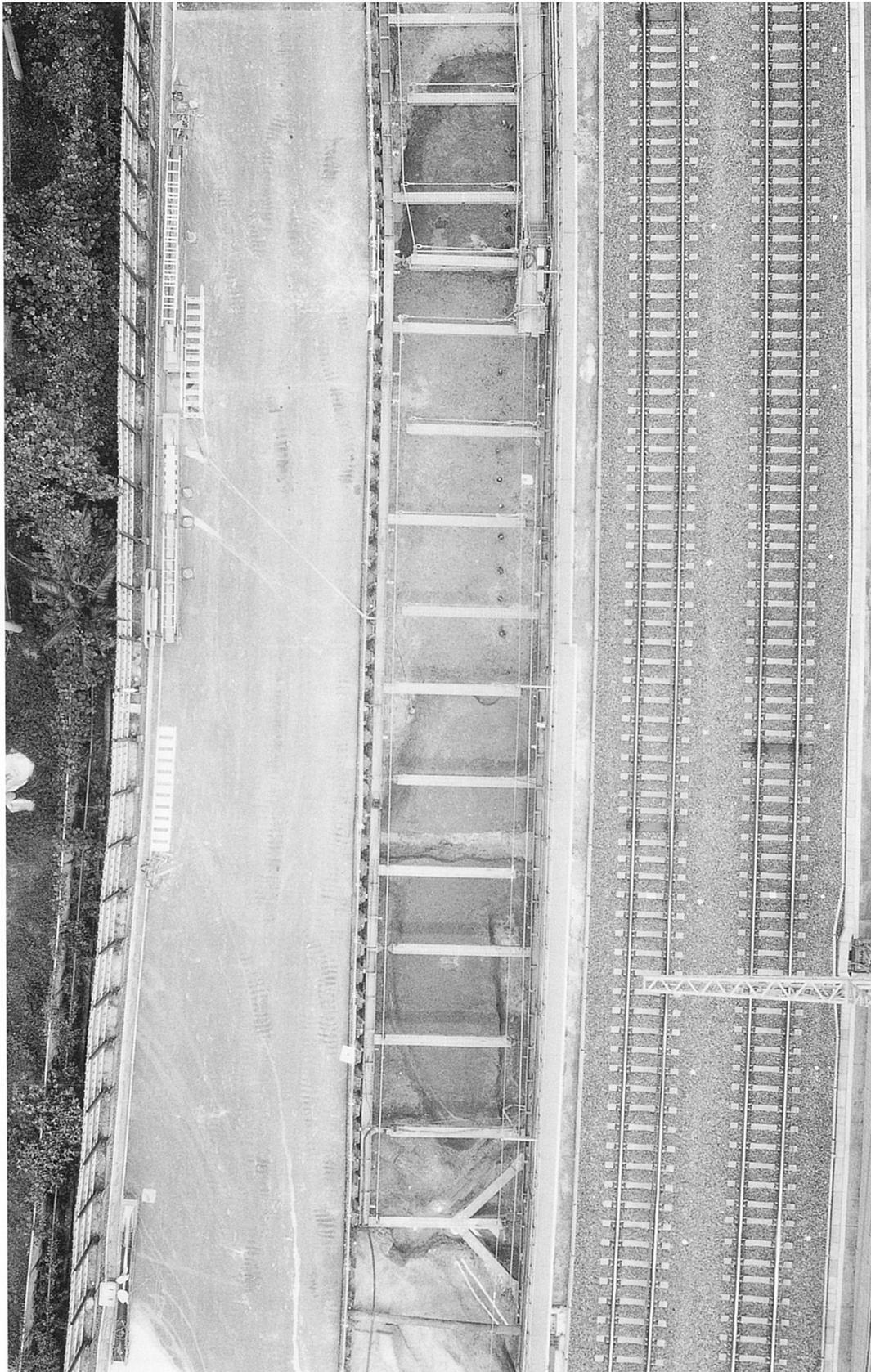
1 最終掘削面東半部（航空写真）



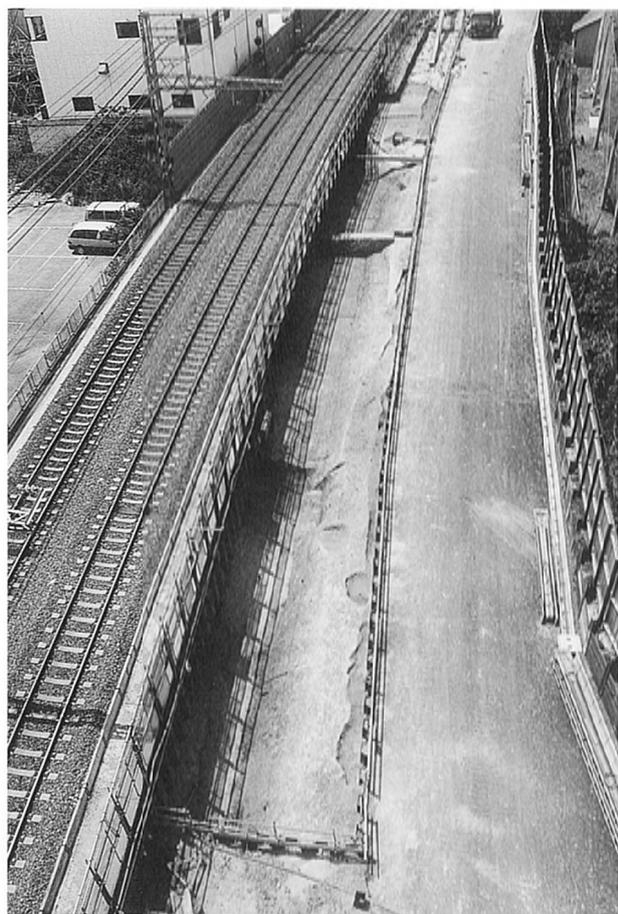
2 第2面全景（難波側から）



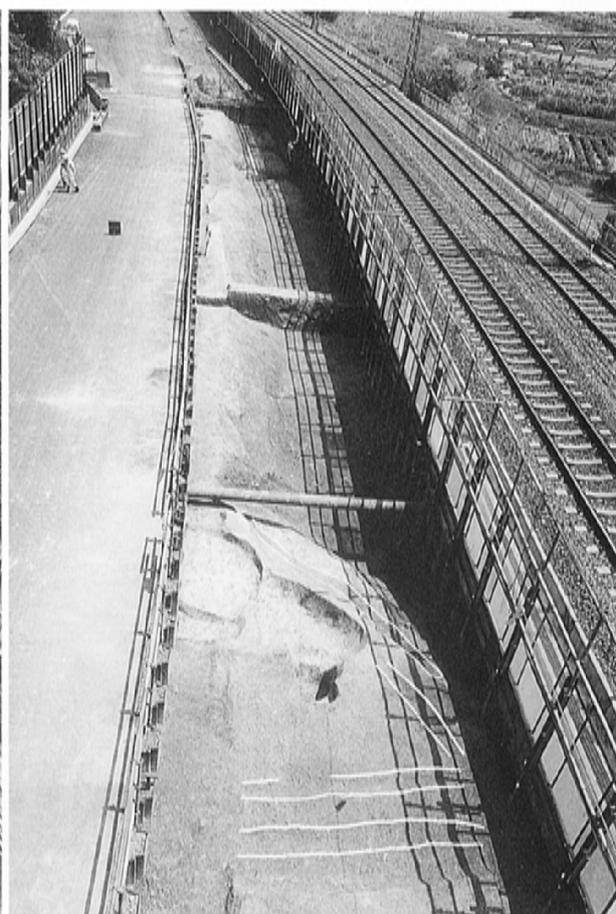
3 第2面東半部（難波側から）



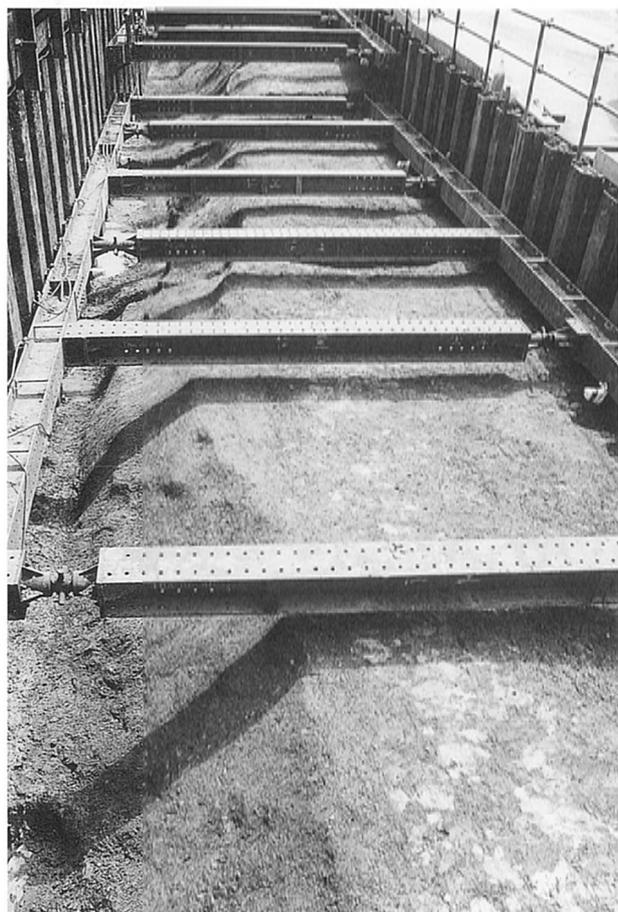
1 盛土層除去面〔第2面〕(航空写真)



1 線路盛土上面全景1(難波側から)



2 線路盛土上面全景2(和歌山側から)



3 線路盛土上面全景3(難波側から)

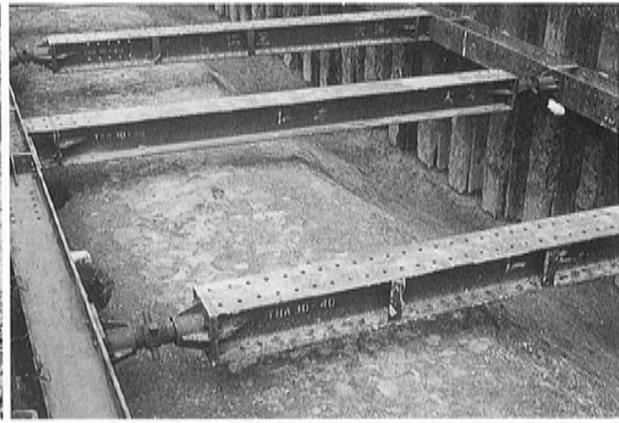


4 線路盛土上面全景4(和歌山側から)

図版24 D-1地区(上町東遺跡)遺構



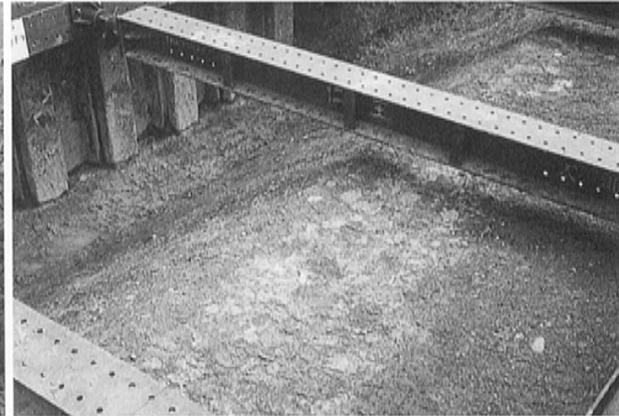
1 線路盛土断面細部1



3 線路盛土検出状況1



2 線路盛土断面細部2



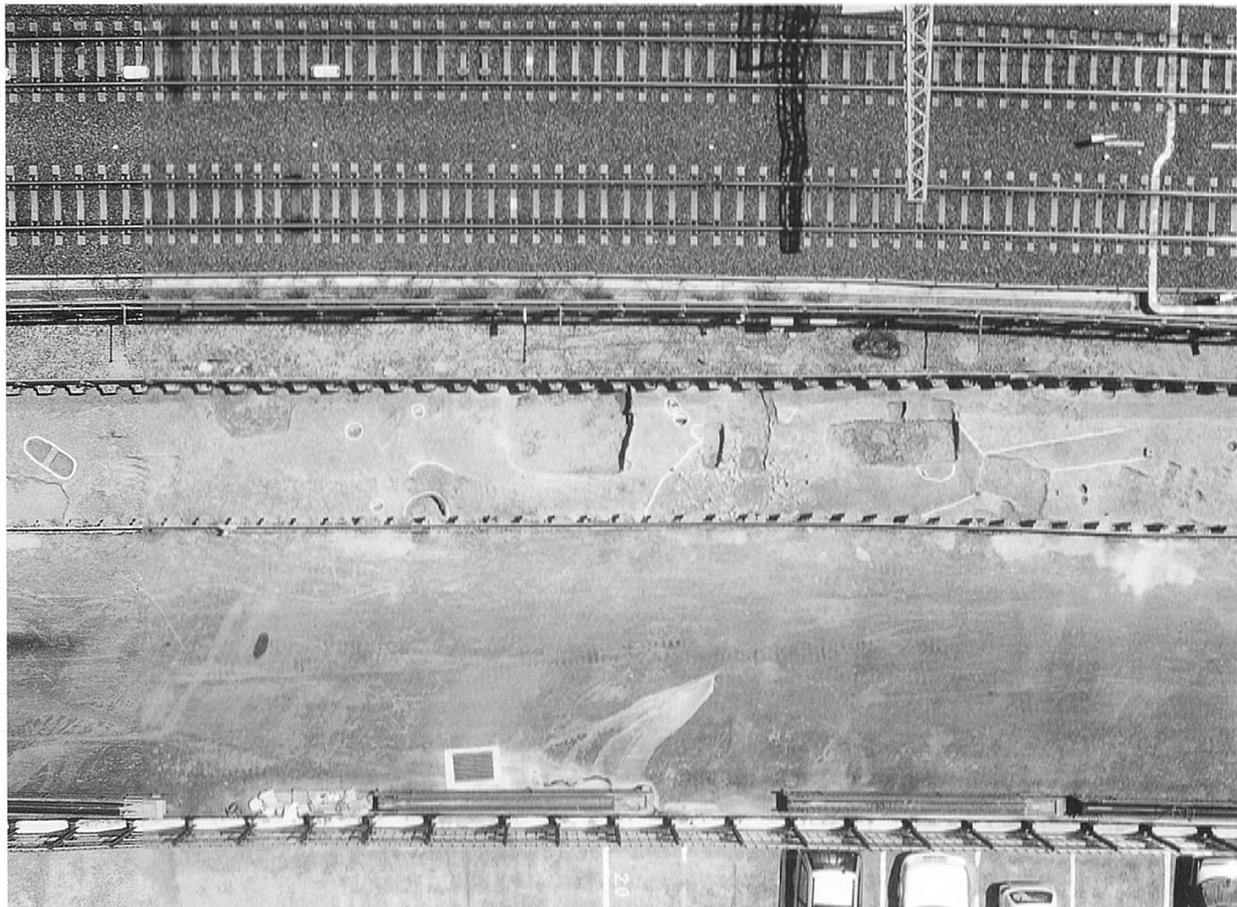
4 線路盛土検出状況2



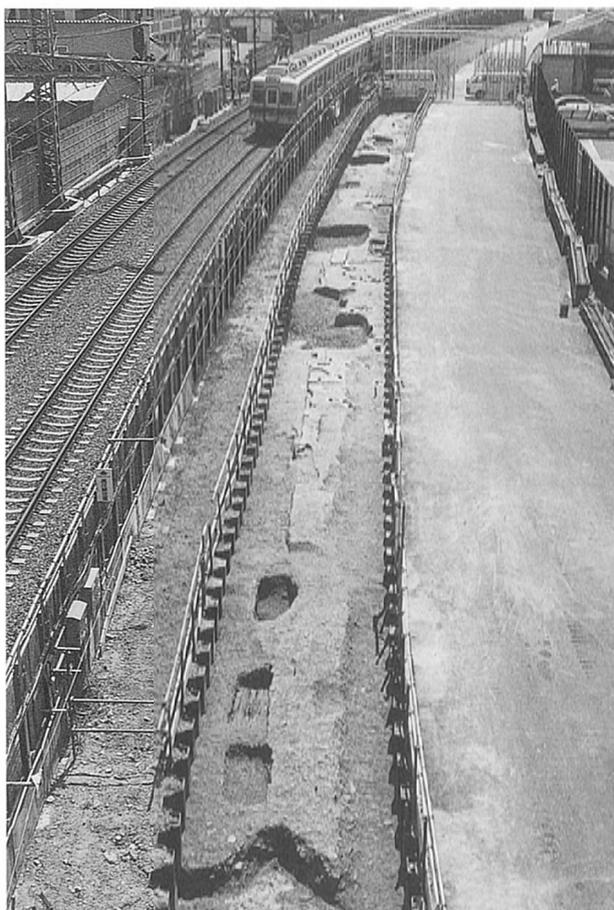
5 線路盛土断面



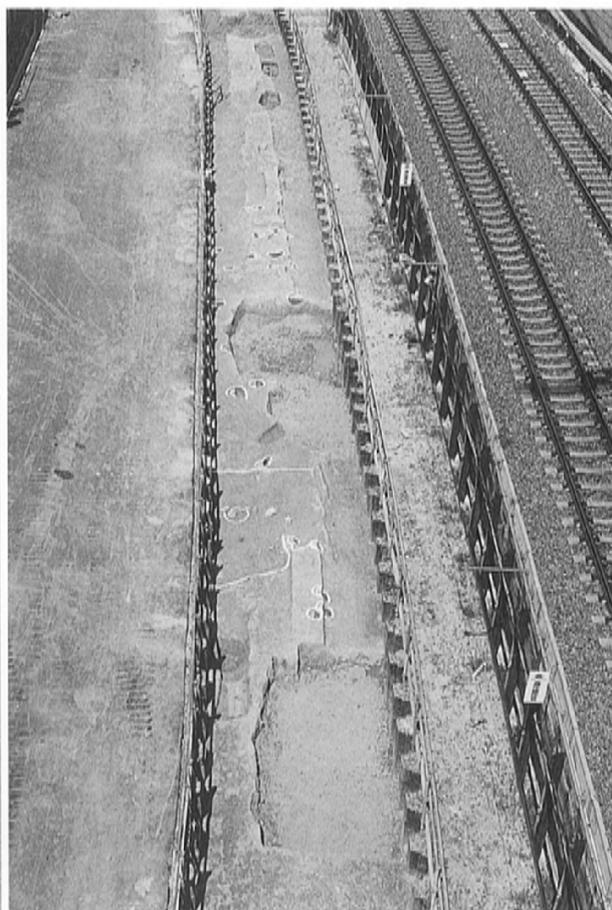
1 最終遺構面中央部(航空写真)



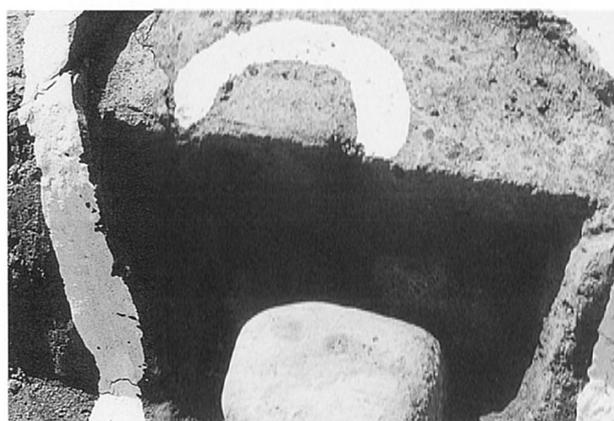
2 最終遺構面西半部(航空写真)



1 最終遺構面全景(難波側から)



2 最終遺構面中央部(和歌山側から)



3 ピットD-6 断面



4 ピットD-13 断面



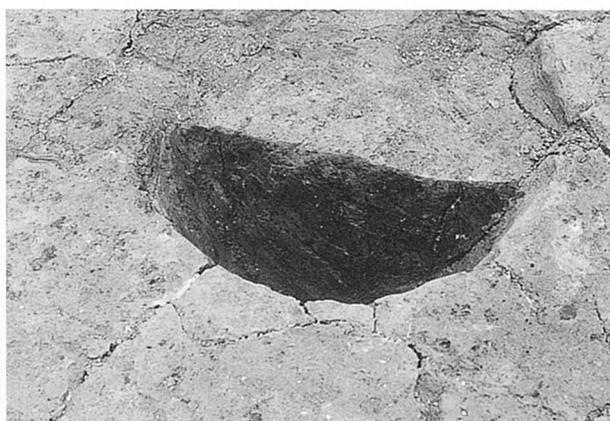
5 ピットD-16 断面



6 ピットD-22 断面



1 ピットD-29 断面



2 ピットD-40 断面



3 土坑D-44 断面



4 土坑D-44 完掘状況



5 土坑D-46 礫検出状況

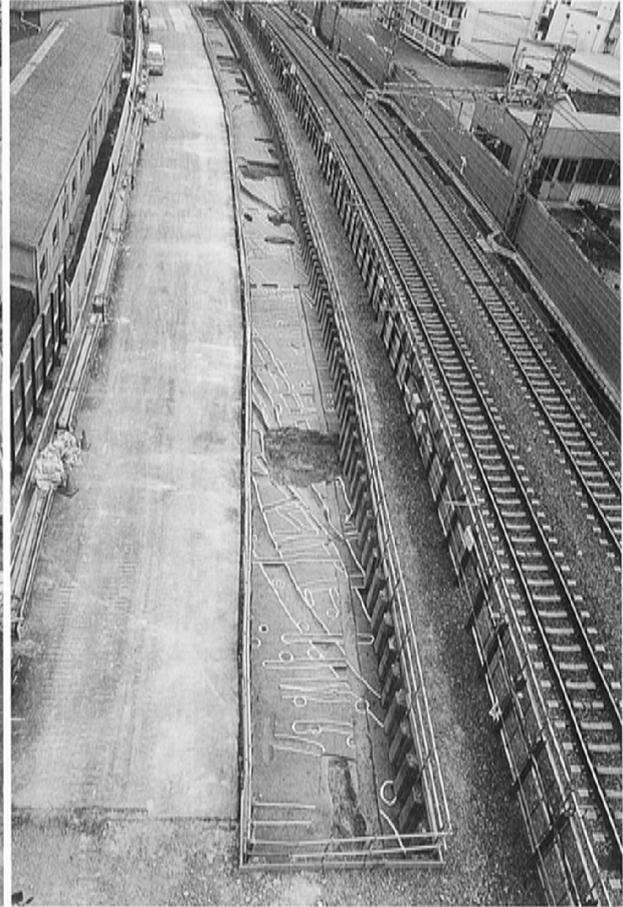


1 最終遺構面中央部（航空写真）

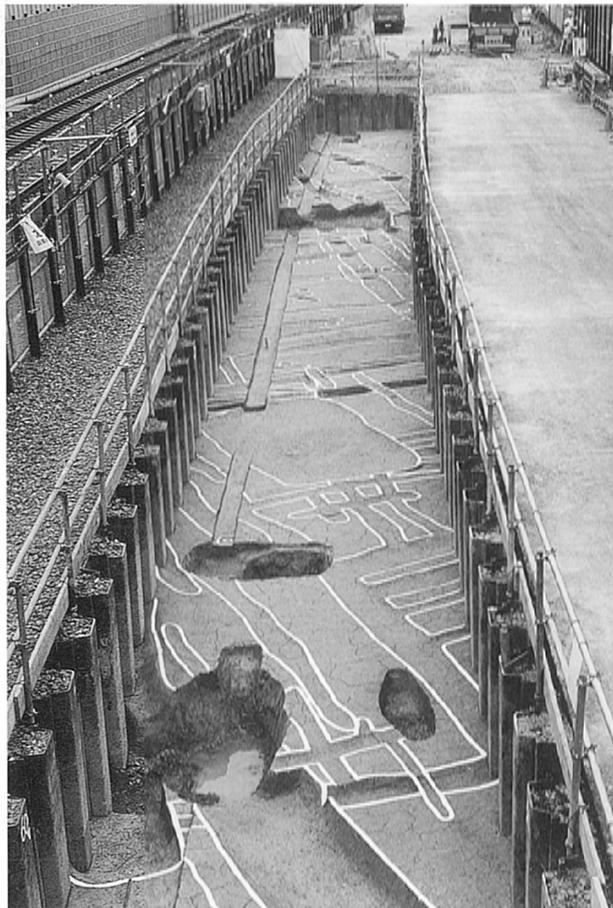
2 最終遺構面西半部（航空写真）



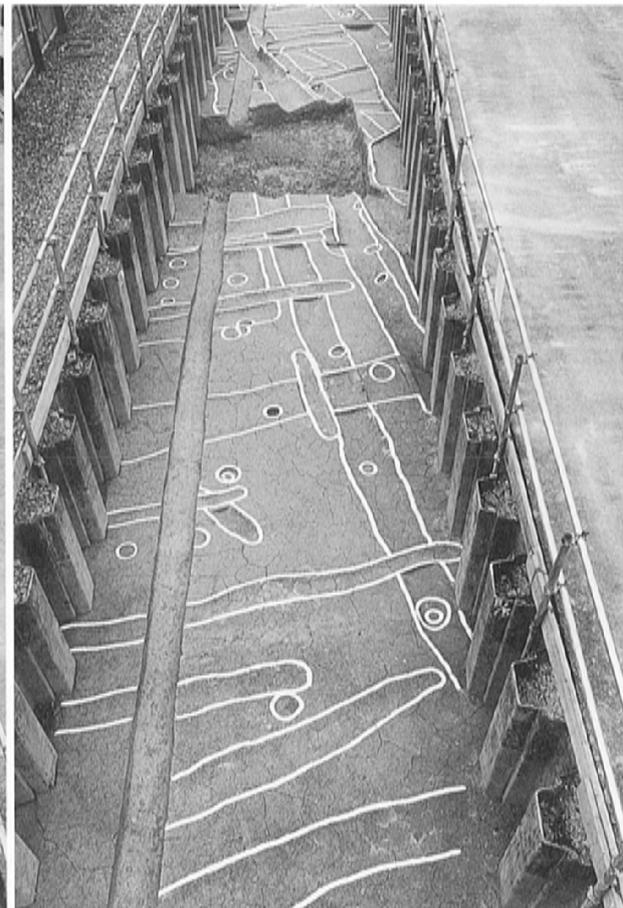
1 最終遺構面全景（難波側から）



2 最終遺構面全景（和歌山側から）

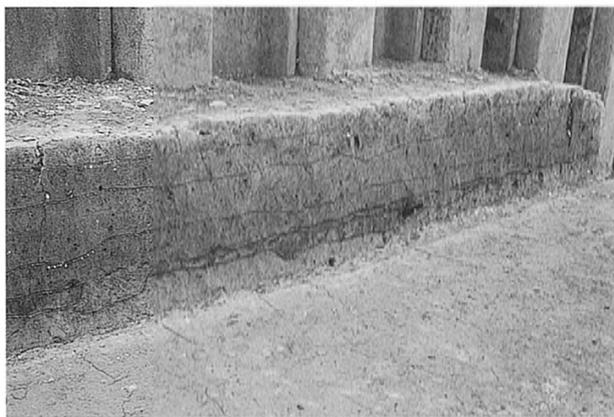


3 最終遺構面西半部（難波側から）

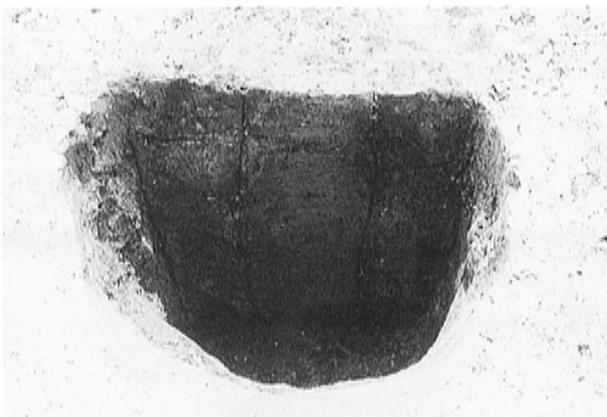


4 最終遺構面西半部中央（難波側から）

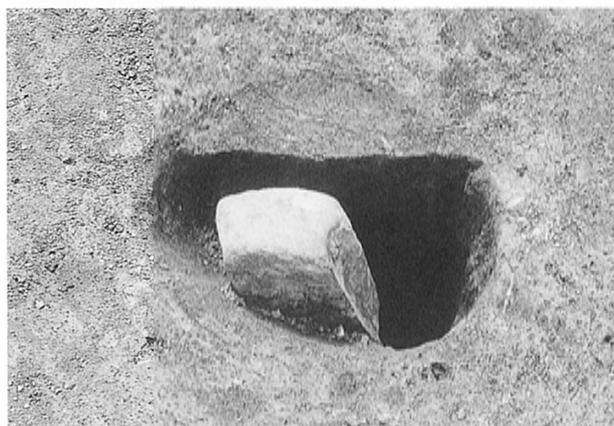
図版30 E地区(上町東遺跡)遺構



1 壁断面



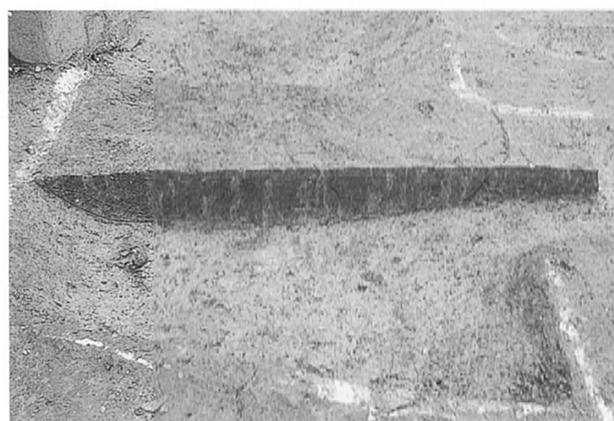
2 ピットE-29 断面



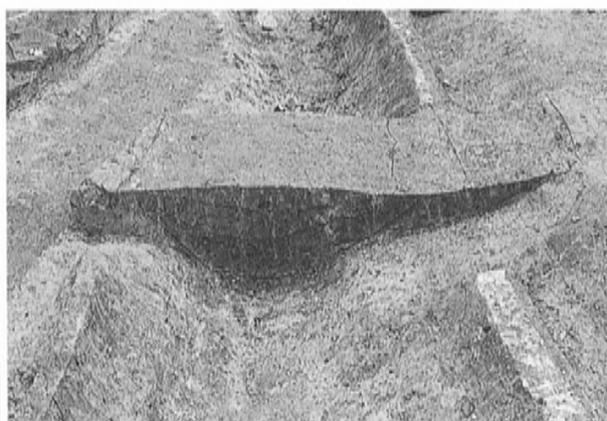
3 ピットE-88 断面



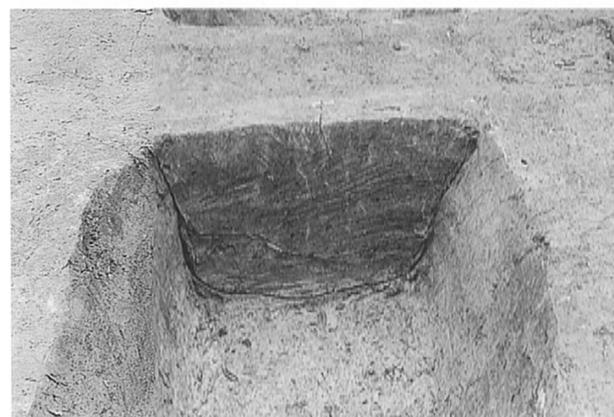
4 ピットE-89 断面



5 溝E-19 断面



6 溝E-28 断面



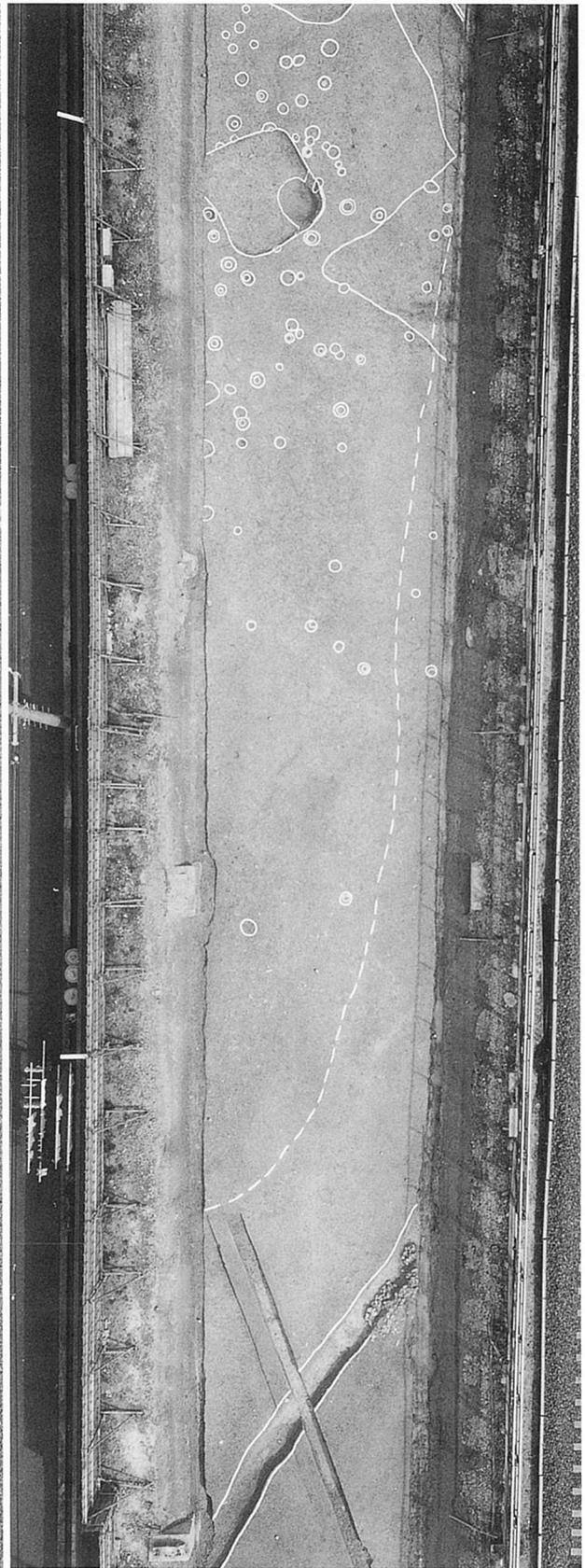
7 溝E-51 断面



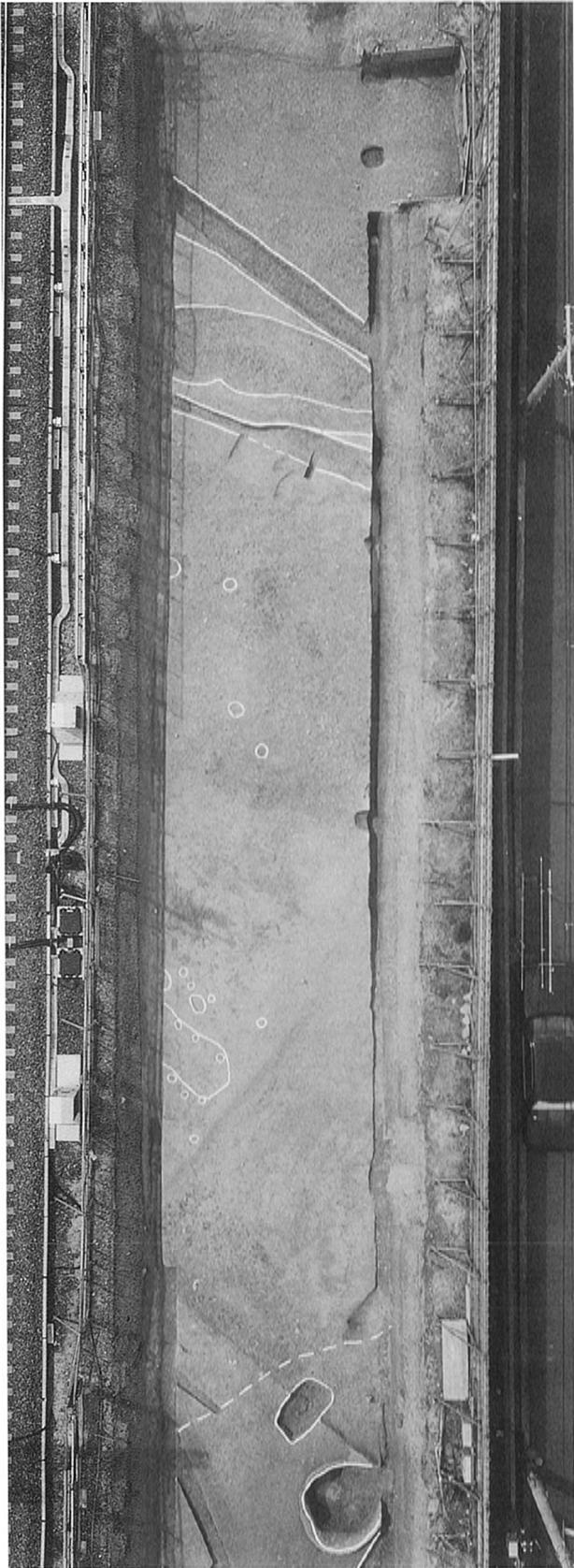
8 第3面西端部(和歌山側から)



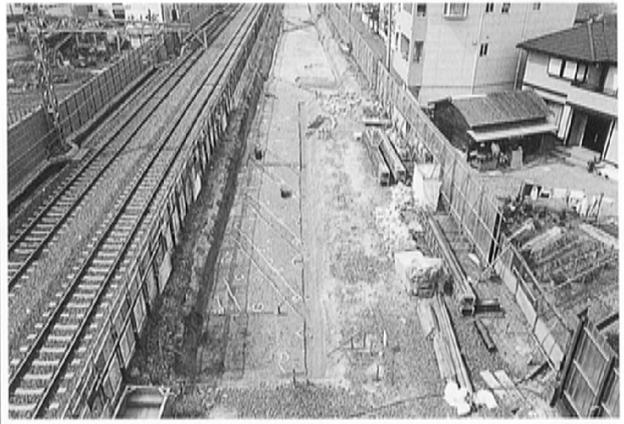
1 最終遺構面東半部（航空写真）



2 最終遺構面中央部（航空写真）



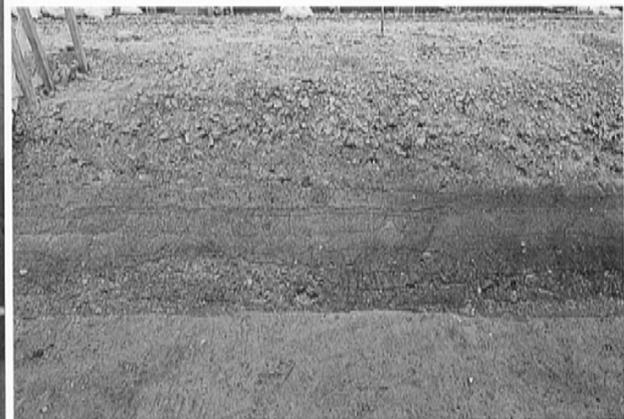
1 最終遺構面西半部（航空写真）



2 最終遺構面全景（難波側から）



3 最終遺構面全景（和歌山側から）



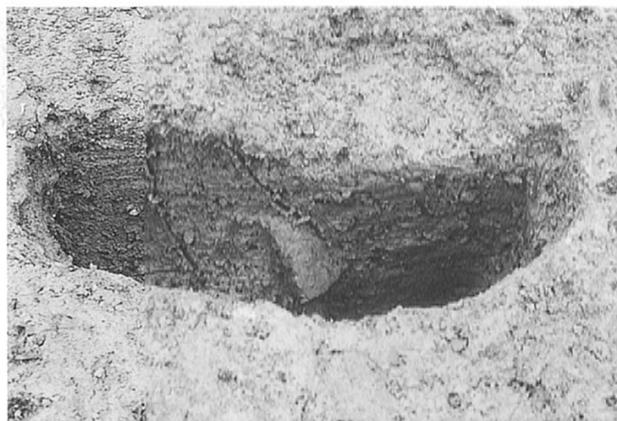
4 壁断面 東部



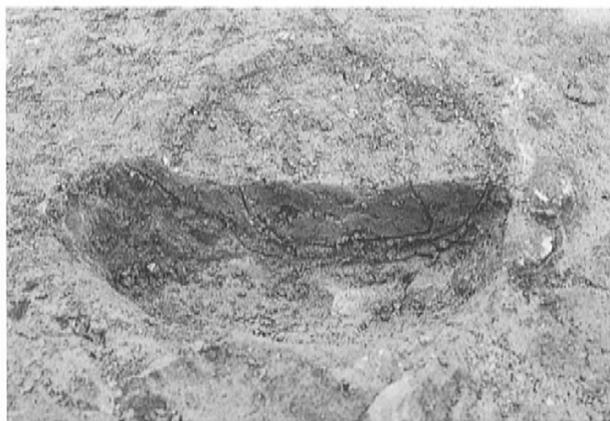
5 壁断面 西部



1 建物1全景



2 ピットF-34 断面



3 ピットF-35 断面



4 ピットF-177 断面



5 建物1柱穴完掘状況



1 建物2 全景



2 ピットF-37 断面



3 ピットF-40・230 断面



4 ピットF-53 断面



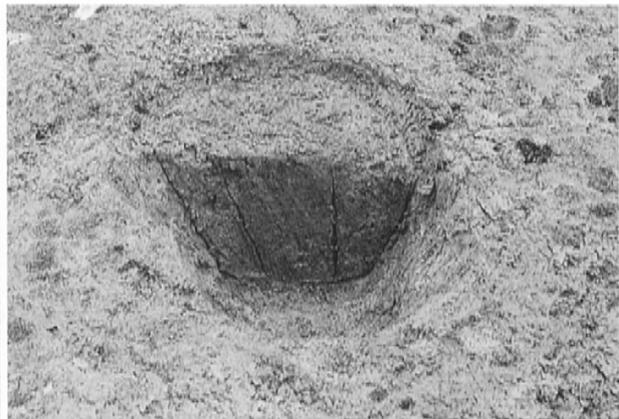
5 建物2 柱穴完掘状況



1 建物3全景



2 ピットF-83 断面



3 ピットF-92 断面



4 ピットF-180 断面

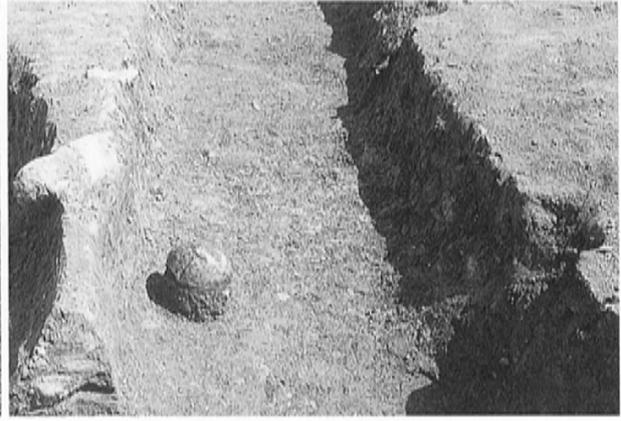


5 建物3柱穴完掘状況

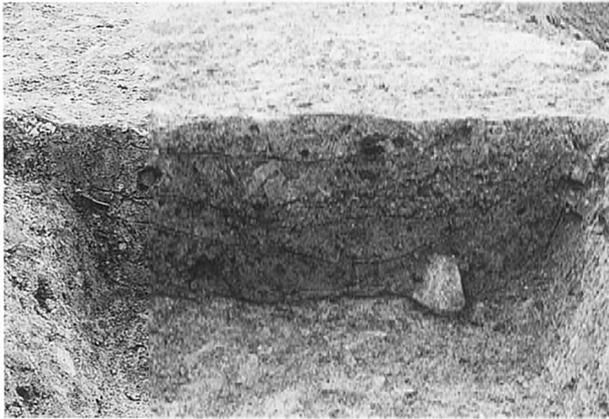
図版36 F地区(上町東遺跡)遺構



1 溝F-76 遺物出土状況1



2 溝F-76 遺物出土状況2



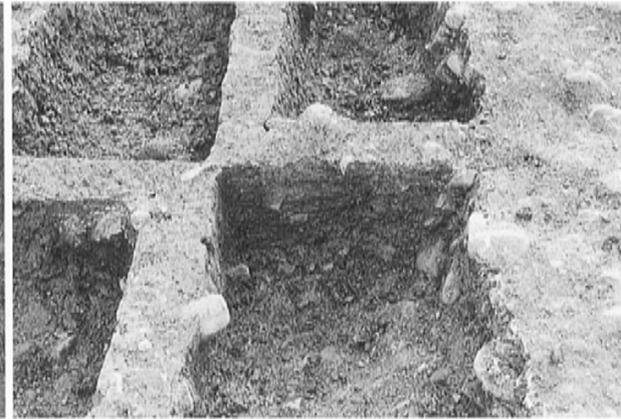
3 溝F-76 断面



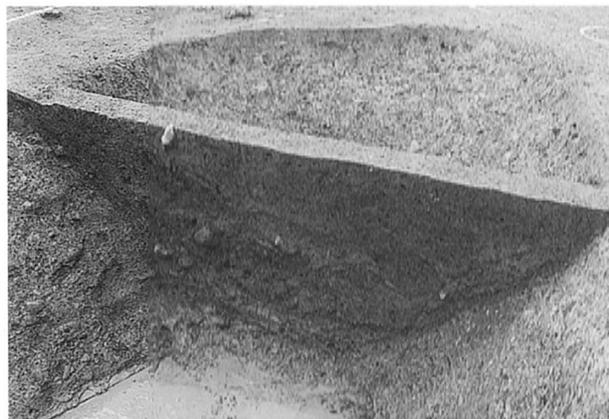
4 溝F-154 遺物出土状況



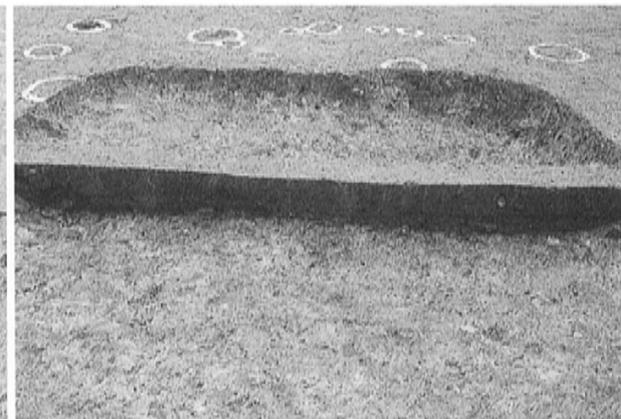
5 土坑F-74



6 土坑F-74 断面



7 土坑F-77 断面



8 土坑F-80 断面



1 土坑F-175 遺物出土状況



2 土坑F-176 断面



3 第4面西半部（難波側から）



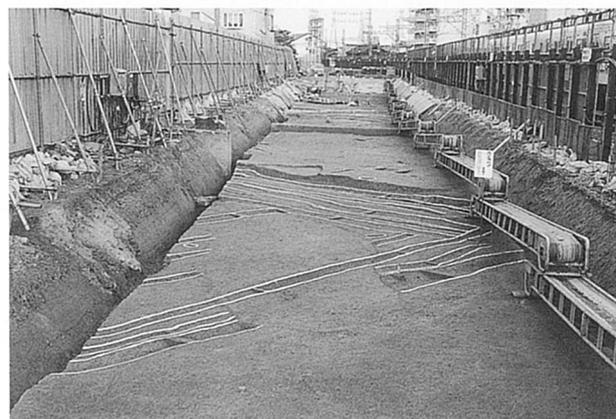
4 第4面東半部（和歌山側から）



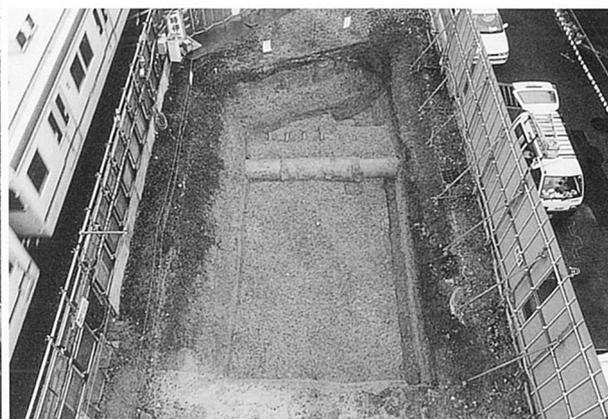
5 第3面東半部（和歌山側から）



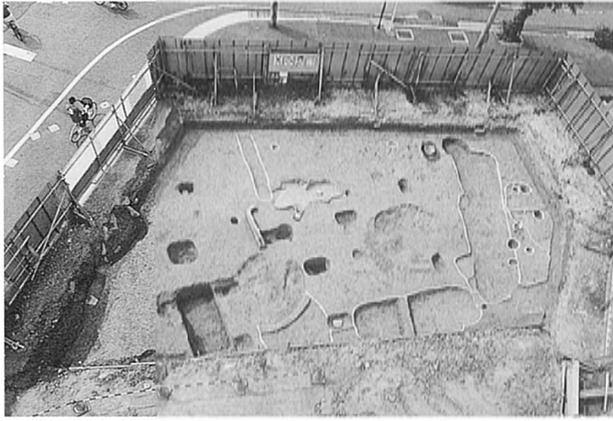
6 第3面西半部（難波側から）



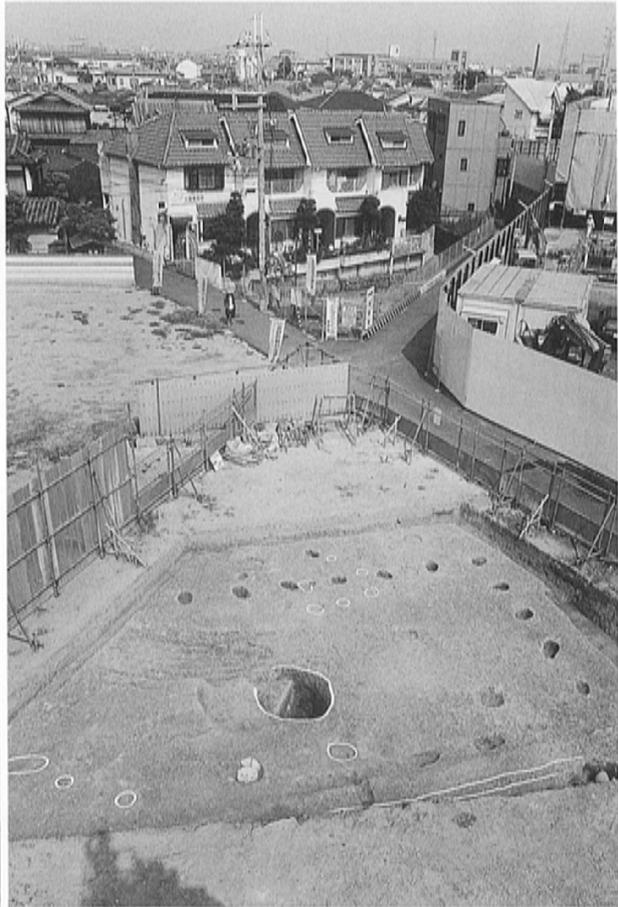
7 第3面西端部（和歌山側から）



8 西端追加トレンチ（難波側から）



1 西半部



3 東半部



2 近代の池



4 東壁断面



6 井戸1断面



5 井戸1上部断面



1



2



4



3



5



6



7



10



9



8



11



15



16



17



23



24

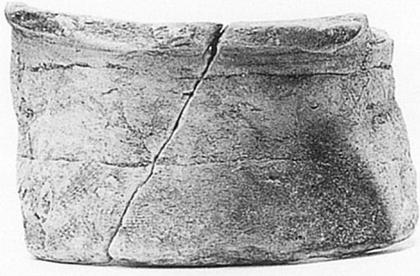


27



22

図版42 A地区（湊遺跡）遺物



28



32



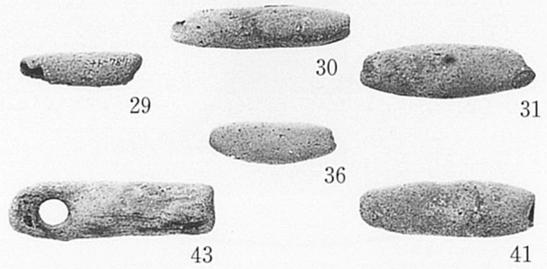
33



35



34



29

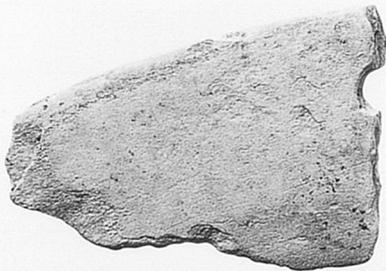
30

31

36

43

41



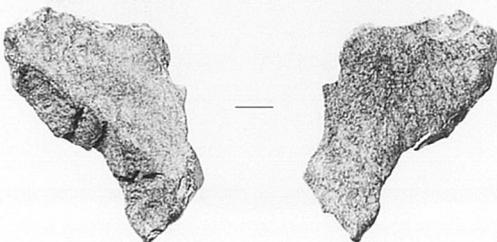
314



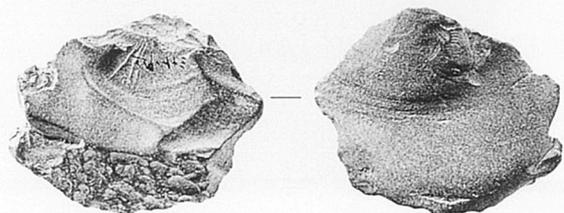
313



44



315



316



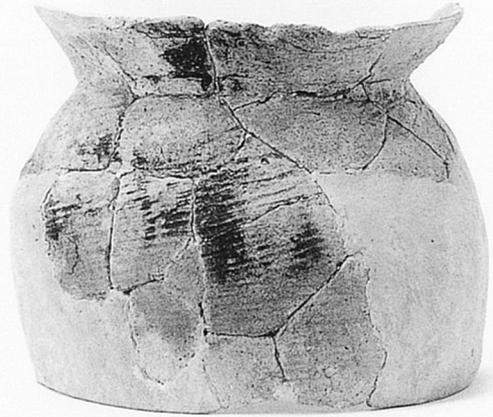
50



46



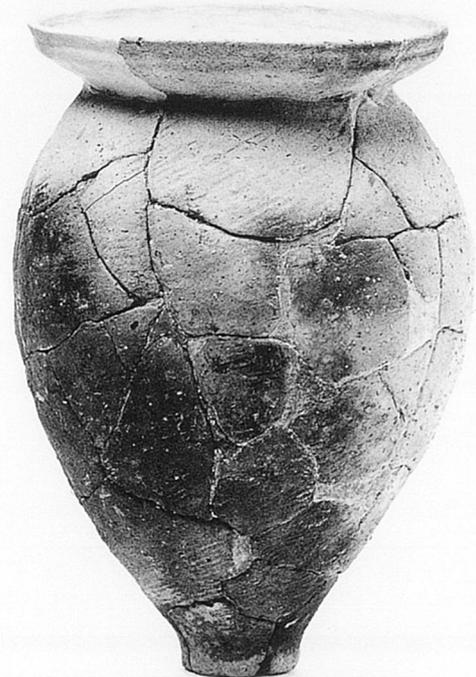
48



49



47



45



54



317



96



92



90



土器群3・溝B-1・39・83・包含層出土土器類、溝B-38出土石製品



104



105



108



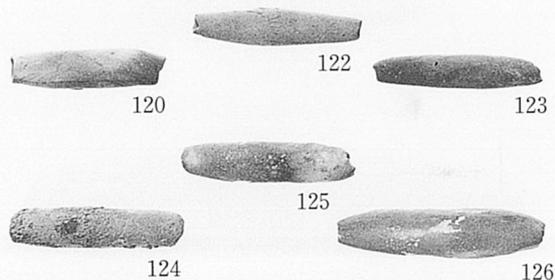
107



109

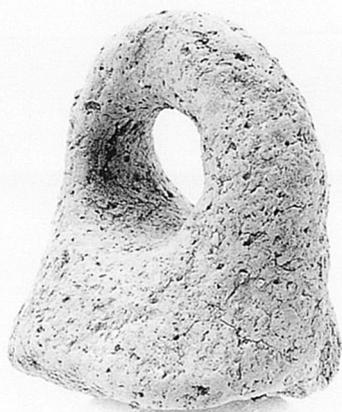


119





溝C-7・包含層出土陶磁器、溝C-1・7出土土製品



144



146



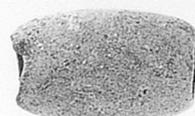
145



143



148



147



149



139



142



133



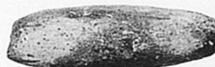
141



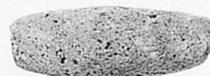
151



153



156



158



152



155



161



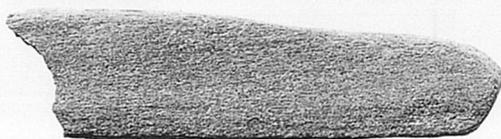
164



159



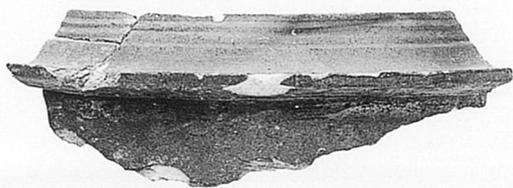
163



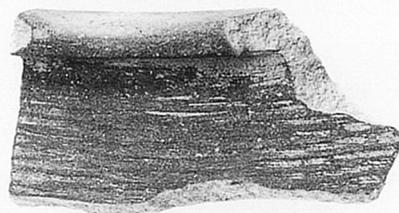
166



165



168



172



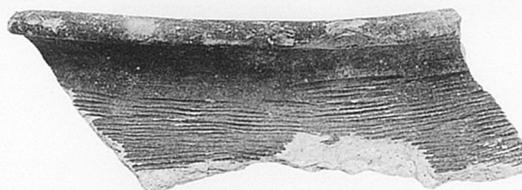
170



173



324



174



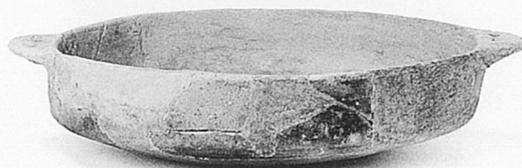
179



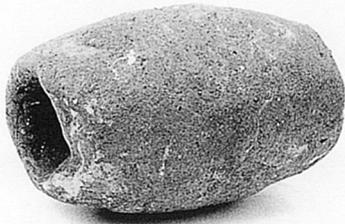
171



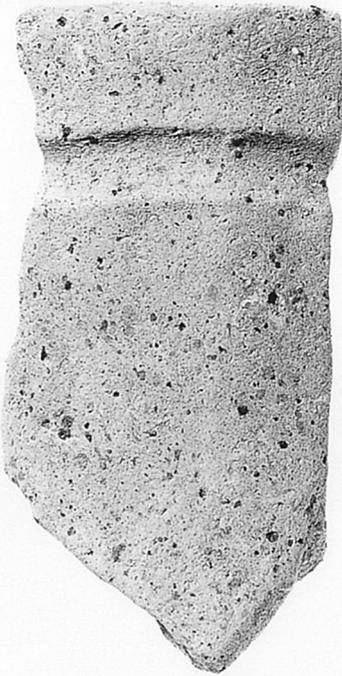
325



184



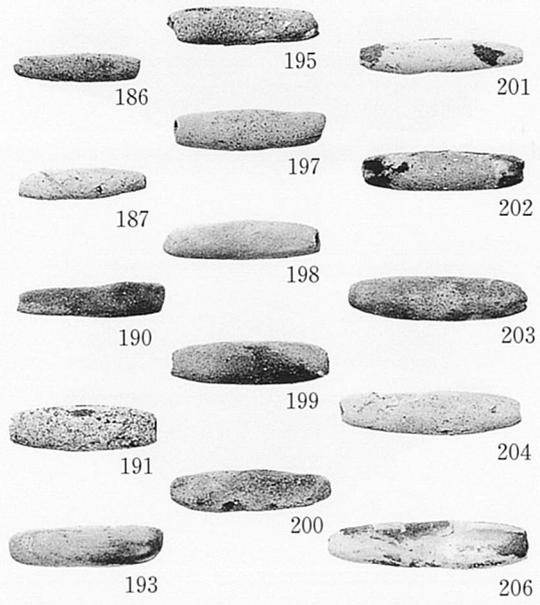
207



181

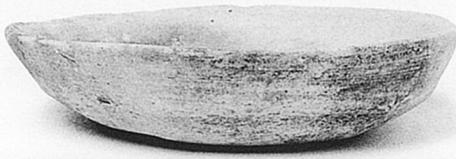


326

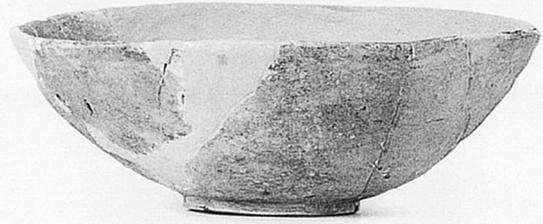


177





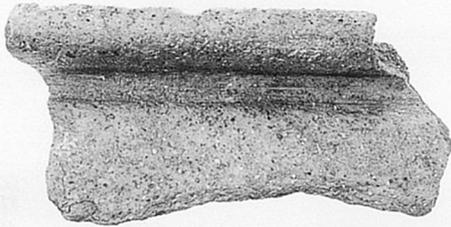
209



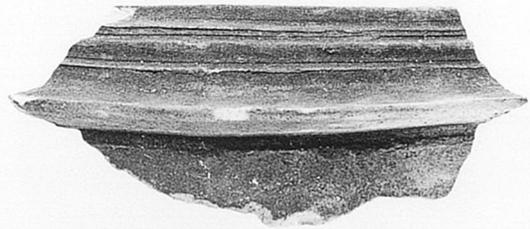
211



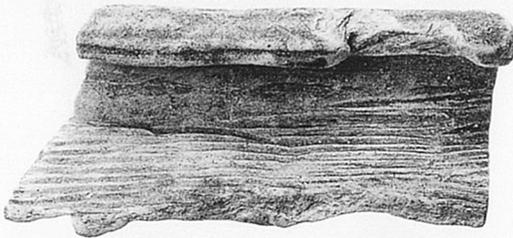
212



215



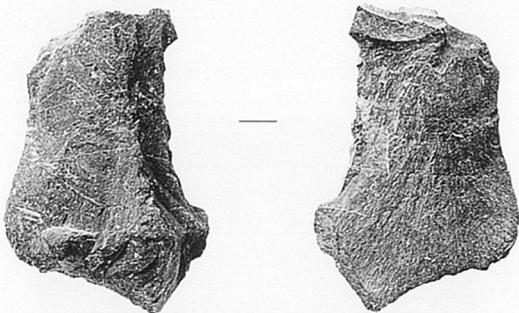
213



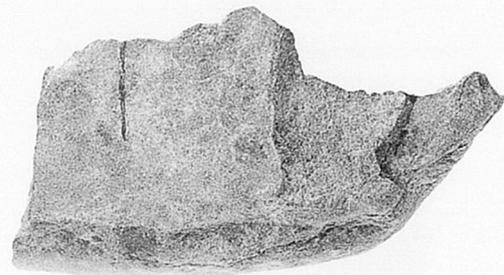
224



216

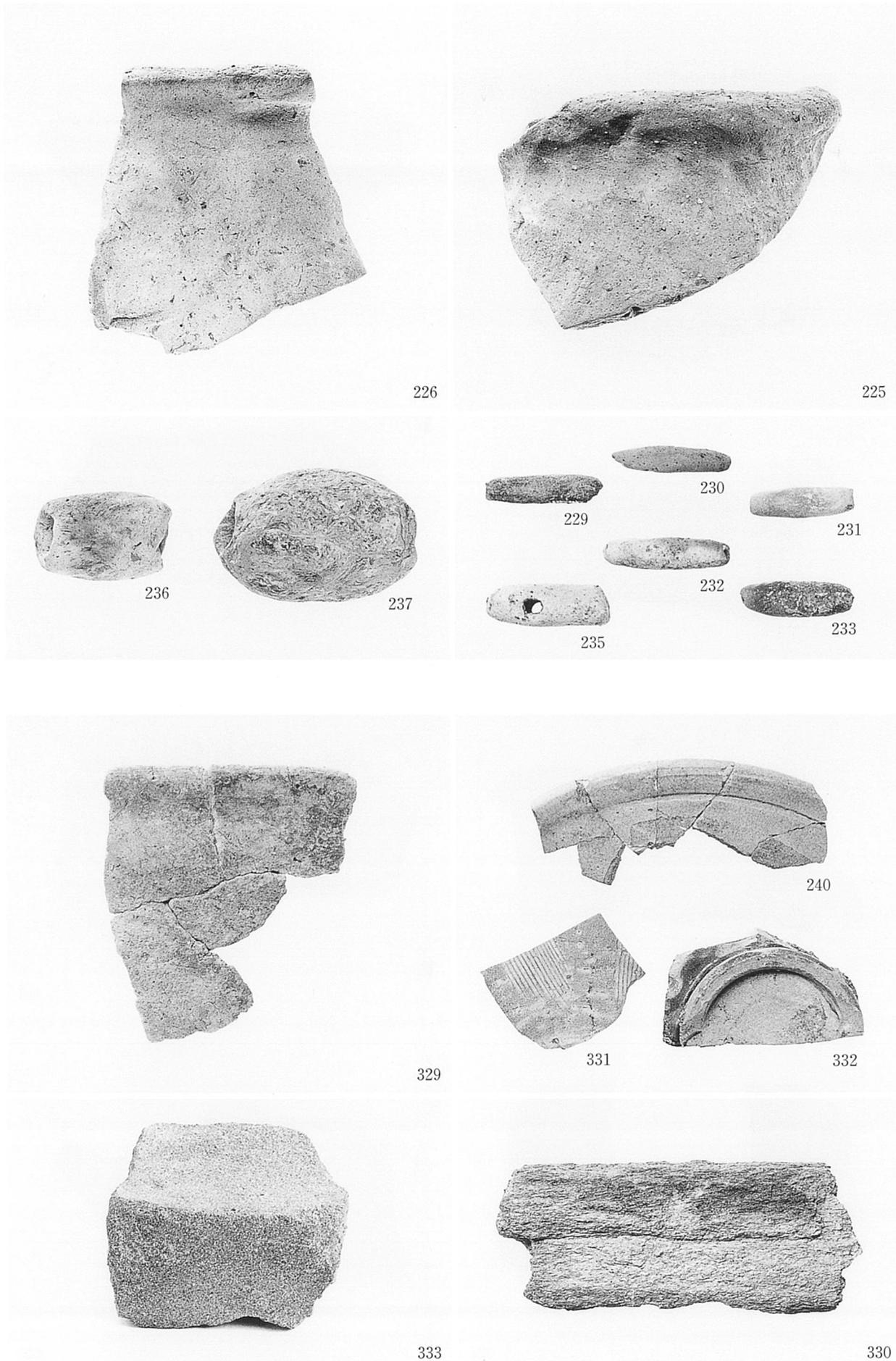


327



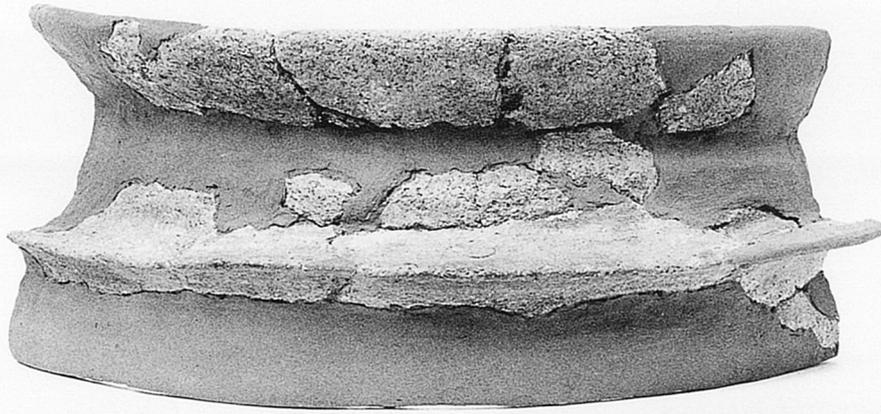
328

図版52 D-2・E地区（上町東遺跡）遺物



ピットD-29・土坑D-44・46・包含層出土土器類、溝E-34・51・77・包含層出土土器類・石製品





334



256



258



259



260



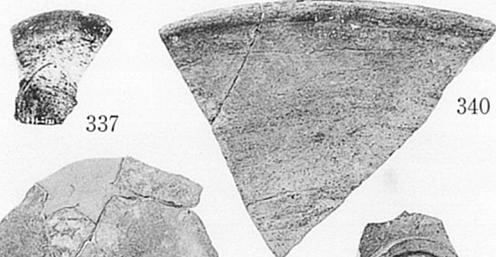
263



335



336

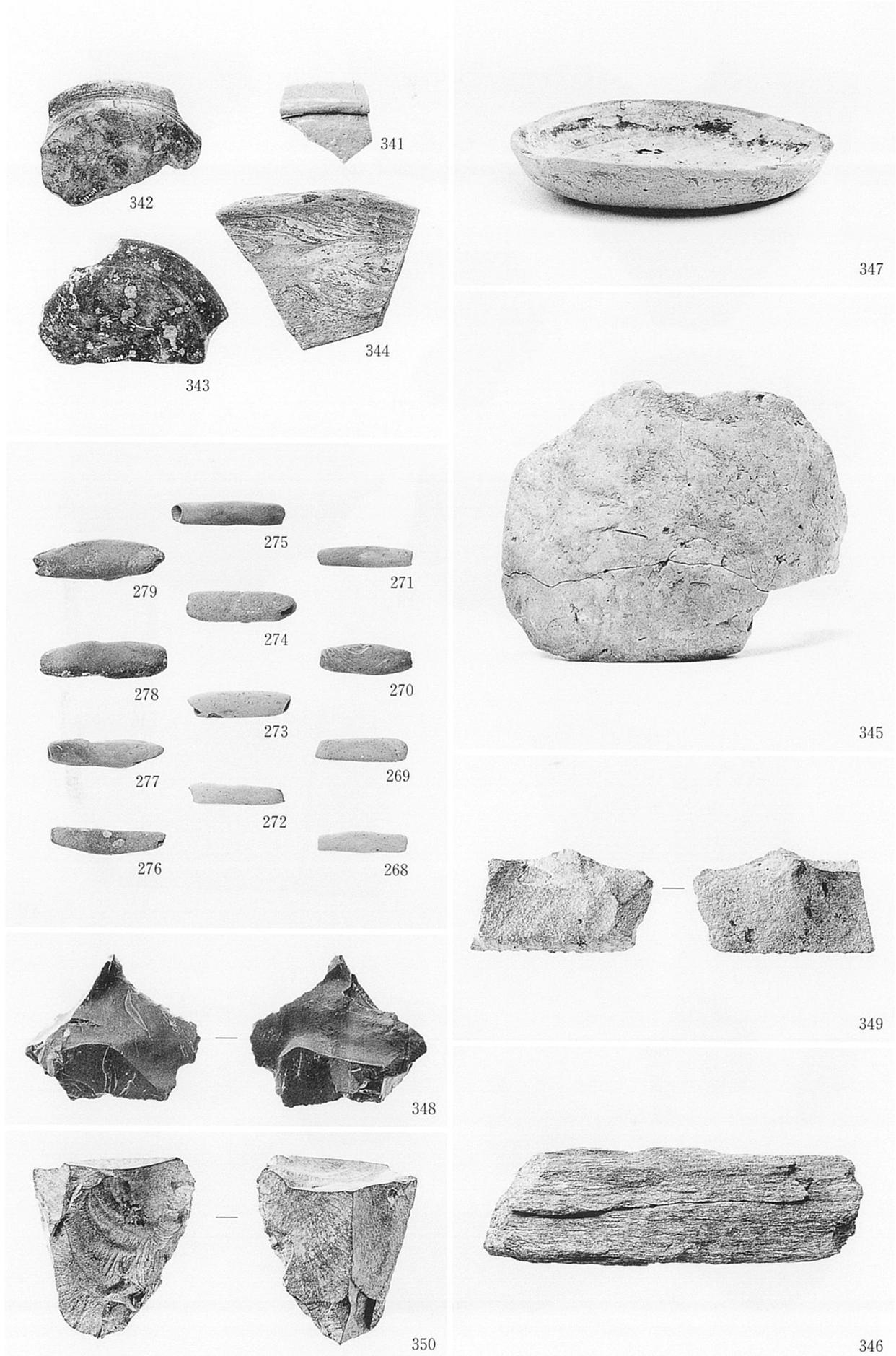


337

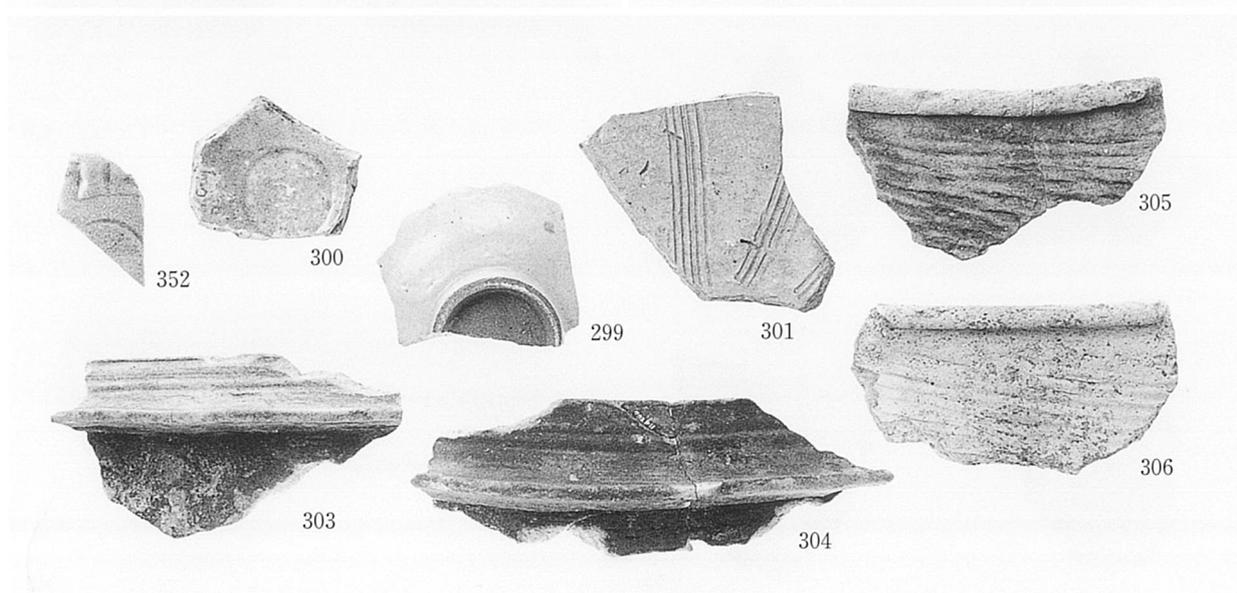
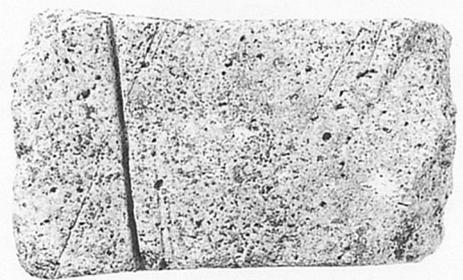
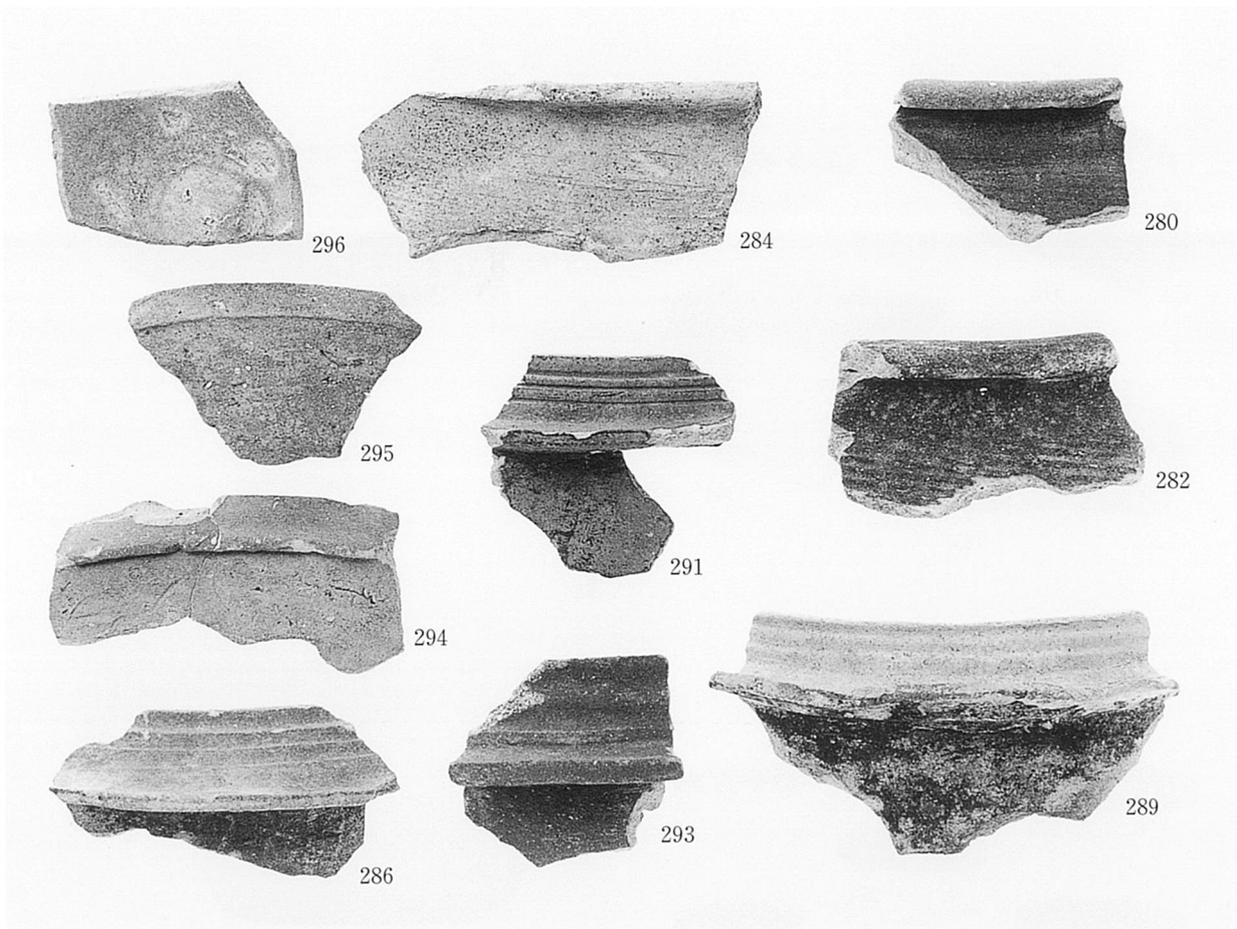
340

338

339



ピットD-22出土土器、土坑D-44出土石製品、F-77・175・包含層出土土器類・石製品



報告書抄録

ふりがな	いずみさのしみなと・あさひちよう・おおみやちようしょざい みなといせき ほか							
書名	泉佐野市湊・旭町・大宮町所在 湊遺跡他							
副書名	南海本線（泉佐野市）連続立体化工事（第1工区）に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第87集							
編著者名	中村 淳磯							
編集機関	（財）大阪府文化財センター							
所在地	〒590 - 0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791 FAX 072-299-8905							
発行年月日	2003年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなと 湊	大阪府 泉佐野市 みなと 湊	27213	38	34° 24′ 40″	135° 19′ 40″	1998年 12月8日 ～	2,979 (1998～1999 年度) 215 (2000年度)	南海本線連続 立体交差事業
うえまちひがし 上町東	大阪府 泉佐野市 あさひちよう おおみやちよう 旭町・大宮町	27213	85	34° 24′ 34″	135° 19′ 31″	2001年 3月31日		
わかみや 若宮	大阪府 泉佐野市 おおみやちよう 大宮町	27213	83	34° 24′ 30″	135° 19′ 20″			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
湊	集落	弥生時代後期～近世		ピット・溝・土坑・ 土器群・自然流路		弥生土器・製塩土器・ 土師器・須恵器・瓦質 土器・陶磁器・瓦		製塩土器を主体とする 土器群検出
上町東	集落	中世前期～近世		掘立柱建物・ピッ ト・溝・土坑		土師器・須恵器・瓦 器・瓦質土器・陶磁 器・瓦		
若宮	集落	中世後期～近世		ピット・井戸・土坑		土師器・須恵器・瓦質 土器・陶磁器		

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第87集

泉佐野市湊・旭町・大宮町所在

湊 遺 跡 他

－南海本線（泉佐野市）連続立体化工事（第1工区）

に伴う発掘調査報告書－

発行年月日 2003年2月28日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所